

手ヲ消毒スルヲ要ス又病室ヲ去ルトキハ作業衣・「マスク」及ヒ上靴等ヲ脱キテ室ニ留ムヘシ

第四五七 傳染病者ヲ看護スル者ハ入浴シ被服ヲ交換シタル後ニアラサレハ他ノ患者ニ接スヘカラス

第四五八 消毒ノ事ハ第八編ニヨルヘシ

第五十三章 精神病者ノ看護

第四五九 精神病者ハ精神ニ病アルノミナラス多クハ體ニモ病アリ看護卒ハ殊ニ懇切ニシ一層鄭重ニ取扱フヘシ

精神病者ノ言フコト、ナスコトハ責任ナキモノナリ、タトヒ罵詈、嘲弄シ又ハ暴行ヲ加フコトアルモ堪ヘ忍ヒテ温和ニ取扱フヘシ

第四六〇 精神病者ハ己ヲモ人ヲモ害セントスルコトアリ故ニ別室ニ入ルルモノト

ス。常ニ番ヲ怠ラス其ノ舉動ヲ觀察シ逃走・自殺・等ヲ防クコト、ニ注意スヘシ

第四六一 看護卒如何ニ諭スモ又、自ラ味ヒテ危険ナキヲ示スモ飲食セサル精神病者アリ、此ノ時其ノ飲食物ヲ室ノ隅又ハ或ル場所ニ隠ス眞似シテ患者ノ之ニ心付ク様ニシ其ノ室ヲ去ルトキハ急ニ行キテ食スルコトアリ

第四六二 衣食其ノ他、總テノ物ヲ汚ス患者アリ殊ニ身體・被服ノ清潔ニ注意スヘシ

第四六三 精神病者ハ多言スルアリ、沈黙スルアリ、多言シテ其ノ言フ所、種々錯亂セルアリ、沈黙シテ一處ヲ凝視スル者アリ、侮辱又ハ脅迫ヲ受タルカ如キ狀ヲナシテ室ノ隅ニ伏シ耳目ヲ蔽フモノアリ。言語・動作ヲ一々觀察シ置クヘシ

第四六四 看護卒ハ物、靜ニ穩カナル舉動ニテ待遇スルヲ要ス

説明・勸告・等ハ却テ害アルコトアリ之ニ反シテ精神健康ナル者トシテ遇スルトキハ患者ヲシテ安ンセシムルコトアリ

第四六五 精神病者入院スルトキハ小刃物・紐類又ハ其ノ他ノ危險物ヲ携ヘサルヤ

ヲ檢シ若シ此ノ如キ物ヲ携ヘタルトキハ之ヲ欺キ取リ又ハ竊ニ奪ヒテ規定ニ從ヒ納メ置クヘシ

精神病室ニハ寢具ノ外、一切物ヲ置カサルヲ例トス

第四六六 書籍・書狀ヲ渡シ訪問者ニ達ハス等、總テ軍醫ノ指圖ニ從フヲ要ス

第五十四章 瀕死者ノ看護

第四六七 患者死ニ迫ル(瀕死)トキハ、呼吸緩トナリ且ツ困難ニシテ喘鳴シ、脈ハ疾ク細ク、顔色ハ蒼白ク唇ハ青色ヲ帶ヒ眼ハ窪ミ下眼瞼・下顎垂レ、冷汗ヲ流シ、往々兩便失禁シ、手足冷エ其ノ運動、力ナキニ至ル

第四六八 瀕死者ハ別室ニ入レ置クヲ常トス、若シ同室者アルトキハ他ノ患者ニ見セサル様、屏風等ヲ繞ラスヘシ

第四六九 瀕死者ニハ痰・唾ヲ拭ヒ唇ヲ濕シ少量ツツ藥・水等ヲ與ヘ、新シキ空氣ヲ

送り、汗ヲ拭ヒ、四肢ヲ温メ蚊・蠅ヲ遠フ等懇切ニ看護スヘシ

第五十五章 死後ノ處置

第四七〇 患者死ストキハ布ニテ顔ヲ被ヒ命ヲ待チテ屍室又ハ別室ニ移シ不用ノ寢具等ヲ除クヘシ

第四七一 死後、數時間或ハ暫時ニシテ身體強直(死後強直)ス故ニ強直セサル前ニ體ヲ清潔ニシ其ノ位置ヲ正シ納棺ニ便ナラシム、口開キアルトキハ指ニテ閉チ暫ク壓シ、口開キアルトキハ暫ク不顎ヲ支ヘ已ムヲ得サルトキハ頤ニ布片ヲ掛ケテ結フコトヲ得、其ノ他、上官ノ命ヲ待チ鼻・口・肛門ニ綿ヲ十分挿入シ汚物ノ漏出スルヲ防クヘシ

第四七二 頓死者又ハ死セルコト確ナラサル者ハ軍醫ノ死ト認ムルマテ被服ノ緊縛ヲ緩メ寢具ヲ被ヒテ暖ナル室ニ置クヘシ

怪我・自殺・其ノ他不明ノ原因ニテ假死トナレル者ニハ救急處置以外ノ處置ヲナシ
ヘカラス

第四七三 傳染病者ノ死體ノ處置ハ第八編ニヨルヘシ

第五十六章 治療ノ助手

第一 與 藥

第四七四 藥ヲ與フルニハ示サレタル時間ト分量トヲ誤ラサルヲ要ス

第四七五 起キ上ルコト能ハサル者又ハ安靜ヲ要スル者ニ藥ヲ服用セシムルニハ顔
ヲ横ニシ頭ヲ少シ高クシテ與ヘ、又、重症者ニアリテハ顔ヲ横ニセル儘、匙又ハ吸
吞ヲ用ヒテ與フヘシ

第四七六 藥ヲ與フルニ患者之ヲ拒ムコトアリ看護卒ハ懇切ト熱心トヲ以テ之ヲ服
用セシムヘシ。一旦、口ニ含ミ看護卒ノ去ルヲ窺ヒテ吐ク者アリ此ノ場合ニハ服

用セシメタル後、談話セシム

味惡キ藥ヲ服用セシメタル後ニハ少量ノ水ヲ與ヘ又ハ含嗽セシムヘシ

第四七七 水劑ハ沈澱シ又ハ上層ト下層ト成分ヲ異ニスルニ至ルモノアルカ故ニ與
フル前ニ振盪スヘシ但シ飽和劑ハ振盪ス、カラス

第四七八 散劑ハ先ツ患者ニ少量ノ水ヲ含マシメ次ニ藥劑ヲ與ヘ水ニテ嚥下セシ
メ、又ハ藥杯等ニ移シ少シク水ヲ加ヘ搔キ交セテ與ヘ若シ器底ニ殘ルトキハ更ニ
水ヲ加ヘ搔キ交セテ再ヒ與フヘシ但シ散劑ハ口内・齒齦・等ニ附クコトアルカ故ニ
後ニ少量ノ水ヲ與フヘシ

「キニーネ」ノ如ク甚タ苦キモノハ「オブラート」ニ包ミ少量ノ水ニテ嚥下セシムル
ヲ常トス

第四七九 丸劑ヲ服用セシムルニハ之ヲ成ルヘク舌ノ後方ニ入レ少量ノ水ニテ嚥下
セシムルヲ可トス

第四八〇 膠囊ノ服用法ハ丸劑ニ同シ

第四八一 小サキ錠劑ノ服用法ハ丸劑ニ同シ、大ナルモノハ割リテ服用セシムヘシ

第二 吸入

第四八二 吸入藥ハ通常、蒸氣吸入器ニテ霧トナシ患者ノ鼻及ヒ口ニ向ケテ吸入セシム

蒸氣吸入器ハ釜・火袋・嘴管・藥杯・吸入口・酒精燈ヨリ成ル。之ヲ用フルニハ釜ニ二分ノ一乃至三分ノ二ニ至ルマテ水又ハ湯ヲ盛り、嘴管ヲ連ネ酒精燈ニテ沸カシ（水量多キトキハ爆裂シ又ハ熱キ湯、噴キ出シテ火傷ヲ起スコトアリ）嘴管通スルヤ又藥液ノ吸ヒ上ケラレテ霧トナルヤヲ試ミ、同時ニ防水性材料ヲ患者ノ被服・寢具ソ上ニ被ヒ、藥液ノ霧トナリテ出ツルヲ確メタル後、吸入器ヲ適宜ノ所ニ置キ口ヲ開キテ靜ニ呼吸セシム、此ノ際臉盤ヲ用ヒ滴リ落ツル液ヲ受クルモノトス

第四八三 酸素ヲ吸入セシムルニハ酸素吸入器ヲ用フ

第二 點眼

第四八四 目ニ藥ヲサスタ點眼ト云フ。點眼管ハ通常、硝子管ノ一端尖リ他端ニ「ゴム」帽ノ附キタルモノナリ、帽ヲ指ニテ壓シ管ノ尖ヲ藥ノ中ニ入レ指ヲ放テハ藥ハ管ニ上リ帽ヲ壓セハ滴リ出ツルモノナリ

第四八五 點眼スルニハ豫メ手指ヲ消毒シ、患者ヲシテ椅子ニ倚リテ頭ヲ正シク仰向ケシメ又ハ仰臥セシメ、眼瞼ニ附着セル分泌物ヲ脫脂綿ニテ拭ヒ取リタル後、脫脂綿ノ一片ヲ下眼瞼ニ當テ其上ヨリ左ノ拇指ニテ靜ニ下眼瞼ヲ引キ下ケ示指ヲ輕ク上眼瞼ニ當テ要スレハ之ヲ引上ケ第四・第五指ヲ患者ノ額又ハ額ニ當テ患者ヲシテ十分ニ上方ヲ眺メシメ、右ノ拇指・示指・中指ニテ點眼管ヲ持チ小指ヲ患者ノ額又ハ額額ニ當テテ手ノ動搖ヲ防キ點眼管ヲ角膜面ニ對シテ斜メニシ示指ニテ「ゴム」帽ヲ壓シ藥ノ一・二滴ヲ下眼瞼ニサシ、終リテ脫脂綿ニテ藥ノ溢レタルヲ拭フヘシ。藥ヲサシタル後、上眼瞼ヲ撮ミテ前下方ニ引クトキハ藥ハ能ク全般

ニ擴カルモノトス

分泌物多キトキハ硼酸水ニテ眼ヲ洗ヒタル後、點眼スルヲ常トス

第四八六 硝酸銀水ヲ點眼スルニハ上眼瞼ヲ翻轉シ左ノ示指ニテ支へ、下眼瞼ヲ拇指ニテ引下ケ能ク眼瞼ヲ閉サシメ此ニ現ハレタル結膜ノ全面ニ行キ渡ル様、藥ヲ點眼シ直ニ一%食鹽水ニテ十分ニ洗フヘシ

第四八七 「アトロピン」水・「エセリン」水ハ一滴ヲ點眼シタル後、直ニ内眥ト鼻トノ間ヲ約五分間壓スヘシ

第四 洗 眼

第四八八 洗眼ハ分泌物ヲ洗ヒ出シ又ハ點眼ノ前後ニ行フ

第四八九 洗眼スルニハ豫メ手指ヲ消毒シ、患者又ハ介者ヲシテ洗眼盤ヲ坐位ノ時ハ患側、鼻ノ下ヨリ頰部ニ、仰臥ノ時ハ患眼ト耳トノ間ニ接著シテ持タシメ、左ノ示指ヲ上眼瞼ニ、拇指ヲ下眼瞼ニ輕ク當テ上下ニ引キテ眼瞼ヲ開キ要スレハ上眼瞼

ヲ翻轉シタル後、右手ニ洗眼瓶又ハ灌水器ノ嘴管ヲ斜ニ持チ少シノ液ヲ出シツツ先ツ洗眼盤ヨリ下眼瞼ヲ傳ヒテ患眼ニ達シ徐ニ洗滌スヘシ若シ直接、角膜ニ強ク液ヲ灌クトキハ之ヲ傷フコトアリ

第四九〇 洗眼藥ハ冷熱、共ニ度ヲ過クヘカラス、通常、體温ニ近キ温度ヲ適當トス

第四九一 硝酸銀水等ヲ點眼シタルトキ洗眼スルニハ豫メ防水性材料ヲ患者ノ被服・寢具ノ上ニ被ヒ汚染ヲ防クヘシ

第四九二 洗眼盤ハ眞鍮製ニシテ内面黒キモノト赤キモノトアリ。「トラホーム」ノ如キ傳染性ノ者ニハ赤キモノヲ用フヘシ

第五 灌腸及注腸

第四九三 灌腸トハ灌腸器ヲ用ヒ、注腸トハ灌水器ヲ用ヒテ肛門ヨリ腸ニ藥ヲ送ルヲ云フ

灌腸器ハ吸液管・排液管ヲ有スル「ゴム」球ト嘴管トヨリ成ル。灌水器ハ圓筒ト嘴

管ヲ附セル「ゴム」管トヨリ成リ嘴管ニ活栓ヲ具フルモノアリ、又「グリセリン」ヲ灌腸スルニ用フル「グリセリン」灌腸器ハ小ナル「ポンプ」ナリ

第四九四 大便ヲ通セシム爲メ行フ灌腸(瀉下灌腸)ニハ多ク常用灌腸劑ヲ用フ、又「グリセリン」ヲ灌腸スルコトアリ「グリセリン」ニ約半量ノ微温湯ヲ混シテ用フ

第四九五 飲食スルコト能ハス又ハ甚シク衰弱セル患者ニ滋養ノ爲メニ灌腸(滋養灌腸)スルコトアリ滋養灌腸劑ヲ用フルヲ常トス。豫メ微温湯ニテ灌腸シ十分排便セシムルヲ要ス

第四九六 注腸ハ多量ノ藥液ヲ腸ニ入ルルニ適ス

第四九七 灌腸液・注腸液ハ温メテ用フヘシ其ノ温度ハ液中ニ手指ヲ入レ冷カナラス、熱カラサルヲ適度トス

第四九八 灌腸又ハ注腸ヲナスニハ蒲團ノ上ニ防水性材料ヲ敷キ、患者ヲ蒲團ノ縁ニ側臥(左側臥ヲ可トス)セシメ臀ヲ少シク寝臺ノ外ニ出シ明ルキ方ニ向ケ膝ヲ曲

ケシム但シ重症者ハ仰臥セル儘、兩脚ヲ開キ膝ヲ曲ケシメ臀ノ下(防水性材料ノ下)ニ枕ノ如キモノヲ入レテ臀ヲ少シク高クスヘシ

此クシテ看護卒ハ寝臺ノ側ニアリテ右手ニ灌腸器又ハ灌水器ノ嘴管ニ「ワセリン」又ハ「オレトフ」油ヲ塗リタルモノヲ持チ、左ノ拇指ト示指トニテ臀ヲ開キ肛門ニ「ワセリン」又ハ「オレトフ」油ヲ塗リ、嘴管ヲ少量ノ液ヲ出タシテ空氣ヲ除キタル後、廻シツツ徐ニ入レ斜ニ後上方ニ向ケ約四乃至五「センチメートル」ヲ挿シ入ルルヘシ。此ノトキ灌水器ニアリテハ他ノ看護卒ヲシテ約一「メートル」ノ高サニ保チ「ゴム」管ヲ閉チ置カシム

嘴管十分ニ入りタルトキハ液ヲ腸内ニ入ラシム、液ヲ入ルルトキ患者、痛ヲ訴ヘハ一時、液ヲ送ルコトヲ中止スヘシ但シ灌水器ハ下クヘカラス

液ヲ入レ終リタルトキハ綿ヲ嘴管ノ周圍ニ纏ヒ肛門ニ向ヒテ壓シ一方「ゴム」管ヲ閉チ徐ニ嘴管ヲ抜キ出シ患者ヲシテ安靜ナラシムヘシ

灌腸又ハ注射ヲナス間ハ患者ヲシテ口ヲ開キ静ニ呼吸セシムルヲ可トス

第四九九 灌腸液・注射液ハ成ルヘク長ク腸内ニ止マラシムヘシ

第六 尿道注射及洗滌

第五〇〇 尿道ニ藥液ヲ注射シ又ハ器械ヲ挿入スル前ニハ尿道ヲ洗フヲ要ス。尿道注射及ヒ洗滌ニハ尿道注射器ヲ用フ

尿道注射器ハ嘴管短キ小ナル「ポンプ」ナリ

第五〇一 洗滌又ハ注射ヲナスニハ豫メ手指ヲ消毒スヘシ又、注射器ハ消毒シ洗滌前更ニ洗滌液ニテ洗フヲ要ス

第五〇二 尿道ヲ洗フニハ先ツ排尿シ椅子ニ倚ラシメ（立ち又ハ仰臥セシメテ行フコトアリ）、臍盤ヲ前ニ置キ、看護卒ハ通常、患者ノ右ニ立ち陰莖ヲ左ノ中指ト環指トニテ挟ミ拇指ト示指トニテ龜頭ヲ保持シ、初メ洗滌液ニテ尿道口ノ周圍等ヲ清メ次テ尿道口ヲ輕ク開キ、注射器ノ嘴管ヲ之ニ挿シ入レ尿道口ト密著セシメ徐

ニ液ヲ送り終レハ注射器ヲ除クト共ニ龜頭ヲ壓シ暫クシテ之ヲ出サシム

洗滌液ハ通常、硼酸水ヲ用ヒ初メ少量ニテ洗ヒ回数ヲ重ヌルト共ニ其ノ量ヲ増シ尿道口ヨリ漸次深部ニ至ル如ク反覆スルモノトス

第五〇三 尿道ニ藥液ヲ注射スルニハ會陰部ヨリ漸次、尿道ヲ壓シテ殘レル洗滌液ヲ出サシメ洗滌ト同一ノ方法ニテ藥ヲ送り注射器ヲ抜クト共ニ龜頭ヲ壓シテ數分間、藥ヲ尿道ニ留マラシムヘシ

第五〇四 洗滌ノ回数・注入藥ノ量ハ軍醫ノ命ニヨル又洗滌液ノ温度ハ洗眼藥ニ同シ（第四九〇参照）

第五〇五 洗滌又ハ注射ノ際ハ尿道口ヲ患者及ヒ我カ顔ニ向ケシムヘカラス痲毒ヲ含メル液、逆ニ送り出テ眼ニ入ル虞アレハナリ、又、終リタル後ハ患者・看護卒共ニ手ヲ消毒スヘシ

第七 塗 擦

第五〇六 塗擦ハ指ニテヌ又「ガーゼ」・綿球・「フラネル」等ヲ以テスルコトアリ、何レニテモ先ツ其ノ部ヲ微温湯ニテ洗ヒタル後、十分ニ乾燥セシメ或ハ酒精ニテ清ムヘシ、又、指ハ塗擦前、洗ヒ適當ニ温ムルヲ要ス
水銀軟膏ハ患者自身ニ擦リ込ムシムルヲ常トス

第五〇七 塗擦ハ痛ヲ覺エサル度ニテ適宜ニ歴シ靜ニ輪狀ニ擦リ込ミ僅ニ其ノ跡ヲ見ル迄擦リ込ムヘシ。塗擦ノ場所・度数・時間・藥量等ハ軍醫之ヲ定ム
塗擦ヲナシタル後ニハ其ノ部ニ「ガーゼ」又ハ綿ヲ置キ防水性材料ニテ被ヒ細帶スヘシ

第八 塗布

第五〇八 皮膚・咽頭・齒齦・等ニ藥ヲ塗ル（塗布）ニハ一回ニ塗ルヘキ量ヲ分チ取り之ヲ綿球・捲綿子・又ハ毛筆ニ含マセテ塗ルヘシ
咽頭ニ塗ル（塗咽）ニハ咽頭捲綿子ヲ用ヒ前後ノ輪ニ示指ト拇指トヲ挿入シ捲綿セ

ル端ヲ下ニ向ケテ輕ク之ヲ持チ、綿ニ藥ヲ含マセ、患者ヲシテ強ク口ヲ開カシメ壓舌子ニテ舌ヲ壓シ「アー」ト發聲セシメツツ先ツ左右ノ扁桃腺、次ニ咽頭ノ後壁ニ塗ルヘシ。塗咽ノ前後ニハ通常含嗽セシムルモノトス

第九 含嗽

第五〇九 含嗽トハ藥液又ハ水ヲ口ニ含ミテ齒・齒齦・舌・咽頭・等ヲ洗フヲ云フ
第五一〇 含嗽セシムルニハ含嗽液ノ適量ヲ口ニ含マセ齒・齒齦・舌ニハ頰ヲ動かシ、咽頭ニハ頭ヲ十分仰ムケ「アー」ト發聲セシムヘシ
人事不省ノ者、重症ニシテ自ラ含嗽スル能ハサル者等ハ含嗽液ヲ「ガーゼ」ニ浸シテ指ニ纏ヒ又ハ脱脂綿球ニ浸シ綿子ヲ用ヒテ齒・齒齦・舌・等口内ヲ拭ヒ清潔ナラシムヘシ

第一〇 撒布

第五一一 撒布トハ患部ニ藥ノ粉ヲ撒キ掛クルヲ云フ

第五一二 創ナキ處ニハ綿ニ藥ヲ十分、含マセ輕ク患部ニ打チ掛ケ又ハ「ガーゼ」ニ藥ヲ包ミテ球ノ如クナセルモノニテ輕ク打チ或ハ輕ク擦リ掛ケ又ハ藥ヲ毛筆ニ附ケ撒布スヘシ

創アル處ニハ滅菌シタル綿球ニ藥ヲ附ケテ撒布スヘシ

第五一三 耳内・鼻腔・咽頭・喉頭・等ニハ特別ノ器械ヲ用フルコト多シ

第一一 芥子泥

第五一四 芥子泥ハ筋肉・關節・胃・等ニ疼痛アルトキ、卒倒・假死・等ノトキ、肺炎等、内臓ニ炎症アルトキニ貼用ス

第五一五 芥子泥ヲ作ルニハ新シキ芥子末ニ少シノ微温湯ヲ注キ掻キ混セ粥狀トナシ一定ノ大サノ布(木綿)「ガーゼ」「フラネル」「紋巴」等又ハ日本紙ニ厚サ一分位ニ延ヘ其ノ面ヲ薄キ日本紙或ハ「ガーゼ」ニテ被フヘシ。大サ貼ルヘキ場所等ハ軍醫ノ命ニヨル

第五一六 芥子泥ノ貼用ハ坐臥ニ物ヲ觸レテ腫サレル處・臍・乳房ヲ避クヘシ又屢、之ヲ貼ルトキハ毎回其ノ處ヲ換フルヲ例トス、前ニ貼リシ跡ノ赤キ上ニ貼ルヘカラス

第五一七 芥子泥ハ強キ痛ヲ覺ユル迄、貼リ置クヘシ、其ノ時間ハ體ノ部位ニ從ヒテ遲速アルモ大抵十乃至十五分間トス、患者ニ痛ノ有無ヲ尋ヌヘシ但シ精神明ナラサル者ニハ時々貼用部ヲ檢シ赤クナレルトキハ之ヲ剝クヲ要ス

第五一八 芥子泥ヲ剝キタル後ハ其ノ部ヲ微温湯ニテ拭フヘシ

芥子泥ノ刺戟強キニ過キ水疱ヲ生シタルトキハ其ノ部ニ少シノ「オレーフ」油・又ハ「ワセリン」ヲ塗リ或ハ硼酸軟膏ヲ貼シ繃帶シ若シ痛、強キトキハ硼酸水ノ濕布ヲ施スヘシ

第一一二 發 疱

第五一九 皮膚ニ水疱ヲ發セシムルニハ「カンタリス」硬膏ヲ用フ。主トシテ血清ヲ

得ルカ爲メニ貼用ス

第五二〇 此ノ膏藥ヲ貼リタルトキハ絆創膏又ハ繃帶ニテ固定スヘシ。大サ、貼ルヘキ場所ハ軍醫ノ命ニヨル

第五二一 水疱ハ膏藥ヲ貼リタル後十乃至十二時間ニシテ生ス。血清ヲ取ル等其ノ目的ヲ達シタルトキハ硼酸軟膏ヲ貼シ繃帶スヘシ、水疱ノ表皮ヲ剝クヘカラス

第一三二 罨 法

第五二二 罨法ニ冷罨法・温罨法・ブリースニツツ「氏罨法」ノ三種アリ

其一 冷罨法

第五二三 冷罨法ニハ冷水ヲ以テスルト水ヲ以テスルトノ二アリ、乙ヲ特ニ氷罨法ト云フ

第五二四 冷罨法ハ冷スヘキ部ヨリ稍、大キク疊メル數層ノ布ヲ水ニ浸シ輕ク絞リテ其ノ部ニ當ツ、此ノ布ハ別ニ同シ大サノ布ヲ水ニ浸シ置キ五乃至十分間毎ニ之

ト取り換フヘシ、水モ亦時々交換スルヲ要ス

夏ハ要スルトキハ水ニ氷又ハ食鹽ヲ加ヘテ冷ナラシムルコトヲ得

第五二五 氷罨法ハ氷ヲ氷嚢ニ入レテ貼ス又、頭部ニハ氷枕ヲモ用フ、其ノ他布ヲ數層ニ疊ミテ氷ノ上ニ置キ冷ユルヲ待チテ貼シ又ハ布ノ間ニ小サキ氷片ヲ挟ミテ貼スルコトアリ

第五二六 氷嚢ニハ氷ヲ約、胡桃ノ大サニ碎キ嚢ノ半マテ入レ成ルヘク空氣ヲ除キ口ヲ緊メ、患部ニ乾ケル布ヲ被ヒ其ノ上ニ載スヘシ

氷嚢ハ其ノ壓スルコト及ヒ滑ルコトヲ防クカ爲メ紐ヲ附ケ氷嚢釣又ハ衾避（第三六六參照）等ニ結ヒ置クヲ常トス但シ安靜ナラサル患者ニハ三角巾又ハ木綿等ニテ局部ニ氷嚢ヲ結ヒ附クルコトアリ

氷嚢ハ使用後、揉ミ又ハ絞ルコトナク空氣ヲ吹キ入レテ乾スヘシ

第五二七 氷枕ノ用法ハ氷嚢ニ準ス但シ少シノ水ヲ入レ氷ノ爲メ嚢ノ破損スルヲ防

クヘシ又、乾キタルヲ布片ニテ巻キ用フルモノトス

第五二八 病室ニテ用フル氷ヲ長ク貯フル貯水器ノ鍍屑ハ常ニ乾キアルヲ要ス

其二 温罨法

第五二九 温罨法ニ濕性ト乾性トノ二アリ

一 濕性温罨法

第五三〇 濕性温罨法ハ温濕布又ハ巴布ニヨル

第五三一 温濕布ハ温湯又ハ温キ藥液ヲ布(木綿・「ガーゼ」・「フランネル」等)ニ浸シ適宜ニ絞リテ局部ニ當テ其ノ上ヲ防水性材料ニテ被フ

温濕布ハ温度ニ注意シ火傷ヲ起サシムヘカラス、又、温度低キモ不可ナリ、適當ニ交換シテ長ク必要ノ温度ヲ保タシムヘシ

第五三二 巴布ハ巴布粉ニ水ヲ加ヘ煮テ稍、硬キ粥トナシ温キ儘、又ハ米飯ノ温キ儘ヲ布ニ包ミ厚サ一指幅、大サ適宜ニナセルモノヲ用ヒ或ハ適宜ノ大サノ葛粉ヲ

水煮トナシ温キ儘ヲ布ニ包ミテ局部ニ當ツルナリ

巴布ハ冷エサル前ニ交換スヘシ、之ヲ當ツルトキニハ自己ノ頬ニ當テ熱過キサルヤヲ試ミルヲ要ス、腐ラサル間ハ更ニ煮テ用ソルコトヲ得

其二 乾性温罨法

第五三三 乾性温罨法ハ懷爐・湯「タンポ」(陶製鍋・瓶・等)ニ熱湯ヲ盛リタルモノ(等)ニヨル。此等ヲ當ツルニハ布ニ包ミテ用フ、火傷ヲ起サシムヘカラス(第四〇四参照)又、栓アルモノハ栓ヲ密ニシ要スレハ絲ニテ縛リ湯ノ漏レサルコトニ注意スヘシ

其三 「ブリースニッツ」氏罨法

第五三四 「ブリースニッツ」氏罨法ハ濕布ニテ體ノ一部ヲ被ヒ體温ニテ暖マラシムル法ナリ

第五三五 「ブリースニッツ」氏罨法ハ罨法スヘキ大サニ疊メル數層ノ木綿ヲ濕布ト

ナシ局部ニ當テ其ノ上ヲ之レヨリ二、三指幅、大ナル「フランネル」二、三枚又ハ防水性材料ニテ被ヒ更ニ幅廣キ布又ハ綳帶ニテ固定ス
濕布ヲ交換スヘキ時間ハ軍醫ノ命ニヨルヘシト雖モ通常三、四時間毎ニ取り換フルモノトス

第一四 浴

第五三六 浴ニ全身浴ト局所浴トアリ、又、浴水ノ温度ニヨリ冷浴・温浴・熱浴・等ニ別ツ、其ノ他、入浴半時間以上ナルヲ持續浴ト云フ。浴ノ種類・度数・時間・等ハ軍醫ノ命ニヨル
浴水ニ藥ヲ加フルコトアリ之ヲ藥浴ト云フ

第五三七 全身浴ハ患者自ラ浴室ニ行キテ浴槽ニ入ルヲ例トス
衰弱セル患者ハ助ケテ浴室ニ導キ又ハ運搬シ往キ靜ニ舟狀浴盤ニ入レ入浴中其ノ體ヲ支フヘシ、出ストキモ亦同シ。重症者又ハ甚シク衰弱セル者等ノ爲メニハ浴

盤ヲ病室ニ運ヒテ入浴セシムルコトアリ

浴盤ノ水ハ患者ノ肩ニ至ルヲ度トス。温度ヲ増ス爲メ熱湯ヲ加フルトキハ火傷ヲ起サシメサルコトニ注意スルヲ要ス(第五三八參照)

入浴中、頭痛・嘔氣・眩暈スル等ノコトアラハ直ニ出スヘシ

第五三八 持續浴ヲナスニハ患者ノ頭ノミヲ出シ浴盤ノ上ニ毛巾ヲ被ヒ又、火傷ヲ起サシメサル様時々少量ノ熱湯ヲ浴盤ノ足邊ヨリ其ノ外壁ニ向ヒ注クヘシ

第五三九 局所浴ノ主ナルモノハ半身浴・坐浴・手浴・足浴ナリ

- 一 半身浴 患者ヲ浴槽中ニ坐セシメ水ノ心窩又ハ臍ニ至ルヲ度トス
- 二 坐浴 坐浴盤ニテ行フ
- 三 手浴 手浴盤ニテ行ヒ手及ヒ前膊ヲ入ルルヲ得
- 四 足浴 足浴盤ニテ行ヒ足及ヒ下腿ヲ入ルルヲ得

第五十七章 手術室ノ勤務

第一 手術室ノ準備

第五四〇 手術ノ前ニハ手術室ノ窓ヲ開キ風ヲ通シ床面ヲ水ニテ洗フヘシ
手術中ハ成ルヘク静ニシ室内ニ無用ノ者ヲ入ラシムヘカラス

第五四一 室内ノ温度ハ二十乃至二十二度ヲ可トス但シ腹腔ヲ開ク手術ニハ三十度
ニ温ムルヲ要スルコトアリ

第五四二 手術臺ニハ消毒液ニテ清メタル防水性材料ヲ敷キ其ノ上ヲ滅菌シタル布
ニテ被フヲ例トス

第五四三 手術前、手洗湯・石鹼・刷毛・手洗鉢・手巾・酒精・消毒液・滅菌食鹽水・等ヲ
點檢シ置クヘシ

第五四四 手術終ラハ器械ヲ手入シテ整頓シ細帯材料ヲ納メ次ニ室ト諸道具トヲ清

タ再製スヘキ細帯材料等ヲ區分スヘシ

第二 器械・材料及器具ノ準備

第五四五 軍醫ノ命ヲ受ケ手術ニ要スル器械ヲ手術前約三十分ニ滅菌(第一四一參
照)シ終リ種類毎ニ消毒盤中ニ竝ヘ滅菌布ニテ被ヒ手術臺ノ側ノ小机上ニ置クヘ
シ、又、別ニ「クレゾール」水等ヲ盛レル鉢ヲ備ヘ一タヒ用ヒタル器械ヲ拭淨スル等
ノ用ニ供ス

第五四六 手術ニ要スル細帯材料ハ机又ハ他ノ臺ノ上ニ竝ヘテ適宜ノ場所ニ置クヘ
シ、其ノ他、昇汞水等ノ消毒液ヲ盛リタル手洗鉢・創液及ヒ廢水ヲ受クル容器・使用
シタル細帯材料ヲ受クル容器等ヲ整頓シ、器械ニハ膿盤・灌水器・食鹽注射器・皮下
注射器・酸素吸入器・等、藥品ニハ滅菌食鹽水・「カムフル」液・「チキタミン」・「メン
タ」酒・等ヲ備フヘシ
膿盤ハ大、中、小ヲ組合セ得ヘキ淺キ金屬盤ナリ

食鹽水注射器ニハ大、小ノ二種アリ、大ハ圓筒・「ゴム」管・連接管・注射針ヨリ成リ
檢温器ヲ附屬ス、小ハ大ナル「ポンプ」ナリ

皮下注射器ニハ硝子吸子付ト石綿吸子付トノ二種アリ、硝子吸子付皮下注射器ハ
唧筒・管針・外筒ヨリ成リ管針ハ二箇ニシテ鞘ニ納メテ吸子ノ中ニ入ル

第五四七 手術器械・等ヲ備ヘ終ラハ軍醫ノ指示ニヨリ「クロロフォルム」・「エーテ
ル」及ヒ麻藥服用器又ハ局所麻酔用藥液・等ヲ机上適當ノ場所ニ整頓シ置クヘシ

第五四八 使ヒタル器械ハ「クレゾール」水ニテ拭ヒ再ヒ之ヲ滅菌シタル後、手入法
ヲ施シテ納ムヘシ

第三 手術ノ助手

第五四九 看護卒ハ手術中綑帶材料ヲ授受シ、又器械類ノ消毒・注射ノ準備・手術
部ノ保持・等ノ雜務ニ從ヒ、要スレハ器械ノ授受ニ任ス

綑帶材料ヲ授受スル者ハ手ヲ消毒(第一三五參照)シ「ガーゼ」類ハ「ガーゼ」鉗子ニ

テ持チ手ヲ觸ルヘカラス、又此等ノ材料ハ消毒セサル物ニ觸レタルトキハ棄ツ
ヘシ

雜務ニ服スル者ハ消毒シタル物ニ觸レ又ハ手術部ニ近ツクヘカラス

床面ニ落ち又ハ膿・血液・等ニテ汚レタル器械類ハ「クレゾール」水ニテ清メタル後、
煮沸消毒ヲ行フヘシ

器械ヲ授受スル者ハ手ヲ消毒シ器械類ハ成ルヘク鉗子ノ類ニテ又ハ手套ヲ穿チテ
取扱ヒ直接手ヲ觸レサルヲ可トス、又器械ヲ手術者ニ渡スニハ柄ニ當ル部ヲ出
スヲ常トス。床面ニ落ちタル器械ハ自ラ拾フコト勿レ

第四 手術前後ノ看護

第五五〇 病ニ差支ナキ患者ハ手術ノ前日入浴セシメ病衣ヲ新ニスヘシ、ナシ得ル
トキハ手術ノ當日モ入浴セシムルヲ可トス又、手術前ニハ口腔及ヒ齒ヲ清潔ニシ
便通・尿利ニ注意スルヲ要ス

第五五一 手術前後ノ食餌ハ軍醫ノ命ニヨルヘシト雖モ全身麻酔ヲ行フ場合ニハ其ノ直前ノ一食ハ與ヘサルヲ常トス

第五五二 手術ニ臨ミテハ患者ヲ手術臺上ニ載セ眼ヲ被ヒ要スレハ四肢ヲ手術臺ニ固定スヘシ

第五五三 手術ヲ終リタル患者ヲ病室ニ運フニハ毛布ヲ被ヒ感冒セシメサルコトニ注意スヘシ

第五五四 患者ノ寢臺ハ手術中ニ整頓シ要スレハ敷布ヲ新ニシ置クヘシ、湯「タンポ」等ヲ入レアルトキハ特ニ火傷ヲ起サシメサルコトニ注意スルヲ要ス

第五五五 手術後患者ヲ寢臺ニ臥セシメ麻酔ノ醒ムル後モ一、二時間ハ呼吸・脈・嘔吐・繃帶ノ状況殊ニ出血・指趾ノ變色・疼痛・麻痺・等ニ注意シ異變アラハ軍醫ニ報スヘシ

手術後ニハ眠ラシムルヲ可トス、眠覺ムルトキニ吐クコトアリ吐物ヲ受クル用意

ヲナシアルヘシ

第五五六 看護卒ハ患者竝ニ其ノ手術ニ立會ハザリシ者ニ手術ニ關スル話ヲナスヘカラス

第七編 按摩術

第五十八章 按摩ノ功用

第五五七 按摩ハ其ノ部ノ血行ヲ増シテ病的產物ヲ吸收セシメ關節又ハ癢痕部ニ於ケル癢著等ヲ除クノ功アリ

第五十九章 手技

第一 用意及實施上ノ注意

第五五八 術者ハ常ニ手ヲ保護シ手掌及ヒ指ノ掌面ヲ軟ニシ 爪ハ短ク剪リ又、銳キ角ナカラシムヘシ

第五五九 按摩スル前ニハ手ヲ石鹼及ヒ溫湯ニテ洗ヒ乾カスヘシ。冷エタル手ヲ患者ニ觸ルヘカラス

第五六〇 術者ハ適宜ニ輕裝スルヲ要ス

按摩スルニハ成ルヘク室内ノ溫度ヲ適當ニシ 施術ノ際、患者ノ寒カラサル様ニスヘシ

第五六一 患者ノ皮膚ハ清クシテ乾ケルヲ要ス、毛多キ處ハ剃ルヘシ

第五六二 按摩スル前、患者ニ種々ノ浴又ハ濯法ヲナスコトアリ

第五六三 按摩スル部ハ裸ニシテ其ノ部ト心臟トノ間ニアル被服ノ緊縛ヲ除クヲ要ス、四肢ヲ持ツトキ輪ヲ嵌ムル如ク手ニテ握リ血行ヲ妨クルコト勿レ

第五六四 按摩スルニハ其ノ部ヲ心臟ノ位置ヨリ高カラシムル如クスルヲ常トス故ニ下肢ヲ按摩スルニハ横臥セシメ、上肢ナルトキハ多クハ坐セシム但シ患者及ヒ術者ニ便ニシテ血行ニ障ナキトキハ其ノ位置ヲ變更スルコトヲ得
頭ハ少シク高クスヘシ

按摩スル部ノ筋ハ十分ニ弛マシムルヲ要ス之カ爲メ要スレハ其ノ部ヲ臺ニテ支フ

ヘシ、臺ハ軟過キサル彈力アル枕ヲ可トス

第五六五 患者ノ皮膚、按摩ニテ刺戟セラルルヲ避クルニハ「オレイン」油、「ワセリン」等ヲ少シク塗ルヲ可トス但シ第五八〇ノ手技ハ油ヲ用ヒスシテナスヘシ
毛ナキ處ハ澱粉・滑石・等ヲ塗リテ滑ナラシムルコトヲ得

第五六六 術者ハ自ラ便宜ナル位置ヲ取り久シキニ耐エ、疲レサル如クスヘシ

第五六七 手技ハ輕ク彈力アリテ滑轉、自在ナルヲ要ス之カ爲メ筋ニ力ヲ入レ上肢ノ諸關節ヲ弛ムヘシ、決シテ暴力ヲ用フヘカラス

第五六八 按摩スル手ハ患者ノ體ニ適合セサルヘカラス

按摩ハ心臟ニ遠キ部ヨリ始メ心臟ニ向ヒテナスヲ要ス

第五六九 骨ノ上ニ薄キ軟部アル處ハ按摩セサルヲ要ス、又、胸ニテハ乳ニ觸ルヘカラス

第五七〇 按摩ハ多ク筋簇、毎ニ行フ、筋簇トハ互ニ相接シ其ノ作用モ亦多クハ等

シキ諸筋ノ群ヲ云フ

筋簇ハ視、又ハ觸レ得ヘキ筋溝ニテ分タル、筋溝ハ血管・淋巴管・神經ノ通スル處ナリ

第五七一 按摩ノ部位・手技ノ組合・時間・等ハ軍醫ノ命ニヨルヘシ

第二 手技ノ種類

其一 撫方

第五七二 撫方ハ血液・淋巴液ヲ軟部ヨリ壓シ出シ心臟ニ向ケ送ルヲ目的トス

第五七三 撫方ニ左ノ種類アリ

一 片手撫 指拇末節ノ掌面ヲ筋簇ノ一側ニアル筋溝ニ置キ、他ノ四指末節ヲ他側ノ筋溝ニ當テ、掌ヲ筋簇ニ密接シテ之ヲ握リ末梢ヨリ心臟ニ向ヒテ徐ニ壓ヲ増シツツ撫テ筋簇ノ最モ厚キ部ニ達シタル後、漸次、壓ヲ減シツツ他端

ニ及ヒ一回撫テ終リタルトキハ手ヲ患者ノ體ヨリ離シテ始ノ點ニ歸リ之ヲ反覆スヘシ、此ノ間、指ハ常ニ筋溝ニアリ掌ハ常ニ筋簇ニ密接スルヲ要ス若シ掌ノ接著セサルトキハ功ナシ是レ心臟ニ向ケ送ラルヘキ血液・淋巴液ノ再ヒ元ニ還ルカ爲メナリ(第八六圖)。又、筋簇ノ末端ヲ撫ツルニハ拇指球ト小指球トヲ近ツク其ノ間ニ筋簇ノ末端ヲ挿ミテ撫ツヘシ

撫方正シキトキハ術者ノ手ヨリ前ノ軟部ハ膨ムモノトス

第八六圖

二 諸手撫 キコナシテ 大ナル筋簇例ヘハ大腿ノ筋簇又ハ全肢ヲ一時ニ撫ツルニハ兩手ヲ用フヘシ、此ノ場合ニハ兩拇指ヲ共通ノ筋溝ニ置キ他ノ四指ヲ兩側ノ筋溝ニ當テ各手ニ一筋簇ヲ握ルヘシ、其ノ他 片手撫ニ同シ(第八七圖)

第八七圖

三 拇撫 マユビトテ 指・手背・足背ノ如キ狭キ部ハ握リテ撫ツルコトヲ得サルヲ以テ拇

撫ヲ行フ、其ノ法、兩拇指ヲ前後ニ接シテ當テ他ノ兩四指ハ適宜ノ位置ニ當テテ支ヘ交ル交ル撫ツヘシ即チ一拇指、終點ニ至レハ之ヲ離シテ始ノ點ニ歸リ其ノ間ニ他ノ拇指、終點ニ向ヒテ進ムヘシ但シ拇指末節ノ頭ヲ用ヒ壓ヲ強ムルトキハ益、其ノ功多シ(第八八圖)

第八八圖

四 拳撫 コナシテ 皮下ニ腱様ノ組織アル部(例ヘハ大腿及ヒ下腿ノ外側)ニハ拳撫ヲ行フ、他ノ撫方ニテハ力足ラサレハナリ、其ノ法、拳ヲ作りタル手ヲ強く背屈シ拇指球及ヒ小指球ノ腕關節ニ近キ端ニテ強キ壓ヲ加ヘツツ撫ツルナリ

其二 揉方

第五七四 揉方ハ血液・淋巴液ヲ軟部ヨリ壓シ出ス力、撫方ヨリ大ナリ

第五七五 術者ハ患肢ト直角ニ位置シ兩拇指ト他ノ兩四指トヲ兩側ノ筋溝ニ置キテ筋簇ヲ握リ筋ノ下面ニテ互ニ相近ツクカ如クシ掌ハ皮膚面ニ密接シ壓シツツ心臟

ニ向ヒ進ムヘシ、此ノ際、筋簇ヲ握リ舉クルヲ得ハ四肢ノ縱軸ニ對シテ横ニ、一手ヲ、一方ニ、他手ヲ之ト反對セル方向ニ送り兩手ヲ交ル交ル山路形ニ動カシテ心臟ニ向ケ進ムヘシ、其ノ間、掌ハ絶エヌ四肢ニ接合シアルヲ要ス軟部ヲ舉クルハ此ノ法ノ要件ナリ故ニ大ナル筋簇、比較的、他ト離レアリテ容易ク握ララル部（例ヘハ四肢）ニアラサレハ行ヒ難シ（第八九圖）

揉方ヲ行フトキハ術者ハ上肢ヲ十分ニ弛メ肩ヨリ指マテノ總テノ關節ヲ運動ニ與カラシメ肘ヲ體ヨリ離シ指ヲモ少シク開キアルヲ可トム

第八九圖

第五七六 錐揉ハ揉方ノ一種ニシテ專ラ四肢ニ用ヒラル、其ノ法、兩手ヲ平ニ肢ニ當テ之ヲ挾ミ壓シツツ兩手ヲ速ニ交ル交ル動カスコト錐ヲ揉ムカ如クス（第九〇圖）又、濡レタル海綿ヲ絞ルカ如ク肢ニ横ニ當テタル手ヲ交ル交ル開閉シツツ末梢ヨリ心臟ニ向ケテ筋ヲ壓シツツ進ム揉方アリ（第九一圖）

一部ノ太クナリタル腿・膝著シタル癩痕・等ハ拇指及ヒ第二指又ハ第三指ノ頭ニテ撮ミ揉ムヘシ（第九二圖）

第九二圖

其三 摩方

第五七七 摩方ノ目的ハ病的產物ヲ細ニスルニアリ

第五七八 拇指ノ頭又ハ第二及ヒ第三指ノ頭ヲ摩ルヘキ部ニ當テ稍、強キ壓ヲ加ヘ五十錢銀貨ヨリ大ナラサル輪ヲ畫クヘシ（第九三圖）但シ病的產物アル部ノ縁ヨリ始メ健康部ニ向ヒテ行ヒ皮膚ヲ指ノ頭ト共ニイサラセ皮下ヲ摩ル如クスヘシ然ラサレハ皮膚ヲ傷フ、又、開キタル掌ノ小指側ニテ摩ル法アリ

第五七九 摩方ハ主トシテ關節ニ用ヒラル、此ノ法ニ注意スヘキ點、左ノ如シ

- 一 摩ル部ハ必ス固定スヘシ動ケハ功ナシ
- 二 術者ハ指ト腕トノ諸關節ヲ固定シ僅ニ肘關節ヲ動カシ主トシテ肩胛關節ヲ

用フヘシ功多ク勞少ケレハナリ

第九三圖

其四 叩方

第五八〇 叩方ノ目的ハ筋ヲ收縮セシメ榮養ヲ盛ニスルニアリ

第五八一 叩方ハ稍強クスヘシ然レトモ患者ニ痛ヲ覺エシメス又害ヲ與ヘサレヲ要ス、其ノ法、腕關節ヲ輕快ニ運用シ手ニ彈力アラシメ速ニ打チ續ケ決シテ臂ノ重量ヲ叩ク部ニ加フルコトナク叩ク部ニ手ヲ觸ルル瞬間ニハ總テノ屈筋ヲ收縮セシメ撥條ノ如ク高ク跳ネ反ラシムルヲ要ス

此ノ法ヲ行ヒタル後、叩キシ部ニ温ヲ感スルコト久シキハ血流ノ増シタルヲ證スルモノトス

第五八二 叩方ニ左ノ種類アリ

一 指叩 兩手ノ小指側ニテ行フモノニシテ十分ニ伸ヘタル手ヲ前膊ト直線

ニシ指ヲ開キ腕關節及ヒ指關節ヲ弛メテ叩クヘシ、斯クスルトキハ小指先ツ叩クヘキ處ニ觸レ次ニ他ノ指、順次ニ落チ來リテ漸ク力ヲ加フ故ニ痛ムコトナシ、手ハ速ニ跳ネ反ルヲ要ス、又、此ノ法ハ必ス筋纖維ノ方向ニ直角ニ行フヘキモノトス(第九四圖)

第九四圖

筋層薄キ部ニテハ小指側ニ代フルニ示指又ハ中指ノ頭ヲ以テシ、大ナル筋層アル部(例ヘハ臀部及ヒ大腿ノ後側)ニテハ拳ニテ叩クコトヲ得、此ノ際モ腕關節ハ弛メアルヲ要ス(第九五圖)

第九五圖

頭部ハ主ニ指ノ頭ニテ物ヲ搔キ寄スルカ如ク輕ク叩クヲ例トス(第九六圖)

第九六圖

二 平手叩 主トシテ平ニ廣キ筋アル部ニ用ヒ又皮膚ノ小サキ血管ヲ刺戟スル

ニ用ヒラレ、平ニ廣ケタル掌ニテ腕關節ノ運動ニテ叩クヘシ水ヲ掬フトキノ如ク掌ニ窪アラシメテ叩クトキハ其ノ中ノ空氣ハ力ヲ緩ムルモノナリ（第九七圖）。此ノ法ハ力ヲ用フルコト少ナク淺ク利キテ皮膚ニ赤色ヲ殘スモノトス

第九七圖

第三 手技ノ組合

第五八三 第二ノ各手技ハ單獨ニ用フルコト稀ニシテ互ニ組合セテ行フコト多シ

第五八四 總テノ按摩ハ撫方ヲ以テ始ム、初メ按摩スヘキ部ヨリ心臟ニ近キ部ヲ撫ツルヲ例トス之ヲ豫備按摩ト云フ

心臟ト按摩スル部トノ間ノ血流ヲ盛ニスルコトハ自ラ按摩スル部ニ功アルカ故ニ初メハ豫備按摩ノミヲナスコトアリ

第五八五 患部ハ之ニ觸レテ痛ナキニ至リテ按摩スルコトヲ得ヘシ。初メハ撫テ必

要ニ應シテ揉・摩及ヒ叩テ交フ揉・摩及ヒ叩ノ間ニモ時々二、三回ノ撫方ヲ挿ミ病的產物ヲ壓シ送り最後ニ全肢ヲ撫テ終ルヲ例トス

第六十章 自力及他力ノ運動

第五八六 按摩シタル後、要スルトキハ按摩セシ部ニ自力及ヒ他力運動ヲ行フ

第五八七 自力運動トハ患者自ラ關節ヲ運動スルヲ云フ

自力運動ハ筋ヲ練リ強ムルヲ目的トス。自力運動ニ抵抗ヲ加フルコトアリ即チ號令（例ヘハ屈ケ又ハ伸セ）ノ下ニ自ラ患肢ヲ運動セシメ同時ニ術者其ノ肢ヲ持チテ之ニ反對ノ力ヲ加ヘ運動ヲ妨クルニアリ但シ抵抗強キニ過キサルヲ要ス若シ抵抗セル方向ニ肢ノ動クコトアラハ強キニ過クルノ徴ナリ

第五八八 他力運動トハ術者ニ於テ患者ノ肢ヲ握リ其ノ關節ヲ運動セシムルヲ云フ。他力運動ハ癢著等ヲ弛メ關節運動ノ障礙ヲ除クヲ目的トス

第八編 消毒法

第六十一章 消毒ノ種類

第五八九 消毒方法ハ藥物消毒・蒸氣消毒・煮沸消毒・燒却ノ四種トス

第五九〇 藥物消毒ニ用フル藥物、其ノ製方及ヒ用法ハ左ノ如シ

一 「クレゾール」水(約二・五%) 「クレゾール」石鹼液五十立方「センチメートル」ヲ取り之ニ水ヲ加ヘテ「リットル」トナシ混和ス

二 石炭酸水(約三%) 溶製石炭酸三十立方「センチメートル」ヲ取り之ニ水ヲ加ヘテ「リットル」トナシ混和ス

三 昇汞水(約〇・一%) 昇汞錠二箇又ハ昇汞「クロールカリウム」(昇汞鹽)二「グラム」ヲ水一「リットル」ニ溶解ス

昇汞水ハ金屬面・排泄物・汚穢物・等ノ消毒ニ適セス

四 石灰乳 煨性石灰ヲ塊ノ儘、大ナル器ニ取り之ニ約半量ノ水ヲ注キテ粉末

トナシ其ノ一容量ヲ取り攪拌シツツ之ニ水三容量ヲ徐々ニ加フ

石灰乳ハ用ニ臨ミテ調製シ、攪拌シテ使用スヘシ

石灰乳ハ「ベンキ」塗面ノ消毒ニ適セス

五 「クロール」石灰乳「クロール」石灰一容量ヲ取り攪拌シツツ之ニ水五容量ヲ徐々ニ加フ

「クロール」石灰乳ハ用ニ臨ミテ調製シ、攪拌シテ使用スヘシ

六 「フォルマリン」水(約一%) 「フォルマリン」三十立方「センチメートル」ヲ取り之ニ水ヲ加ヘテ「リットル」トナシ混和ス

「フォルマリン」水ハ用ニ臨ミテ調製スヘシ

「フォルマリン」水ハ排泄物・汚穢物・等ノ消毒ニ適セス

七 「フォルムアルデヒド」 「フォルマリン」ヲ適當ナル裝置ニ入レ水ト共ニ

蒸發又ハ噴霧セシム但シ密閉シ得ヘキ函内或ハ室内ニ於テノミ使用シ得ルモノニシテ消毒物ハ成ルヘク其ノ露出面ヲ大ナラシムル如ク排列スルヲ要ス

第五九一 蒸氣消毒ハ蒸氣消毒装置ヲ用ヒ適度ノ蒸氣ニテ行ワ、其ノ温度ハ攝氏百度以上ニシテ消毒時間ハ装置ノ種類ニヨリ定メラル

蒸氣消毒ヲ行フニハ左ノ事ニ注意スヘシ

- 一 強キニ過クル蒸氣ヲ用フヘカラス
- 二 革製品・護膜製品・紙製品・糊膠附品・塗物・毛皮・象牙・鼈甲・角類・等ハ蒸氣消毒ニ適セス、又、血液・膿・錆ニテ汚レタル被服ハ蒸氣消毒ニ附セサルヲ可トス

三 爆發又ハ發火シ易キ物アルトキハ豫メ之レヲ取出スヘシ

四 消毒物ヲ消毒装置ニ納ムルニハ其ノ露出品ヲ大ナラシムル如ク排列スルヲ

要ス

第五九二 煮沸消毒ヲ行フニハ消毒物ヲ全部、水ニ浸シ沸騰後十五分間以上煮沸ス

ヘシ

煮沸水中ニハ約一%ノ割合ニ粗製炭酸、ナトリウム「ソーダ」ヲ加フルコトアリ

第五九三 焼却ハ焼却場其ノ他、特ニ定メラレタル場所ニ於テナスヘシ

第六十二章 消毒ノ實施

第五九四 傳染病豫防ノ爲メ行フ消毒ハ左ノ如ク實施スヘシ

- 一 患者或ハ病原體保有者ノ隔離ヲ解クトキハ温メタル昇汞水ニテ全身ヲ擦拭シタル後、石鹼ヲ用ヒテ全身浴ヲ行ヒ、又ハ温濕布ニテ清拭シ被服ヲ換フヘシ
 - 二 患者ノ遺骸ハ昇汞水「クレゾール」水又ハ石炭酸水ニ浸シタル布ニテ全身ヲ包ミテ納棺シ、棺底ニハ厚ク石灰・木灰・葦灰・鋸屑・等ヲ敷クヘシ
- 獸畜ノ死體ハ昇汞水「クレゾール」水又ハ石炭酸水ヲ撒布シテ消毒シタル後、

焼却ス若シ焼却スル能ハサルトキハ深く地中ニ入レ多量ノ石灰乳ヲ注キタル後、埋ムヘ

三 患者又ハ病毒ニ接觸シタル者ハ其ノ都度、昇汞水又ハ「クレゾール」水ヲ以テ手ヲ消毒シ更ニ石鹼ヲ用ヒテ洗ヒ、要スレハ入浴・更衣・被服ノ消毒ヲ行フヘシ

四 尿・尿・吐物・等ノ排泄物ハ煮沸又ハ焼却シ、或ハ之ニ同容量ノ石炭酸水又ハ「クレゾール」水、其ノ容量ノ五分ノ一以上ノ石灰乳又ハ其ノ容量ノ十分ノ一以上ノ「クロール」石灰乳ヲ加ヘ十分攪拌シタル後二時間以上放置スヘシ
排泄物ヲ入レタル容器ハ其ノ品質ニ應シ消毒ヲ行フヘシ

五 汚水・浴水等ハ之ニ蒸氣ヲ通シ攝氏八十度以上ノ温度ニテ十分間以上加熱シ、又ハ赤色試験紙ヲ著シク且ツ持續シテ青變スルニ至ル迄、石灰乳ヲ混シ、又ハ「クロール」具ヲ放ツニ至ル迄、クロール」石灰乳ヲ混シ能ク攪拌シタル後

二時間以上放置スヘシ

六 飲食器・藥杯・等ハ内容物ノ殘餘ト共ニ煮沸又ハ蒸氣消毒ヲ施スヘシ

七 銃砲・銃劍・刀・携帶器具・等ノ金屬製品ハ「クレゾール」水・石炭酸水又ハ「フォルマリオン」水ヲ用ヒテ擦拭スヘシ但シ木製部ニハ昇汞水ヲ用フルコトヲ得

八 被服寢具中、絨衣袴・外套・毛布・等洗濯ニ適セサルモノハ蒸氣又ハ「フォルムアルデヒド」ニテ消毒シ、洗濯ニ適スルモノハ蒸氣又ハ煮沸消毒ヲ施シ或ハ「クレゾール」水又ハ石炭酸水ニ浸シ二時間以上ヲ經タル後、洗濯スヘシ

九 革製品・毛皮製品・護謨製品・等ハ「フォルムアルデヒド」ニテ消毒シ、或ハ昇汞水・「クレゾール」水・石炭酸水又ハ「フォルマリオン」水ヲ用ヒテ反覆擦拭スヘシ但シ毛皮製品ノ毛アル面ハ此等ノ藥液ヲ浸シタル刷毛ニテ反覆・擦拭シタル後、乾燥スヘシ

一〇 寢臺・腰掛・椅子・机・等ハ昇汞水・「クレゾール」水又ハ石炭酸水ヲ用ヒテ

擦拭シ天鵞絨ノ類ニテ張リタル部ハ石炭酸水又ハ「フォルマリン」水ヲ濕シタル刷毛ニテ擦拭シタル後、乾燥スヘシ但シ「フォルムアルデヒド」ヲ以テ消毒セル室内ニアリタル物ハ此ノ消毒ヲ略スルコトアリ

一 圖書、信書類中焼却スル能ハサルモノハ「フォルムアルデヒド」又ハ蒸氣ヲ以テ消毒スヘシ

貴重品ハ其ノ品質ニ應シ「クレゾール」水・石炭酸水又ハ「フォルマリン」水ヲ用ヒテ擦拭シ、或ハ「フォルムアルデヒド」ヲ以テ消毒スヘシ

一二 蒲團、枕ノ内容物・襪履・塵芥ノ類及ヒ焼却ニヨルニアラサレハ完全ノ消毒ヲ期シ難キモノハ焼却スヘシ

一三 室ハ床・壁（少クトモ）「メートル」ノ高サニ至ル迄（戸・窓・等ハ昇汞水。

「クレゾール」水又ハ石炭酸水ヲ用ヒテ擦拭シ又ハ之ヲ撒布シテ消毒スヘシ但シ密閉シ得ヘキ室ハ或ルヘク「フォルムアルデヒド」ヲ以テ消毒スルヲ要ス、

此ノ場合ニ於テハ室ノ窓・戸・換氣口・板目・等總テノ空隙ヲ目貼スルモノトス

一四 便所ノ戸・内壁・床・等ハ昇汞水「クレゾール」水又ハ石炭酸水ヲ用ヒテ擦拭シ或ハ之ヲ撒布シテ消毒シ、糞壺・尿池・汲取口ノ周圍ニハ厚ク石灰乳又ハ「クロール」石灰乳ヲ撒布スヘシ

糞壺・尿池ニハ其ノ内容五分ノ一以上ノ石灰乳又ハ十分ノ一以上ノ「クロール」石灰乳ヲ加ヘ十分攪拌シ十二時間ヲ經ルニアラサレハ汲取ラシムヘカラス

一五 塵捨場・溝渠・等ハ石灰乳又ハ「クロール」石灰乳ノ多量ヲ注キテ消毒スヘシ

中庭・道路・等ノ汚染セラレタル場所亦之ニ準ス

一六 井水・水槽水ハ蒸氣ヲ通シ攝氏八十度以上ニ十分間以上加熱シ、或ハ水量ノ五十分ノ一以上ノ石灰乳又ハ二千分ノ一以上ノ「クロール」石灰乳ヲ加ヘ

十分攪拌シ、井壁・槽壁ニハ石灰乳又ハ「クロール」石灰乳ヲ塗布シ十二時間以上ヲ經タル後洗滌シ浚渫スヘシ

⑦ 患者、死體・等ノ運搬具ハ使用後直ニ昇汞水・「クレゾール」水又ハ石炭酸水ヲ用ヒテ擦拭シ或ハ之ヲ撒布スヘシ但シ取外シ得ヘキモノニシテ氣熱ニ堪ラルモノハ成ルヘク蒸氣消毒ヲ施スヘシ

⑧ 汽車・電車・自動車・船室・等ノ消毒ハ第九、第一〇、第一三、第一四、第一五ニ準ス

第九編 調劑 術

第六十三章 調劑及處方

第五九五 調劑トハ處方箋又ハ處方録ニヨリ藥ヲ調合スルヲ云フ

第五九六 調劑ハ藥劑官又ハ軍醫之ヲ行ヒ看護卒ハ其ノ助手ヲナスモノトス

第五九七 處方箋ハ管内又ハ外來患者ニ、處方録ハ入院患者ニ用ヒラル

處方箋様式入

處方録様式入

第五九八 處方箋・處方録ニハ患者ノ隊號(病室號)・官等級・氏名・藥名・分量・用法・

月日・等ヲ記シ軍醫之ニ捺印ス

調劑ヲ終ケタル處方箋・處方録ニハ調劑者捺印ス

第五九九 處方又ハ調劑ヲ誤ルトキハ藥ノ功用ヲ失ハシメ、又ハ恐ルヘキ毒物ヲ生

セシメ、又ハ爆發・發火・等ノ危險ヲ招クコトアリ

第六十四章 重量・容量及藥ノ量方

第六〇〇 藥ヲ量ルニハ重量ニヨル然レトモ液體ニシテ其ノ比重蒸餾水ニ近キモノハ容量ニヨルコトアリ

第六〇一 重量ノ單位ハ「グラム」ヲ基トシ十進法ニ從ヒテ増減ス

第六〇二 藥ノ分量ヲ處方箋・處方録ニ記載スルニハ左ノ如ク「グラム」ヲ單位トセル點ト數字トニテ示スヲ例トス故ニ點ノ位置ト零ノ箇數トヲ誤ルトキハ分量ニ著シキ差ヲ來タスヲ以テ誤ナキヤウ注意スヘシ

一「ミリグラム」_{千分ノ一} 〇・〇〇一

一「グラム」 一・〇〇

一「キログラム」_{千「グラム」ノ倍} 一・〇〇〇・〇

處方箋

(半紙八ツ切型)

○		○																										
箋 方 處																												
△何日分	何△月	何△日																										
			醫師 印																									
			印																									
<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 10%; text-align: center;">除</td> <td style="width: 10%; text-align: center;">△何</td> <td style="width: 10%; text-align: center;">中</td> <td style="width: 10%; text-align: center;">等級 氏名</td> <td style="width: 50%; text-align: center;">△何等卒 △何之誰</td> </tr> <tr> <td></td> <td style="text-align: center;">アスピリン錠</td> <td></td> <td style="text-align: center;">三箇</td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td style="text-align: center;">右一日量三回毎食後服用</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td style="text-align: center;">二%鹽剝水</td> <td></td> <td style="text-align: center;">三〇〇・〇</td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td style="text-align: center;">右一日數四含嗽</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </table>				除	△何	中	等級 氏名	△何等卒 △何之誰		アスピリン錠		三箇			右一日量三回毎食後服用					二%鹽剝水		三〇〇・〇			右一日數四含嗽			
除	△何	中	等級 氏名	△何等卒 △何之誰																								
	アスピリン錠		三箇																									
	右一日量三回毎食後服用																											
	二%鹽剝水		三〇〇・〇																									
	右一日數四含嗽																											

處方錄 第一號紙

(用紙半紙型)

處方錄

△「何々」 病室

△步兵第何聯隊第何中隊

△何等卒 △何之誰

處方錄 第一號紙裏面

(用紙半紙型)

月日	處	方	藥品
△22/日	△沃 一〇〇〇〇 △水 二〇〇〇〇 △右一日量三回每食前服用 △健胃散 二〇〇〇 △サアスター七 〇〇五 △右一日量三回每食後服用 △二多 三〇〇〇 △右一日一回含嗽	△與二日分 醫官印	△牛乳 四〇〇〇 朝夕二回分用
△24/日	△セキが 一〇〇〇〇 △杏仁水 四〇〇〇 △右一日量三回每食前服用 △前健胃散劑 △前健胃散劑 △前健胃散劑	△與二日分 醫官印	△前乳 醫官印

處方錄

--	--

第六〇三

容量ノ單位ハ立方「センチメートル」ヲ基トシ十進法ニ從ヒテ増減ス
攝氏四度ニ於ケル蒸留水一「グラム」ノ容積ハ一立方「センチメートル」ナリ。千立
方「センチメートル」ヲ特ニ一「リットル」トモ云フ

第六〇四

重量ハ秤ニテ、容量ハ液量器ニテ量ルモノトス

第六〇五

秤ニハ上皿秤・吊下天秤・上皿天秤・等ノ別アリ
天秤ヲ用フルニハ左右ノ皿ニ同大ノ藥包紙ヲ載セ平均セシメタル後、所要ノ重錘
ヲ左ノ皿ニ置キ藥ヲ靜ニ右ノ皿ニ載セ量ルヲ例トス。重錘ヲ取扱フニハ必ス鑷子
ヲ用フヘシ

秤及ヒ重錘ハ常ニ清潔ナルヲ要ス、之ヲ清ムルニハ羽帚ニテ塵ヲ去リ乾キタル清
潔ノ軟布ヲ用ヒテ輕ク拭フヘシ、磨粉又ハ真鍮磨・等ニテ磨クヘカラス

第六〇六

液量器ニテ藥ヲ量ルニハ所要ノ度目線ヲ眼ト同シ高サニ保チ之ニ液體ヲ
盛リテ液ノ下位面ト所要ノ度目線トヲ一致スルニ至ラシムヘシ若シ過テ多クヲ注

キタルトキハ之ヲ原容器ニ戻スヘカラス(第九八圖)

第九八圖

第六〇七 藥百分中ニ含まルル成分ノ比ヲ「プロセント」ニテ示シ符號%ヲ用フ例ハ
ハ碳酸二分ヲ取り水九十八分ヲ加ヘ溶解シテ全量百分トナセル碳酸溶液ヲ二%ト
云フカ如シ

第六十五章 藥ノ取扱方

第六〇八 藥ハ人體ニ及ホス作用ノ強弱ニヨリ毒藥・劇藥・通常藥ニ分ツ

- 一 毒藥ハ其ノ作用猛烈ニシテ用量ヲ誤ルトキハ生命ヲ危クス故ニ最モ注意シテ取扱ヒ容器ニハ赤欄赤字ノ名票ヲ附シ他ノ藥ト區別ス
- 二 劇藥ハ毒藥ニ次テ劇シキ作用アリ故ニ注意シテ取扱ヒ容器ニハ赤欄黒字ノ名票ヲ附シ他ノ藥ト區別ス

三 通常藥ハ毒藥・劇藥ノ如キ劇シキ作用ナキモ用量・用法・等ヲ誤ルトキハ害ヲナスコトアリ容器ニハ黒欄黒字ノ名票ヲ附ス

第六〇九 毒藥・劇藥ニハ一回及ヒ一日ノ使用量ニ制限アリ此等ノ最高限ヲ極量ト云フ

第六一〇 藥ノ容器ハ藥ノ種類ニ從ヒテ硝子瓶・藥壺又ハ金屬罐ヲ用フ、例ヘハ液體藥ニハ細口硝子瓶ヲ、固體藥ニハ廣口硝子瓶ヲ、軟膏類ニハ藥壺ヲ、植物ノ根・葉・皮・等ノ生藥類ニハ金屬罐ヲ用フルカ如シ

第六一一 藥ニハ爆發又ハ發火シ易キモノ、點火又ハ揮發シ易キモノ、光ニヨリ變化シ易キモノ、濕氣ヲ引キ易キモノ等アリ故ニ其ノ取扱上ニハ特別ノ注意ヲ要ス

第六十六章 調劑室ノ整頓及調劑ノ注意

第六一二 調劑室ハ特ニ清潔ナラシメ之カ整頓ニ勉ムヘシ其ノ心得左ノ如シ

- 一 室内ニ備付アル器械類ハ一定ノ場所ニ整頓シ使用後ハ必ス原位置ニ復スヘシ
 - 二 棚ニ配列セル藥瓶類ハ必ス定メタル場所ニ置クヘシ
 - 三 調劑器械ハ用ヒタル後直ニ清潔ニシ使用ニ際シ支障ナカラシムヘシ
- 第六一三 調劑ハ忙シキトキモ急ナルトキモ常ニ心ヲ落附ケ誤ラキヤウ注意スヘシ
- 第六一四 藥ヲ取扱フニハ必ス容器ノ名票ニ注意シ誤ナキヤヲ確ムヘシ。容器ニ名票ヲ附セサルカ如キハ藥ヲ誤ラシムル原因ナリ
- 第六一五 一劑ノ調製ヲ終ル毎ニ投藥瓶ニハ瓶札ヲ附シ、散劑其ノ他ノ藥劑ハ藥袋ニ收ムヘシ
- 瓶札・藥袋ハ内用ノモノニアリテハ白色、外用ノモノニアリテハ赤色トシ處方箋又ハ處方録ニヨリ内外用ノ區別・劑名・用法・患者ノ院號(室號)・氏名等ヲ記入スヘシ

第六一六 投藥瓶ハ清潔ニ洗ヒタルモノヲ用フヘシ

第六一七 濾紙ヲ用ヒテ藥液ヲ濾スニハ通常、濾紙ヲ漏斗ノ大サニ適スル圓形ニ切取り之ヲ四ツ折(第九九圖)トナシ半ハ開キテ漏斗ノ内壁ニ密著スル如ク裝ヒ少量ノ水ニテ濕シタル後、行フヘシ濾方ハ第一〇〇圖ノ如クスルヲ可トス

第九九圖

第一〇〇圖

第六十七章 器械ノ清淨及注意

第六一八 調劑器械ハ常ニ清淨ナラシムヘシ、然ラサレハ藥ノ色合・味・臭・等ヲ惡カラシメ患者ニ不快ノ念ヲ抱カシムルコトアリ

第六一九 水牛製・硬「ゴム」製品ハ布片ニテ拭ヒタル後、水ニテ洗ヒ臭ノ去リ難キモノハ石鹼ニテ洗フヘシ

金屬製品ハ毎日、乾キタル布片ニテ淨拭スヘシ

第六二〇 硝子瓶類ノ洗方ハ左ノ方法ニヨル

瓶中ニ清キ砂・紙片・等ヲ入レ少量ノ水ヲ注キ強ク振盪シ十分清潔トナルニ至ラハ砂・紙片・等ヲ去リ淨水ニテ數回洗フヘシ、外面ノ汚染ハ糸瓜・布片・等ニ磨砂ヲ著ケ擦ルヲ可トス

油類 著キタルモノハ石鹼水「ソーダ」水・等ニテ洗フヘシ

共口硝子瓶ヲ洗フニ當リ一時ニ多數ノ栓ヲ抜クヘカラス栓ヲ取違ヒ瓶口ノ適合ヲ不良ナラシムレハナリ

第六二一 硝子瓶内ニ落ちタル木栓ヲ取ルニハ硝子棒又ハ箸ノ如キ細キ棒ニテ布片ノ角ヲ瓶口ヨリ挿入シ置キ、振リテ木栓ヲ略、布片ニ絡マセ靜ニ引抜クヲ可トス

第六二二 瓶ノ木栓ヲ抜クニハ拔栓子ヲ栓ノ中央ニ眞直ニ捻込ムヘシ、栓ニ封蠟・「パラフィン」・石膏・等ヲ被包シアラハ豫メ小刀・篋・等ヲ用ヒテ十分ニ之ヲ打チ落

シ更ニ濕シタル布片ニテ拭フヲ要ス

硝子栓ノ瓶口ニ固著シ抜ケサルトキハ木片ニテ數回、栓ノ横ヲ輕ク打ツヲ可トス

第六二三 木栓ハ瓶口ヨリ稍、大ナルモノヲ選ビ壓栓器ニテ輕ク壓搾シテ用フルヲ可トス

第六十八章 主ナル調劑

第一 水劑

第六二四 水劑ハ一種又ハ數種ノ藥ヲ水ニ溶シタルモノナリ

第六二五 水劑ヲ製スルニハ處方箋又ハ處方録ニ示シタル藥ヲ量リ投藥瓶ニ入レ所要量ノ水ヲ加ヘ溶解スヘシ、之ヲ透シ視ルニ塵アルトキハ濾シテ與フ

第二 飽和劑

第六二六 飽和劑ハ通常、酒石酸ト重曹トヲ作用セシメテ生シタル炭酸瓦斯ヲ飽和

セル水劑ナリ

第六二七 飽和劑ハ密栓シテ冷所ニ貯ヘ且ツ振盪セサルヤウ注意スルヲ要ス

第三 乳劑

第六二八 乳劑ハ油類ノ如キ水ト混シ難キ藥ヲ「アラビアゴム」末又ハ卵黃ノ媒ニヨリ水ト親密ニ混和セシメタルモノナリ、其ノ外觀、乳汁ノ如クナルヲ以テ此ノ名アリ

第六二九 乳劑ハ通常、不快ノ臭味アル藥ヲ飲ミ易カラシムルニ適ス。服用時振盪スルヲ要ス

第四 浸劑及煎劑

第六三〇 浸劑・煎劑ハ生藥類ノ成分ヲ水ニテ溶出セシメタルモノナリ、之ヲ製スルニハ通常、浸煎劑器ヲ用フ

第六三一 浸劑・煎劑ハ腐敗シ易キヲ以テ使用ノ都度、製スルヲ可トス

- 一、浸劑ヲ製スルニハ細切セル藥ニ熱湯ヲ注キ沸湯中ニ入レ屢、振盪シツツ五分間、加熱シ冷後、水ニテ濕シタル布ヲ用ヒテ壓濾シ其ノ濾液ヲ取ルヘシ
 - 二、煎劑ヲ製スルニハ細切セル藥ニ冷水ヲ注キ沸湯中ニ入レ三十分間、加熱シ温ニ乘シ布ヲ用ヒテ壓濾シ其ノ濾液ヲ取ルヘシ
- 濾布ニハ各藥毎ニ名稱ヲ記シタル札ヲ附シ彼此混用スヘカラス、又一タヒ使用シタルモノハ能ク洗ヒ乾シ置クヘシ

第五 散劑

第六三二 散劑ハ一種又ハ數種ノ藥ヲ研リ合セタル粉末ナリ

第六三三 散劑ヲ製スルニハ先ツ藥ヲ秤量シ之ヲ乾キタル乳鉢ニ取り乳棒ニテ輕ク研リ混セ乳鉢ノ内面及ヒ乳棒ニ附キタルモノハ匙ニテ搔キ落シ十分ニ研リ合スヘシ

分量少キモノト多キモノヲ混スルニハ先ツ分量多キ藥ノ少許ヲ乳鉢ニ取り之ニ分

量少キ藥ヲ加ヘテ能ク研リ混セ次ニ殘リノ藥ヲ漸次ニ加ヘ研リ合スモノトス

第六三四 散劑ハ一回ノ用量ツツ過不足ナク藥包紙ニ分チ包ムヘシ其ノ包ミ方ハ通常(第一〇一圖)ノ如シ

第一〇一圖

第六三五 散劑中臭・味不良ナルモノハ膠蜜ニ入レ又ハ「オブラート」ヲ添ヘテ與フ

第六 丸劑

第六三六 丸劑ハ數種ノ藥ヲ煉リ合セ小球トナセルモノナリ。通常、不快ノ臭味アル藥ヲ吞ミ易カラシムルニ適ス

第六三七 丸劑ハ丸劑器ヲ用ヒテ製ス、大サニ不同ナク又軟ニ失セズ、硬キニ過キサルヲ可トス。通常曲物ニ入レ與フ

第七 錠劑

第六三八 錠劑ハ藥ヲ壓碎シテ小圓板形トナシ每錠中一定ノ藥量ヲ含マシメタルモノナリ故ニ錠劑ハ藥ヲ量ル煩ヲ省クノミナラス貯藏・携帶及ヒ服用ニ便ナリ

錠劑ハ乾キタル所ニ貯フルヲ可トス

第八 注射劑

第六三九 注射劑ハ一種又ハ數種ノ藥ヲ液體ニ溶解又ハ混和シ滅菌シタルモノナリ

第六四〇 注射劑ニハ「モヒ」液・「カムフル」液・等ノ如ク融閉硝子管(アムブルレ)ニ入レ滅菌シタルモノアリ、携帶・貯藏ニ便ナリ

第九 點眼劑

第六四一 點眼劑ハ一種又ハ數種ノ藥ヲ新ニ製シタル冷蒸餾水ニ溶シ濾シテ製ス
點眼劑ハ通常點眼瓶ニ入レ與フ

第一〇 灌腸劑

第六四二 灌腸劑ニハ瀉下灌腸劑ト滋養灌腸劑トノ二種アリ何レモ用ニ臨ミテ調製ス

常用瀉腸劑ハ瀉下瀉腸劑ノ一種ナリ

第一一 含嗽劑・吸入劑及卷法劑

第六四三 含嗽劑・吸入劑・卷法劑ノ調製法ハ概ネ水劑ニ同シ

第一二 膏劑

第六四四 膏劑ニハ硬膏劑ト軟膏劑トノ二種アリ

第六四五 硬膏劑ニハ「ゴム」絆創膏・「ピツク」膏・等ノ如ク豫メ布ニ展シタルモノ多シ

第六四六 軟膏劑ヲ製スルニハ藥ノ細末ヲ乳鉢又ハ膏藥板ニ取リ少量ノ基礎藥ト能ク煉リ合シタル後漸次殘リノ基礎藥ヲ加ヘ毫モ顆粒等ヲ認メサルニ至ル迄十分ニ煉合スヘシ。通常曲物又ハ蛤貝ニ入レ與フ

基礎藥ニハ通常單軟膏・白色「ワセリン」・「ラノリン」・「バラフィン」軟膏・等ヲ用フ

第一三 坐藥

第六四七 坐藥ハ肛門又ハ尿道ニ挿シ込ム藥ニシテ肛門ニ用フルモノハ圓錐形ヲナシ尿道ニ用フルモノハ細桿狀ヲナス、共ニ常溫ニ於テハ固體ヲナスモ體溫ニテハ漸次融クルモノナリ
坐藥ハ通常曲物ニ入レ與フ

第六十九章 主ナル藥物

第六四八 主ナル藥物ノ名稱・性状・貯藏法・等ヲ參考トシテ附録第一ニ掲ケ

第十編 衛生材料

第七十章 衛生材料ノ區分

第六四九 衛生材料トハ衛生勤務ニ用フル材料ヲ云ヒ之レヲ器械・藥物・消耗品ニ大別ス

第六五〇 衛生材料中戰時ニ用フルモノヲ戰用衛生材料ト云ヒ、平時ニ用フルモノヲ常用衛生材料ト云フ、但シ其ノ構造・等平戰共ニ同一ナルモノアリ

第六五一 戰用衛生材料ノ主ナルモノハ醫板類・擔架・綑帶囊・醫療囊・軍醫携帶囊・手術用天幕・等ナリ

常用衛生材料中、日常使用スル主ナル器械ハ既ニ掲ケタルモノノ外、治療ノ爲メニ外科囊・「トラホーム」鑷子・剃刀箱・治療箱・綑帶交換臺・綑帶材料箱・等ヲ具ヘ、身體檢査ノ爲メニ身體檢査器械・板付「レンズ」・體重計・身長計・等アリ、又行軍、演

習ニ携行スルモノニ藥劑行李アリ

第七十一章 醫板類

第六五二 醫板トハ戰地ニ携行スル諸材料ヲ取纏メ格納セル行李ニシテ箱ノ外面ニ名稱・番號・等ヲ記載セルノ外、赤十字章ヲ附ス
醫板類ニハ醫板・野戰滅菌器・手術燈・野戰手術臺・患者食器・等アリ

第一 醫板

第六五三 醫板ニハ左ノ種類アリ

- 一 隊醫板 戰鬪隊ノ携行スルモノナリ
- 二 衛生隊醫板 衛生隊ノ携行スルモノナリ
- 三 病院醫板 野戰病院・野戰豫備病院・兵站病院ノ携行スルモノナリ
- 四 廠醫板 野戰衛生材料廠ノ携行スルモノナリ

第六五四 醫校内容品中ノ赤十字旗・赤十字燈・道標(第一〇二圖)・搜索燈(第一〇三圖)等ノ事ハ擔架教程ヲ参照スヘシ

第一〇二圖

第一〇三圖

第二 野戰滅菌器及手術燈

第六五五 野戰滅菌器ト手術燈トハ同一ノ箱ニ納ム、甲ハ第一四一ノ一ニ記載セルモノ、乙ハ「アセチレン」燈ニシテ瓦斯發生筒・導管・焰管・反射笠・鎖ヨリ成リ炭化石灰入・焰管ノ修理ニ用フル焰管鉗子及ヒ硝子ヲ附屬ス。之ヲ用フル法左ノ如シ(第一〇四圖)

炭化石灰ヲ發生筒ノ側壁ニアル横線ノ高サ迄填メ尙、筒内ニアル篩狀棚ノ上ニモ盛リ水筒ニ水ヲ注キテ發生筒ニ取著ケ密ニ螺定スヘシ

導管ノ一端ヲ水筒上ノ瓦斯噴出口ニ、他端ヲ焰管ニ螺定シテ之ヲ反射笠ノ下ニ取

著ケ反射笠ハ鎖ニテ釣ルヘシ

水筒上面ノ中央ニアル螺旋ヲ僅ニ「開」ノ方向ニ廻セハ水ハ發生筒ニ入り瓦斯ヲ發生ス、此クシテ瓦斯ノ發生漸ク十分ナルニ至レハ焰口ニ火ヲ點スヘシ

第一〇四圖

第三 野戰手術臺

第六五六 野戰手術臺ハ鐵骨「アルミニウム」板張ニシテ盤・脚・脚張ヨリ成リ折疊式ナリ(第一〇五圖)

第一〇五圖

第四 患者食器

第六五七 患者食器ハ皿・匙・「バケツ」ヨリ成リ、「バケツ」ニハ木製ノ蓋アリ(第一〇六圖)

第一〇六圖

第七十二章 擔架

第六五八 擔架ハ平時ニモ戰時ニモ用ヒラル、擔架教程ヲ参照スヘシ

第七十三章 繙帶囊及醫療囊

第六五九 繙帶囊・醫療囊ハ平時ニモ戰時ニモ用ヒラレ行軍、演習ニ際シ甲ハ看護卒、乙ハ看護長之レヲ携帶ス

繙帶囊・醫療囊ハ共ニ革製ノ囊ニシテ囊體・囊蓋・吊革・帶革ヨリ成リ蓋ノ前面ニ繙帶囊ハ橢圓形ノ白地ニ、醫療囊ハ方形ノ白地ニ赤十字章ヲ現ハセルモノヲ附ス
繙帶囊ノ内容品ノ使用ハ擔架教程ヲ参照スヘシ。繙帶囊ノ内容品・醫療囊ノ内容品中ノ器械ハ参考トシテ第二、第三附録ニ掲ク

第七十四章 軍醫携帶囊

第六六〇 軍醫携帶囊ハ平時ニモ戰時ニモ用ヒラレ行軍、演習ニ際シ軍醫之ヲ携帶ス

軍醫携帶囊ハ雙眼鏡様ノ革製ノ囊ニシテ蓋ノ前面ニ圓形ノ白地ニ赤十字章ヲ現ハセルモノヲ附ス。内容品中ノ器械ハ参考トシテ附録第四ニ掲ク

第七十五章 手術用天幕

第六六一 手術用天幕ハ野外ニ於テ手術ヲ行フ爲メ使用スル幕舎ナリ時トシテ患者ノ收容ニ用フルコトアリ

第七十六章 主ナル器械

第一 外科囊

第六六二 外科囊ハ外科手術ニ要スル器械ヲ金屬函ニ入レ更ニ革製ノ囊ニ納メタル

モノナリ。内容品ハ参考トシテ附録第五ニ掲ク

内容品中注意スヘキ事、等左ノ如シ

- 一 刀類ハ身ト柄トヨリ成リ身ノ銳キ部分ヲ及ト云フ、及ハ硬キモノニ觸ルル
トキハ損シ易シ。通常、使用ニ先タチ革砥ヲ用ヒテ附及ヲ行フヘキモ熟練セ
サルトキハ却テ及ヲ損ス
- 二 鉄類ハ樞軸部ノ具合ニヨリ切レ味ニ差アリ之レヲ調節セントシテ安リニ螺
子ヲ締ムヘカラス及ノ咬合ヲ不具合トナラシムルコト多シ
- 三 革砥ハ其ノ表面ニ塗料ヲ施シタル部ト施ササル部トアリ、刀ノ附及ヲナス
ニハ塗料アル面ヲ用ヒ次ニ塗料ナキ面ニテ及合セラナスモノトス
裏面ニハ内容品入組ノ順序ヲ記セリ
- 四 磨革ハ器械類ノ淨拭ニ用フ

第二 剃刀箱

第六六三 剃刀箱ハ剃刀ト砥石トヨリ成リ、砥石ニハ合砥ト對島砥トアリ

剃刀ヲ磨クニハ剃刀箱ノ上ニ布ヲ敷キ合砥ヲ載セ少量ノ水ヲ注キ對島砥ヲ用ヒテ
合砥ノ面ヲ磨キタル後、剃刀ノ及面ヲ平ニ砥石面ニ合セラ研キ能ク拭ヒ更ニ磨革
ヲ用ヒテ及合セラナシ切レ味ヲ檢スヘシ

第三 身體検査器械

第六六四 身體検査器械ハ眼・耳・鼻・咽頭・喉頭・等ヲ検査スルニ要スル器械ヲ木製
ノ箱ニ納メタルモノナリ内容品中ノ器械ハ参考トシテ附録第六ニ掲ク

第四 體重計

第六六五 體重計ハ臺秤ナリ

體重計ヲ用フルニハ平ナル場所ニ据付ケ、車ノ移動ヲ防キ、水平ナルヤ否ヤヲ確メ
次テ機能ニ障害ナキヤヲ檢シタル後、測ルヘシ、秤桿若シ水平ナラサルトキハ調
子玉ヲ動かシテ之レヲ調節ス

體重計ハ使用セサルトキハ秤桿ヲ留メ置クヘシ

第五 藥劑行李

第六六六 藥劑行李ハ行軍演習ニ携行スル諸材料ヲ取纏メ格納セル行李ニシテ箱ノ外面ニ名稱ヲ記シ赤十字章ヲ附ス
内容品中ノ器械ハ參考トシテ附録第七ニ掲ク

第七十七章 衛生材料格納保全法

第一手入

第六六七 衛生材料ヲ完全ニシ用ニ望ミ支障ナカラシムル爲メ行フ手入法ニ清拭・
澤拭・防銹・革具拭・防蟲・防微・洗濯アリ

其一 清拭

第六六八 清拭トハ器械類ニ附キタル塵・油垢・等ヲ拭ヒ去ルヲ云フ、其ノ法左ノ如

シ

- 一 金屬製品ハ清潔ナル軟キ磨革又ハ軟布ニテ拭フヘシ
 - 二 其ノ他ノ器械類ハ刷毛又ハ布片ニテ拭フヘシ
- 塗料ヲ施セル物ハ清拭ノ際、強ク擦ルヘカラム

其二 澤拭

第六六九 澤拭トハ銅・真鍮・洋銀又ハ「ニッケル」鍍金セル器械ノ翳ヲ除クヲ云フ、
其ノ法左ノ如シ

- 一 銅製品ハ粗製「ワセリン」ヲ塗りタル硬キ刷毛ニテ磨クヘシ
- 二 真鍮・洋銀製品ハ細カキ木炭末又ハ真鍮磨ヲ塗りタル軟布ニテ磨クヘシ
- 三 「ニッケル」鍍金セル器械ハ細カキ角粉ヲ著ケタル軟布ニテ磨クヘシ

其三 防銹

第六七〇 防錆トハ金属製品ノ銹ヲ防クヲ云フ、其ノ方法ニ油引・「ワニス」引・「ラツク」引アリ

油引・銅製器械ヲ清拭シタル後、流動「バラフィン」又ハ黄色「ワセリン」ヲ薄ク全面ニ塗布スル法ナリ、之ヲ行フニハ成ルヘク手指ノ觸ルルコトヲ避クヘシ殊ニ汗シミタル手ニテ取扱フヘカラス又手入後ハ指紋・糸屑ヲ残ササルコトニ注意スルヲ要ス

其四 革具拭

第六七一 革具拭トハ革具ニ施ス手入法ヲ云フ、其ノ法左ノ如シ

- 一 普通ノ手入ニハ表裏両面ヲ乾キタル布片又ハ刷毛ニテ拭ヒタル後、其ノ表面ニ革具「クリーム」ヲ塗り刷毛又ハ布片ニテ十分ニ擦ルヘシ
- 二 革具ノ硬化ヲ防クニハ革具「クリーム」ヲ塗ルニ先タチ表面ニ刷毛ヲ用ヒテ萎油ヲ塗布シ擦ルヘシ

硬化セル革具ハ安リニ屈スルコトナク萎油ヲ塗布シタル後一日間、放置シ尙柔軟ノ度足ラサルトキハ更ニ萎油ヲ塗ルヘシ、柔軟ノ度ハ革ヲ指ニ纏ヒテ彎曲ヲ試ミ表面ニ輝裂ヲ生セヌ又革色稍變スルモ原形ニ復スレハ復色スル程度ニ至ルモノトス

其五 防 蟲

第六七二 防蟲トハ布製品・紙製品・羽毛製品・等ノ蟲蝕ヲ防クヲ云フ、其ノ最モ簡單ナル法トシテ晴天乾燥ノ日ニ材料ヲ屋外ニ出シ日光ニ曝スヘシ、布類ハ之ヲ打チテ塵埃ヲ去ルヲ要ス

其六 防 黴

第六七三 防黴トハ革具・布類ニ黴ノ生スルヲ防クヲ云フ、黴ヲ生シタル場合ニ行フ手入法左ノ如シ

- 一 革具・布張函類ハ刷毛又ハ絨布ニテ擦リニ・五%「クレゾール」水（布張函類

ハ五%「フオルマリン」水ニ浸シタル布片ニテ拭ヒ陰乾スヘシ
革具ノ微痕、去リ難キトキハ五%薬用石鹼水ニ浸シタル布片又ハ刷毛ニテ擦
リ尚、效ナキトキハ更ニ硝子破片ノ縁ニテ輕ク擦ルヘシ

二 綿布・麻布類ハ日光ニ曝シテ打チ又ハ洗濯シテ乾燥スヘシ

其七 洗濯

第六七四 洗濯ハ布製品ノ汚染ヲ除ク方法ナリ、其ノ法ハ普通ノ洗濯ニ準ス、凡ソ
汚染ノ時日ヲ經過シタルモノハ容易ニ除キ難キニヨリ注意スヘシ

第二 格納保全

第六七五 衛生材料格納保全ニ付注意スヘキ事左ノ如シ

一 凡ソ破損シ易キ材料ノ格納ニ際シテハ地震等ノ場合ヲ顧慮シ豫メ顛倒・墜
落・等ヲ豫防スルモノトス

二 湿润セル材料ハ乾燥後ニアラサレハ格納スヘカラス

三 「ゴム」製品ト金屬類トハ同一容器内ニ貯フヘカラス

四 金屬類ト著色布片又ハ革質トノ接觸ハ成ルヘク之ヲ避クヘシ、又金屬類
ト木質トノ接觸ハ多量ノ油引ヲナシ又ハ礪砂紙ニテ包ミタル場合ノ外之ヲ避
クルヲ可トス

五 衛生材料手入ノ際ハ銹・破損・等ニ注意シ修理ノ必要アルトキハ上官ニ報ス
ヘシ

六 新ニ受入又ハ一タヒ使ヒタル器械類ハ格納ニ先タチ手入ヲ行フヘシ、貯藏
中ノ金屬製品(塗料ヲ施シタルモノヲ除ク)ニ手指ヲ觸レタルトキ亦同シ

七 注射器類ノ管針ハ使用后、細キ針金ヲ通シテ十分洗ヒ乾シ細キ眞鍮線(ワ
ンドリン)ヲ通シテ貯フヘシ

管針ハ使用スルニ從ヒ切レ味、鈍ルヲ以テ屢、研磨ヲ要スルモノトス

八 藥劑行李ヲ携行スルニハ其ノ内容品ノ破損等ヲ防クカ爲メ絲瓜又ハ綿・等

ヲ空所ニ充タヌヘシ殊ニ液體藥ハ他物ヲ害スルコト多キヲ以テ能ク栓塞シ其ノ外部ニ覆帽(ヨロド丁農ハ)ヲ施スヲ可トス。

附 録

第一主要藥物表

藥 體	劇 固				藥 體		毒 固	區 分
	皓	コ	ラ	沃	モ	昇		
皓	コ	ラ	沃	甘	モ	昇	昇	名
鑒	カ	ー	剝	汞	ヒ	汞	汞	
硫酸亞鉛	コカイン	硝酸銀加硝石	ヨロトカリウム		液			稱
	鹽酸コカイン	光ニ觸ルレハ變質ス	濕氣ニ觸ルレハ漸次變質ス		液			
				光ニ觸ルレハ變質ス	液			摘
					液			
					液			要
					液			
					液			貯 藏 法
					液			

通 常 藥											區 分			
固 體										名				
藥用石鹼	ヂアスターゼ	生石灰	重曹	硝 蒼	食 鹽	臭 剝	明 礬	晒 粉	サリチール酸		撒 曹	稱	摘	要
		煨製石灰	重炭酸ナトリウム	次硝酸蒼鉛	△クロールナトリウ	フロームカリウム		クロール石灰		サルチール酸ナトリウム				硝子瓶密栓遮光
	濕氣ヲ引キ效力ヲ減シ易シ	大氣中ニ放置スレハ水分及炭酸ヲ吸收シテ變質ス又水ニ遇ヘハ烈シク發熱ス						他物ヲ腐蝕ス、水ヲ貯藏シタルモノハ効力ヲ減ス						硝子瓶密栓遮光 硝子瓶、密栓遮光 冷所
	硝子瓶密栓 除濕器	同 前	密 閉 器	同 前	硝子瓶密栓	硝 子 瓶								

通 常 藥											區 分				
固 體										名					
樟腦軟膏	硼 膏	亞鉛華軟膏	白色ワセリン	パラフィン軟膏	ピツク膏	樹脂硬膏	ゴム絆創膏	ゼネガ根	キ ナ 皮		プロタルゴール	健 胃 散	稱	摘	要
	硼酸軟膏				サリチール酸石鹼 硬膏					プロテイン銀					硝子瓶密栓
同 前	同 前	嫌惡スヘキ臭氣アルモノハ用フヘカラ					糸卷式ノモノハ、一、二、三號ノ區別アリ	微ヲ生シ易シ		水ニ溶クニ當リ攪盪セハ池ヲ生シ溶クトス 難キニ依リ全ク溶クル迄靜置スルヲ可					硝子瓶、密栓遮光
同 前	同 前	密閉冷所		密閉冷所	同 前	同 前	冷 乾 所	同 前	金 屬 罐						

通 常 藥										區 分	
液 體					軟 膏						
水銀軟膏	參硫膏	ワセリン	單膏	硫黃米糊	イヒチオール	常用瀉腸劑	縮水	過酸化水素液	グリセリン	ブロー液	名
タール硫黃泥膏	黃色ワセリン	單軟膏	スルフォイヒチオ ール酸アマモニワ	蒸溜水	熱スルーキハ 液酸アルミニウム	一劑ハ藥用石鹼 ノムニ溶シテ製ス	水ヲ貯藏シタルモノ 用フヘカラフ	開栓ニ際シ烈シク瓦斯 ヲ出スルコト アルヲ以テ注意スヘシ			稱
嫌惡スヘキ臭氣アルモノ ハ用フヘカラ	用ニ臨ミ能ク攪拌スヘシ	嫌惡スヘキ臭氣アルモノ ハ用ニ堪ヘ	新ニ調製シタルモノヲ用フ		揮發シ易ク且引火シ易キヲ以テ注意ス ヘシ	アムプルレン、二五〇cc及五〇〇cc入 ノ區別アリ、固形物ヲ折出シタルモノ ハ使用ニ堪ヘス	固形物ヲ折出シタルモノハ使用ニ堪ヘ ス				摘
同密閉冷所	同	同	密閉冷所								要
貯藏法	前										貯藏法

通 常 藥										區 分	
液 體											
鹽リモ	酒精	滅菌食鹽水	生理的食鹽水	リチネ油	カムフル液	單舍	メンタ酒	苦丁	赤酒	牛乳	名
鹽酸リモナーテ		滅菌生理的クロー ルナトリウム液		蓖麻子油	滅菌樟腦液	單舍利別		苦味丁幾	赤葡萄酒		稱
					アムプルレン、固形物ヲ折出シタルモノ ノハ使用ニ堪ヘス					新鮮ナルモノヲ滅菌シテ用ユ	摘
											要
											貯藏法

區分	名稱	摘要	貯藏法
通液	ス ー ブ	之ヲ製スルニハ脂肪少ナキ新鮮ナル牛 肉(鶏肉)ニ百分ヲ取リ細シテ水四百 分ヲ加ヘ時々攪拌シテ冷所ニ 置キタル後熱湯上ニテ大約半量ニ 迄煮詰メ冷後濾布ニテ濾シ其液ニ食 塩一分ヲ加フ 用ニ臨ンテ調整スヘシ	
藥體			
雜用	第一 繃帶囊		
安全針	鉛筆	ナ イ フ	
管入沃丁	ノ ン タ 酒	螺旋止血帶	
ゴム絆創膏	昇汞ガーゼ包	卷軸帶	
死傷手簿		通信紙	
第二 醫療囊			

兼用 銚子 銚子 體温計
ナイフ 螺旋止血帶 皮下注射器

第四 軍醫携帶囊

外科小囊 皮下注射器

第五 外科囊

圓刀 尖刀 球頭彎刀
彎刀 有鉤鑷子 ペアン鉗子兼持針器
鑷子 銳匙 消息子
ペアン鉗子 カテーテル 反鉗
直銚 溝消息子 革 砥

縫合針 磨革

第六 身體檢查器械

反射鏡	ポリーチェル球	聽診器
歐氏管カテーテル	音叉	オトスコープ
角膜計	通氣漏斗	卷尺
攜帶眼鏡囊	檢眼鏡影鏡	ブシ
喉頭鏡	肛門鏡	壓舌子
消息子	耳漏斗	耳鼻用捲綿子
耳匙	耳洗水筒	耳鼻用鑷子
鼻鏡	鑷子	點眼管

第七 藥劑行李

灌水器	體溫計	膿盤
外科藥	剃刀箱	壓舌子
煮沸滅菌器	耳鼻咽喉器械	皮下注射器
洗球子		

第一圖



- | | | | | | | | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 14 | 13 | 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 項 | 側 | 前 | 耳 | 下 | 頤 | 口 | 頰 | 鼻 | 眼 | 後 | 額 | 顛 | 前 |
| 部 | 部 | 部 | 翼 | 部 | 部 | 唇 | 部 | 部 | 部 | 部 | 部 | 部 | 部 |

4 3 2 1
 項頤後顛
 顛頤頤頤
 部部部部

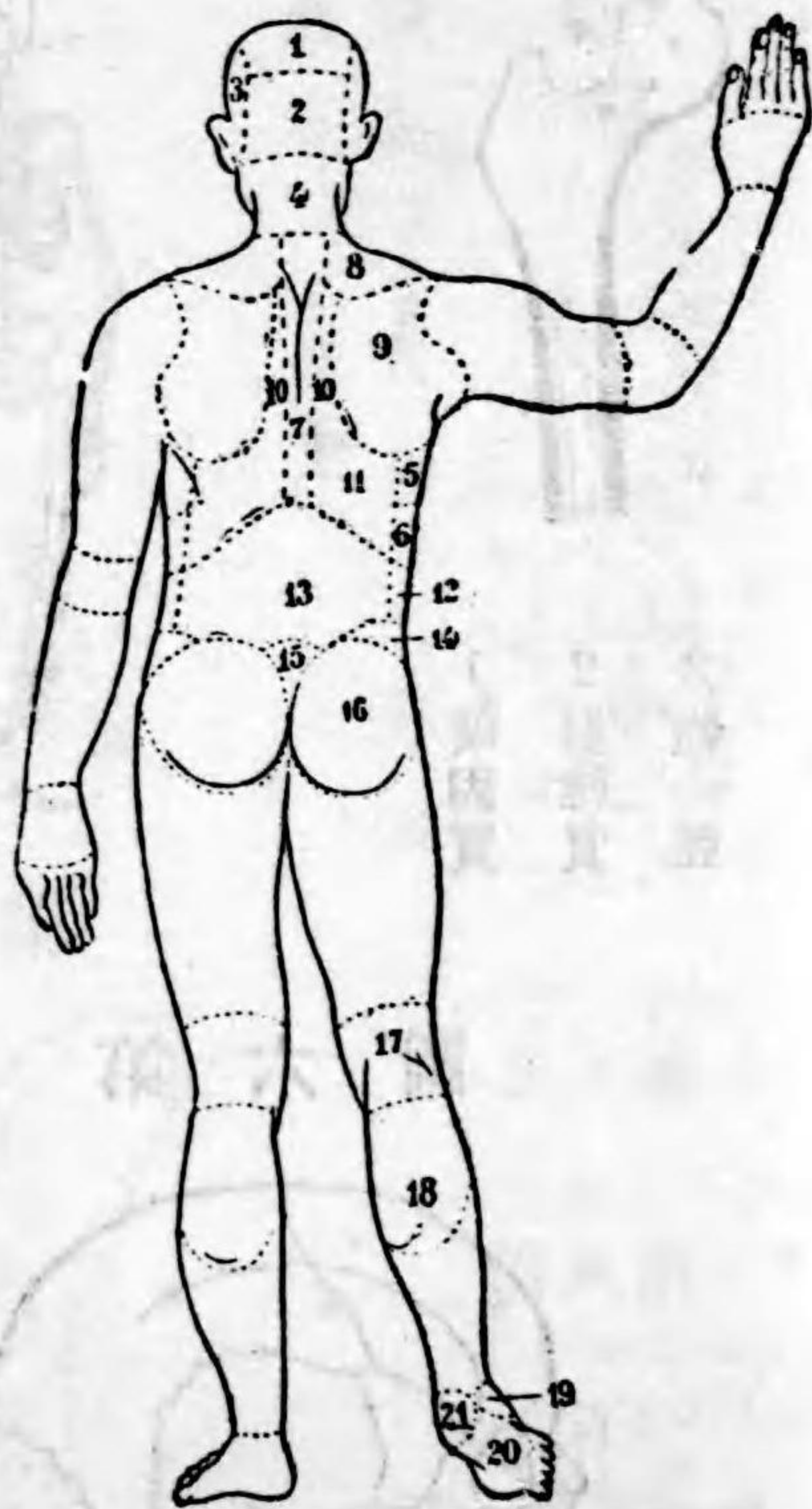
8 7 6 5
 肩背季側
 胛柱肋胸
 上部部部

12 11 10 9
 側肩肩肩
 胛胛胛
 腹下間
 部部部部

16 15 14 13
 臀薦腸腰
 骨骨
 部部部部

三 21 20 19 18 17
 踵足外腓膝
 蹠蹠腸屬

圖 三 第



8 7 6 5 4 3 2 1
 頤口頰鼻眼頤顛前
 唇 顛頂顛
 部部部部部部部部

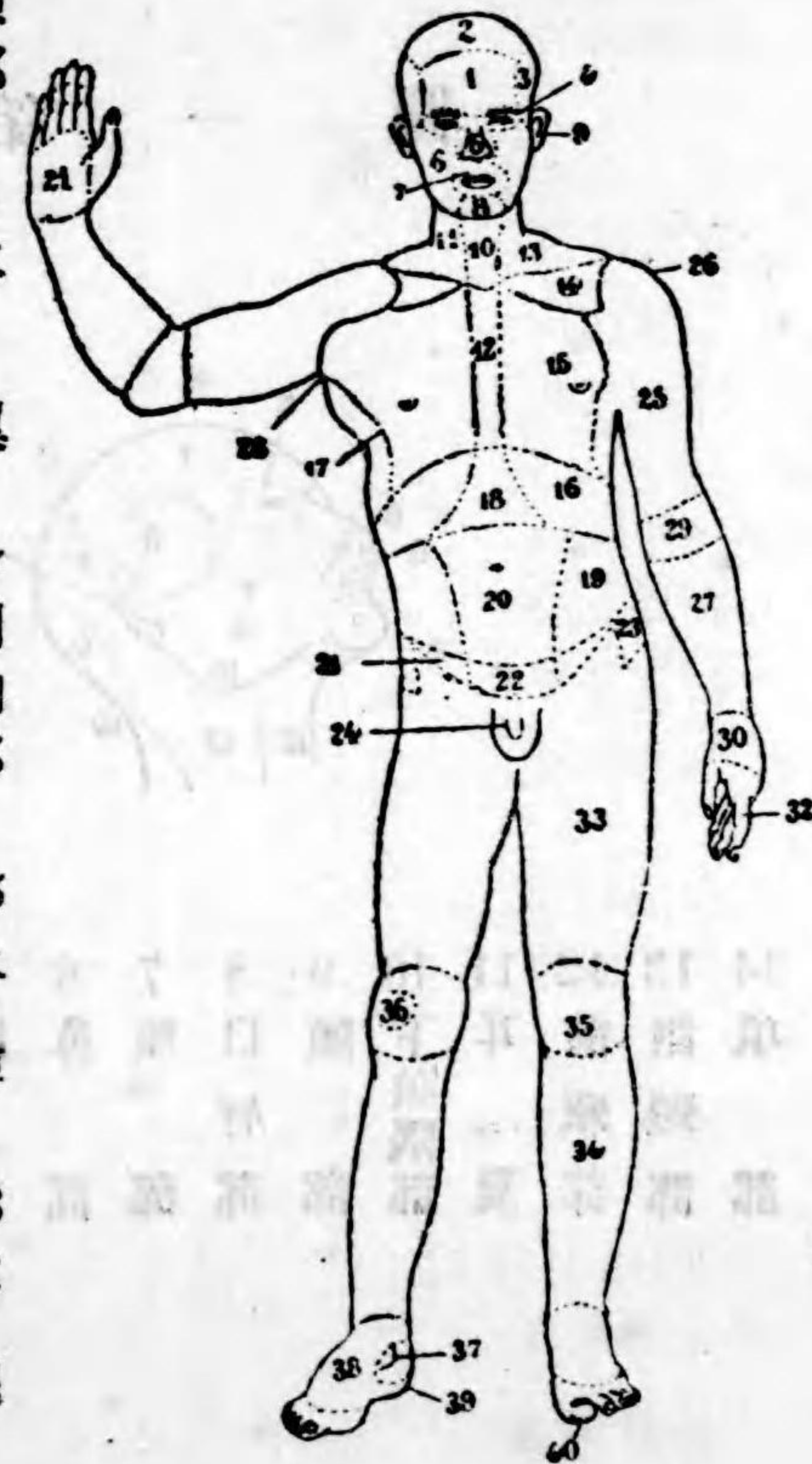
16 15 14 13 12 11 10 9
 季乳鎖鎖鎖胸側前耳
 肋房骨骨骨頸頸
 部下上骨頸頸
 部部高髙部部部翼

24 23 22 21 20 19 18 17
 陰腸耻鼠臍側上側
 骨 蹠 腹腹胸
 部部部部部部部部

32 31 30 29 28 27 26 25
 指手手肘腋前肩上
 掌背部窩膊頭膊

40 39 38 37 36 35 34 33
 趾踵足內膝膝下大
 背蹠蓋部腿腿

圖 二 第



圖四第



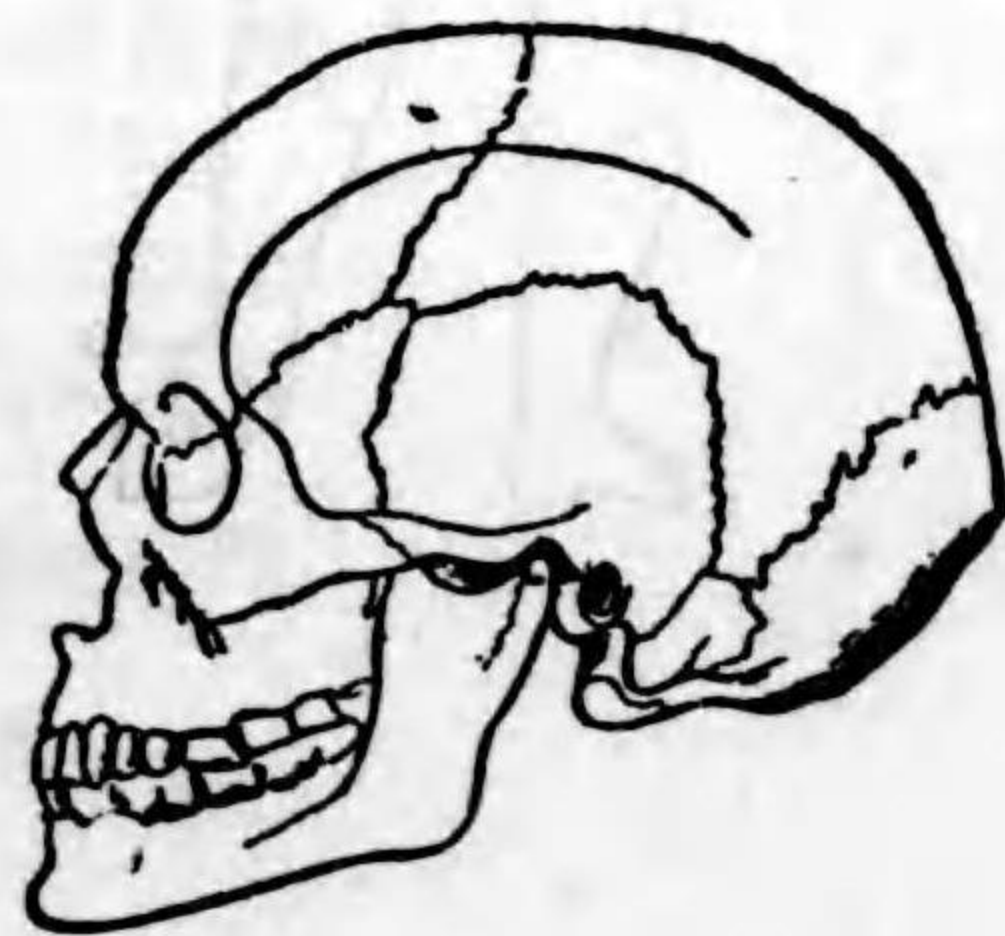
圖五第



1 硬固質
2 海綿質
3 髓腔

23

圖六第

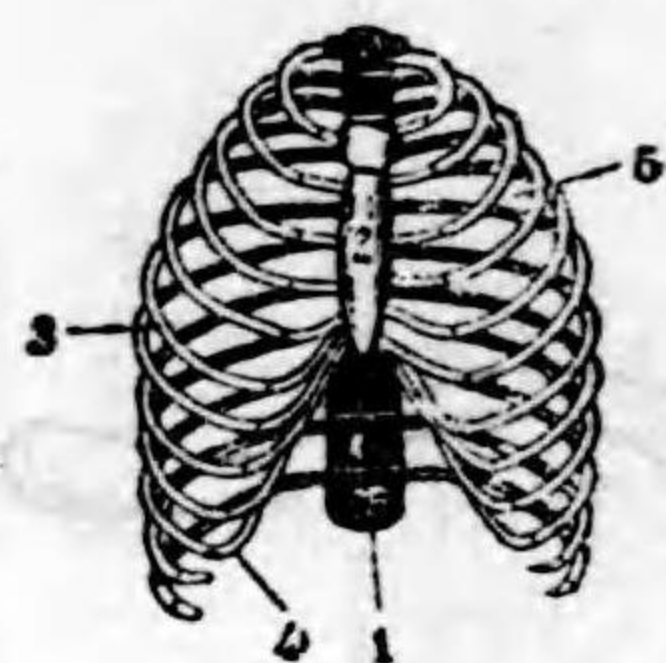


圖七第



1 頸椎
2 薦骨
3 尾骶骨
4 背椎
5 腰椎

圖九第



1 胸椎
2 胸骨
3 肋骨
4 肋軟骨
5 肋間

圖〇一第



五

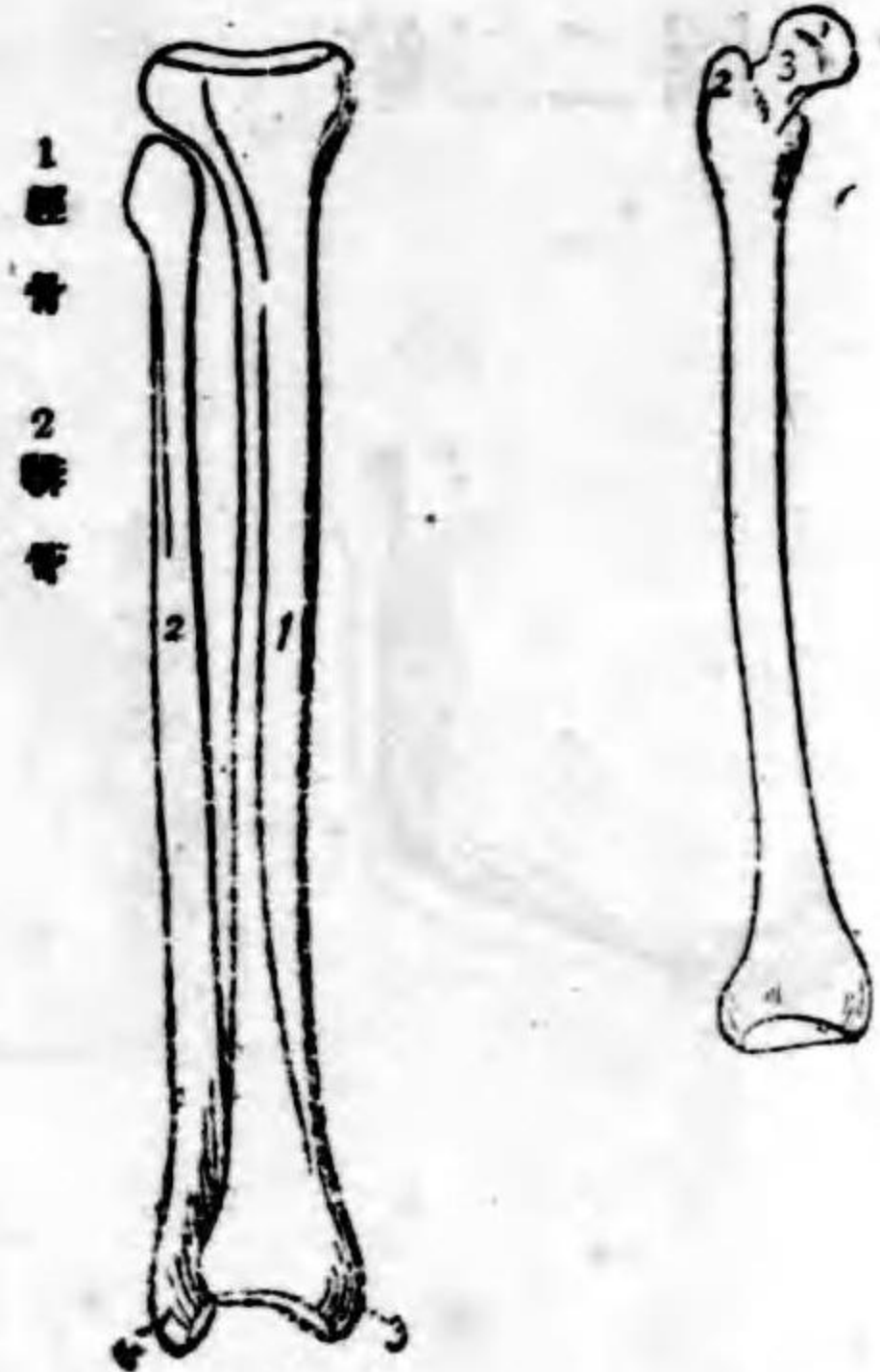
1 腸骨
2 坐骨
3 耻骨
4 薦骨
5 腸骨前上棘
6 脾白

圖八第



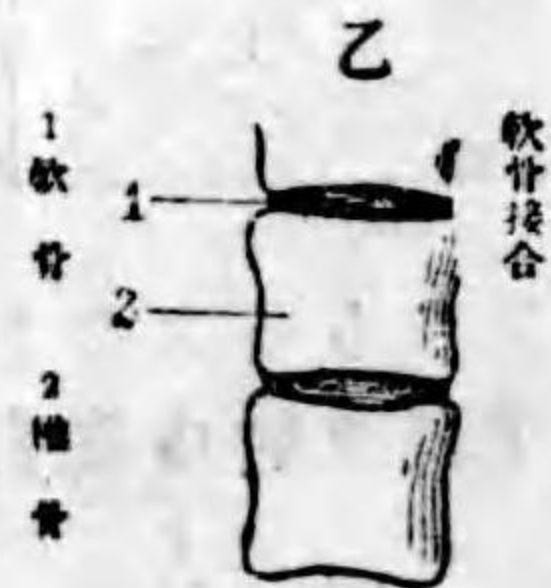
圖八一第 圖七一第 圖六一第

1 乃至 7 跗骨
1 乃至 3 趾骨



圖九一第

骨蓋頭
甲



乙

骨蓋合

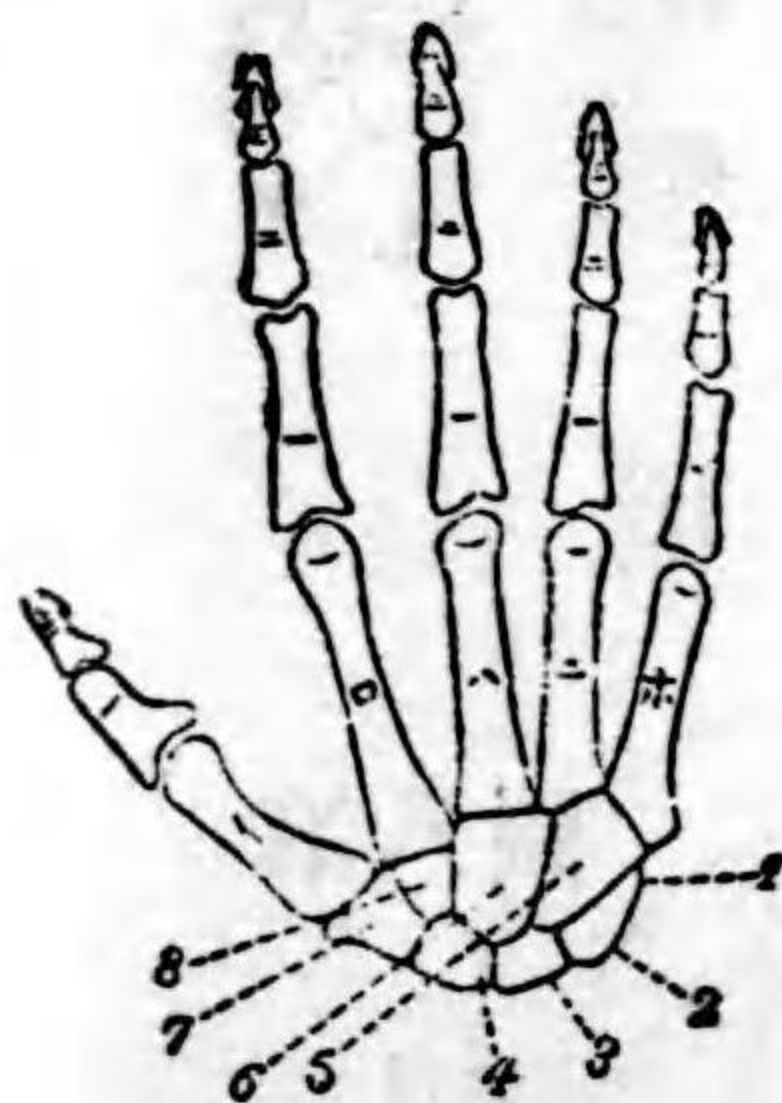
圖二一第



圖一一第



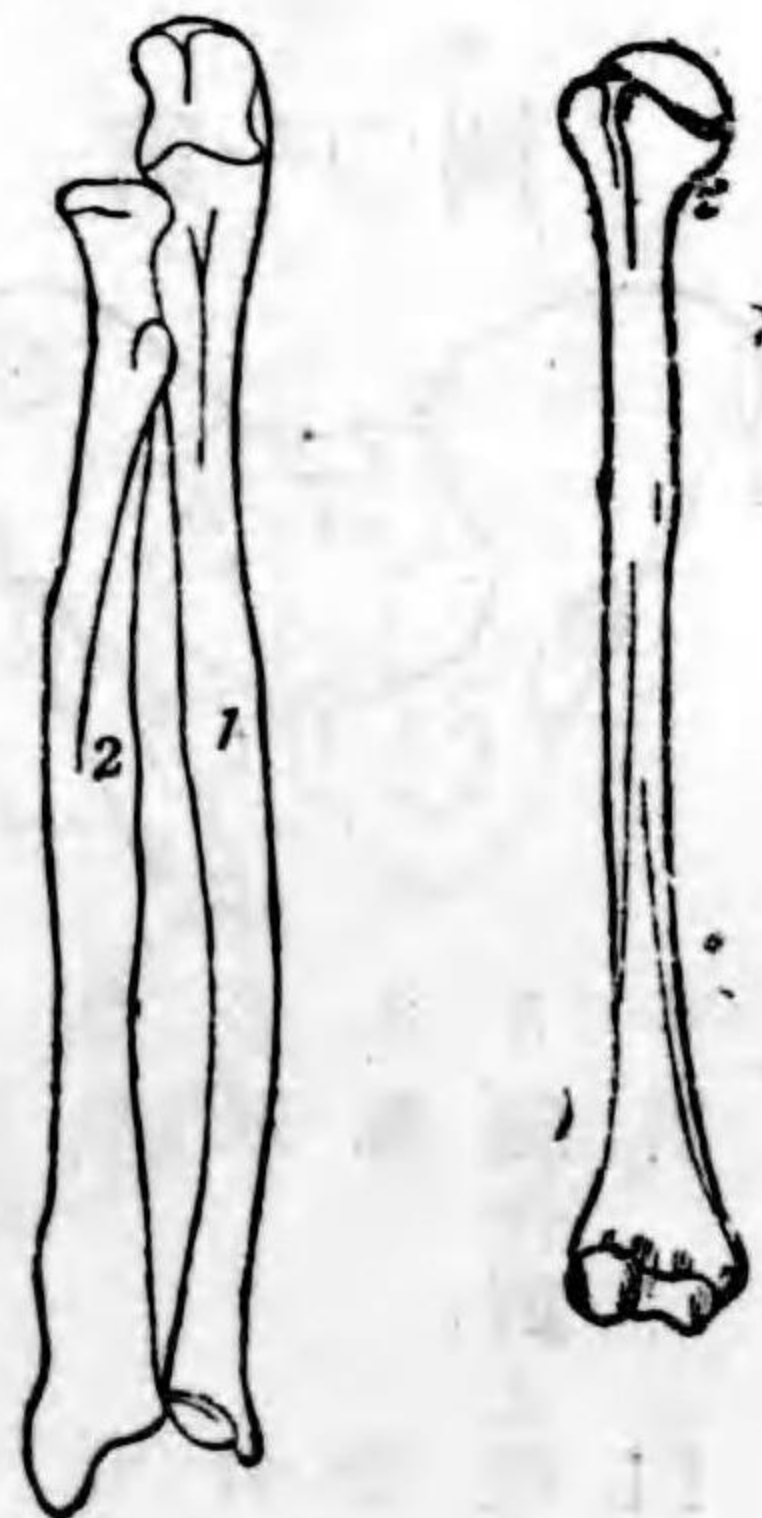
圖五一第



1 乃至 8 腕骨
1 乃至 5 掌骨
1 乃至 3 指骨

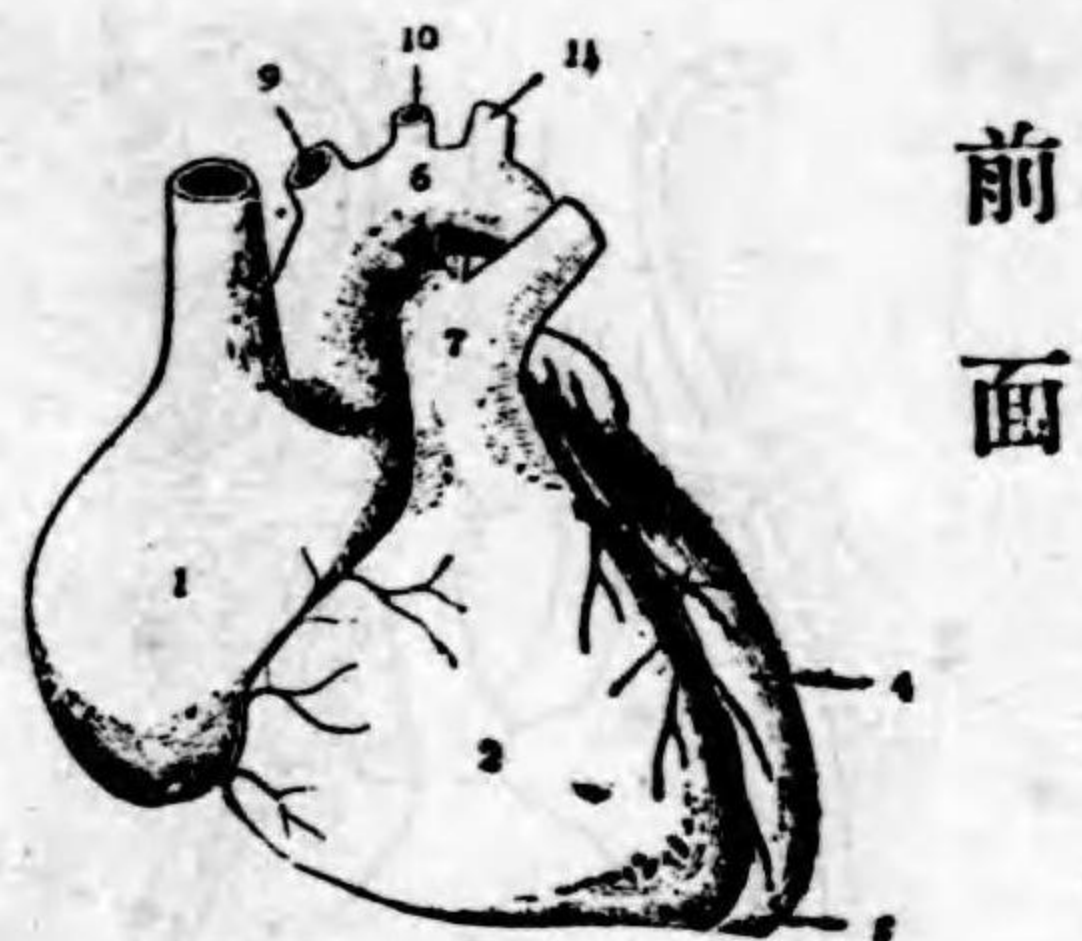
圖四一第 圖三一第

1 尺骨
2 橈骨



六

圖三二第



前面



後面

- | | | | | | | | | | | |
|--------|-------|------|----|-----|-----|----|----|----|----|----|
| 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 左鎖骨下動脈 | 左總頸動脈 | 無名動脈 | 靜脈 | 肺動脈 | 大動脈 | 心尖 | 左室 | 左房 | 右房 | 右室 |

圖二二第



弛緩セル筋



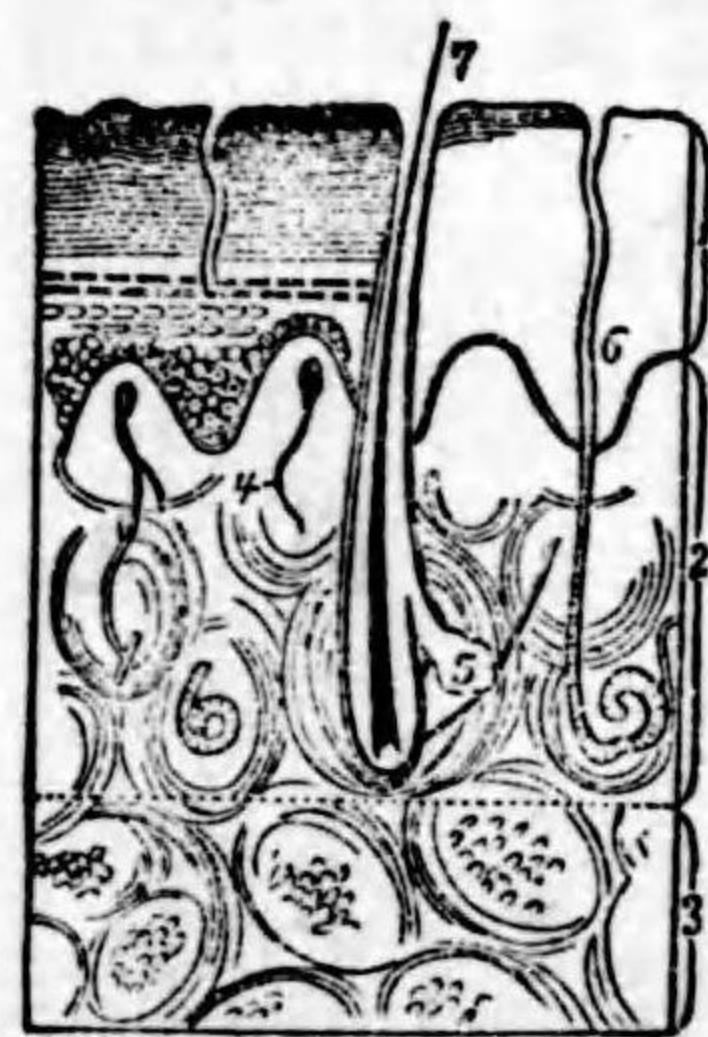
收縮セル筋

圖〇二第



1 關節囊
2 關節軟骨

圖一二第



- | | | | | | | |
|---------|--------|---|---|---|---|---|
| 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 毛汗支神皮真表 | 腺腺經織皮皮 | 脂 | 下 | 結 | 縮 | 皮 |

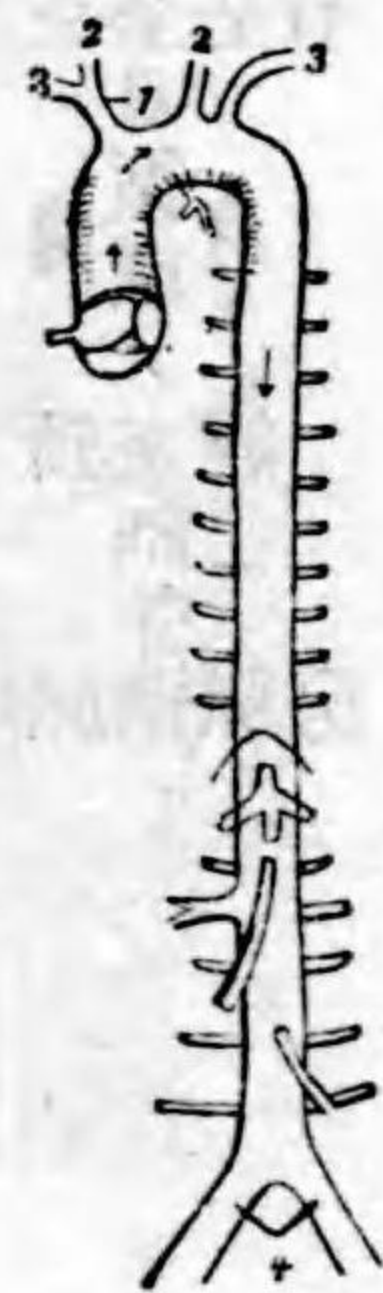
圖七二第



- | | | | | | | | | | | | |
|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|-----|----|---|
| 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 胫骨動脈 | 脛骨動脈 | 股骨動脈 | 總腸骨動脈 | 尺骨動脈 | 橈骨動脈 | 上肢動脈 | 鎖骨下動脈 | 總頸動脈 | 腎動脈 | 心臟 | 肺 |

二

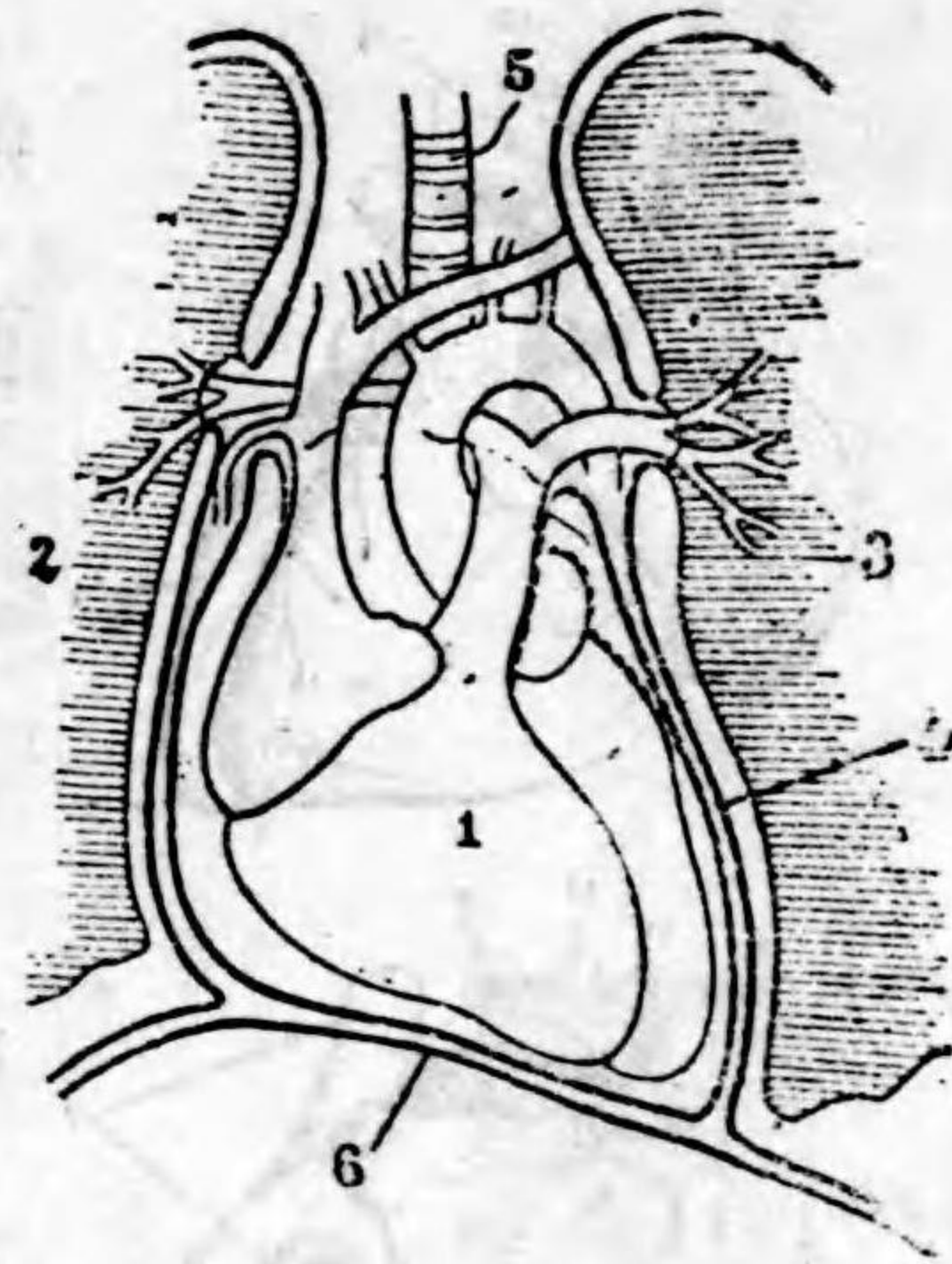
圖六二第



- | | | | |
|-------|-------|------|------|
| 4 | 3 | 2 | 1 |
| 總腸骨動脈 | 鎖骨下動脈 | 總頸動脈 | 無名動脈 |

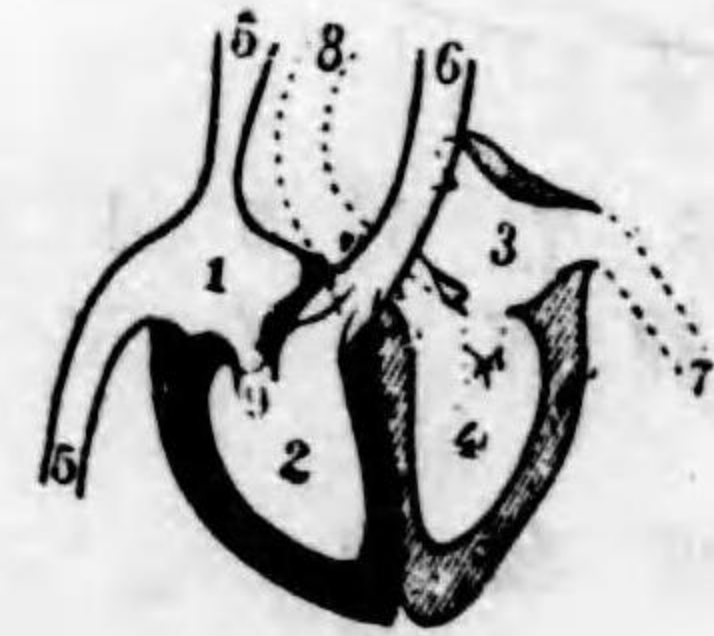
圖四二第

- | | |
|------|----|
| 4 | 1 |
| 心臟 | 心臟 |
| 5 | 2 |
| 右氣管 | 右肺 |
| 6 | 3 |
| 左橫膈膜 | 左肺 |



圖五二第

- | | | |
|-----|-----|----|
| 7 | 4 | 1 |
| 肺靜脈 | 左室 | 右房 |
| 8 | 5 | 2 |
| 大動脈 | 靜脈 | 右室 |
| 9 | 6 | 3 |
| 瓣膜 | 肺動脈 | 左房 |

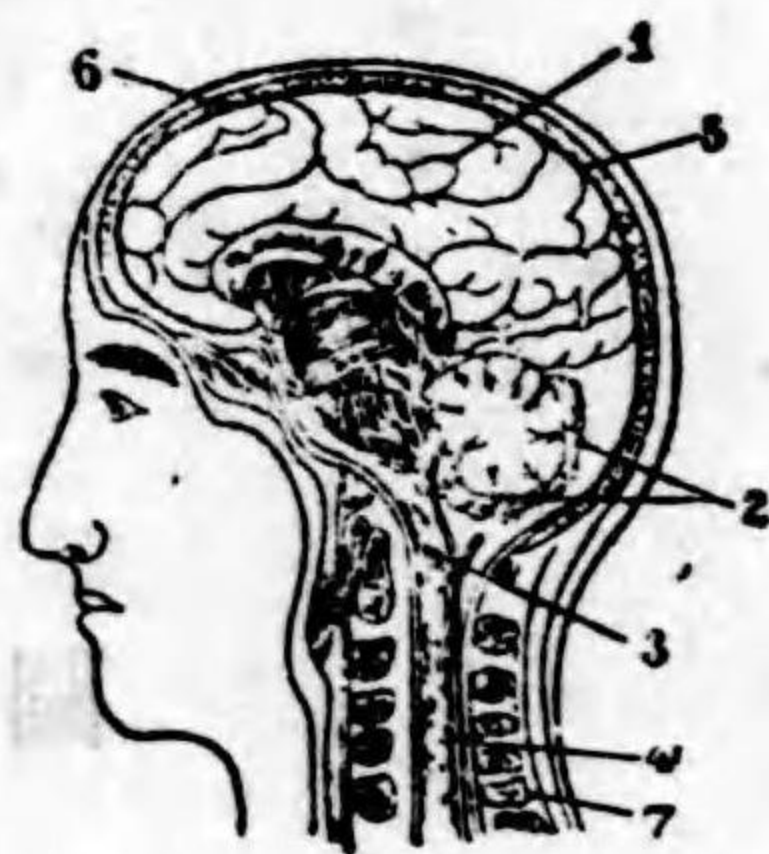


圖一三第



1 腦
2 脊 髓
3 腦 膜
4 脊 髓 膜

圖〇三第



1 大 腦
2 小 腦
3 延 髓
4 脊 髓
5 腦 蓋 膜
6 頭 蓋 骨
7 頸 椎 骨

圖八二第



1 右 肺
2 左 肺
3 左 全 身
4 右 全 身
5 左 全 身
6 右 全 身
7 左 全 身
8 右 全 身
9 左 全 身
10 右 全 身

動 脈 網 房
靜 脈 網 房

毛 細 管

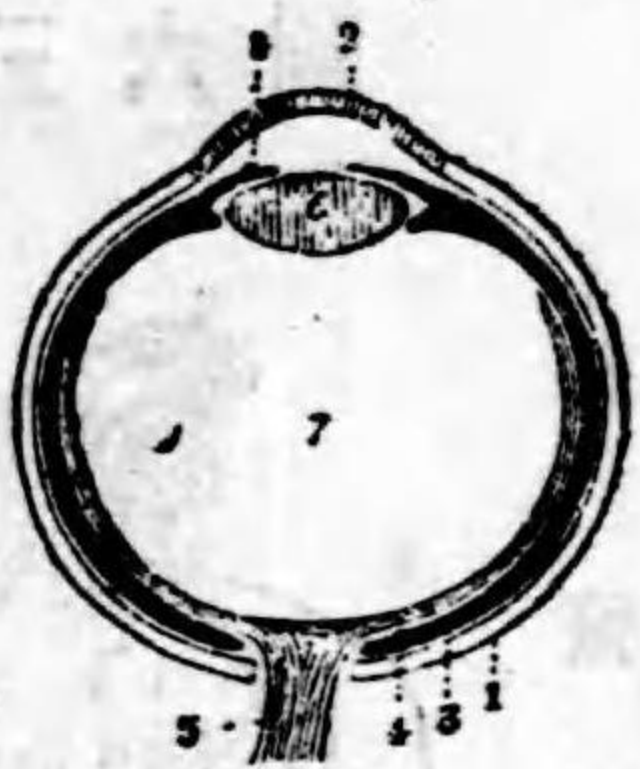
圖九二第



1 淋 巴 腺
2 淋 巴 管

7 5 3 1
 硝視脈鞏
 子神絡
 體經膜膜

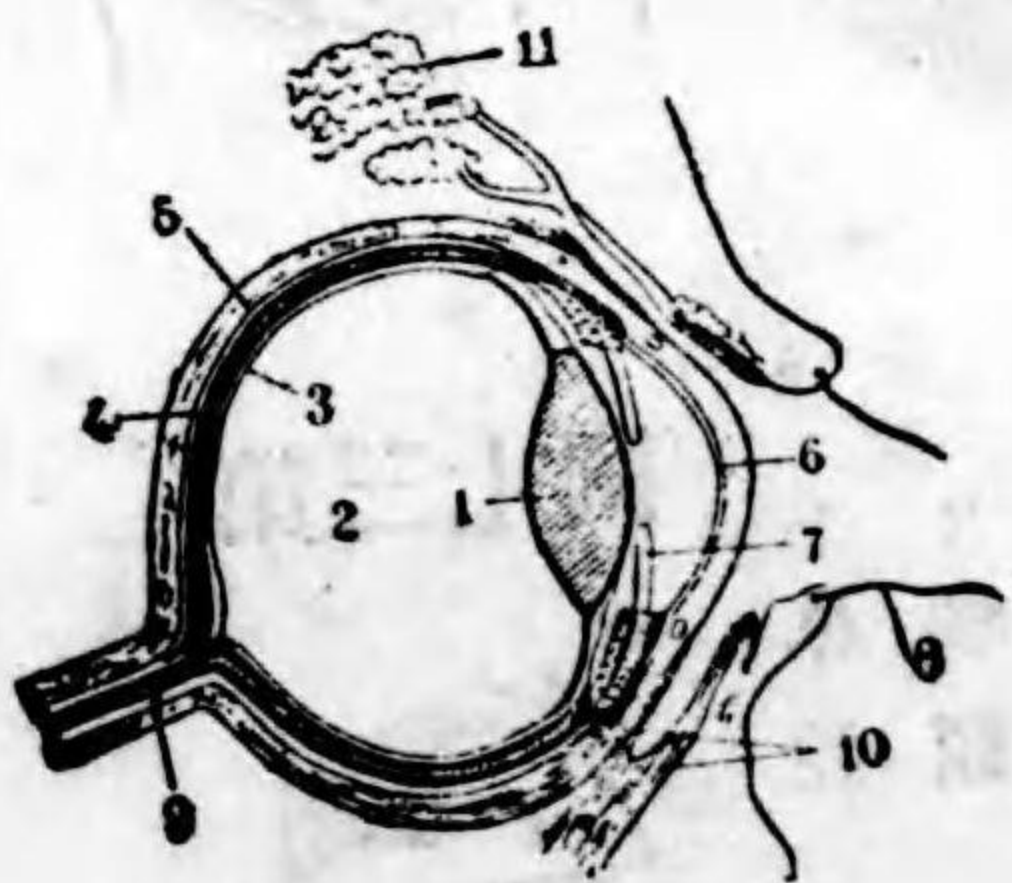
圖四三第



8 6 4 2
 虹水網角
 晶
 彩體膜膜

斷平地球眼

圖五三第



11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
 淚結視睫虹角鞏脈網硝水
 腺膜經毛彩膜脈膜膜體晶
 腺膜經毛彩膜脈膜膜體晶

圖二三第



1 脊
 髓
 2 脊
 髓
 膜
 3 脊
 柱
 管

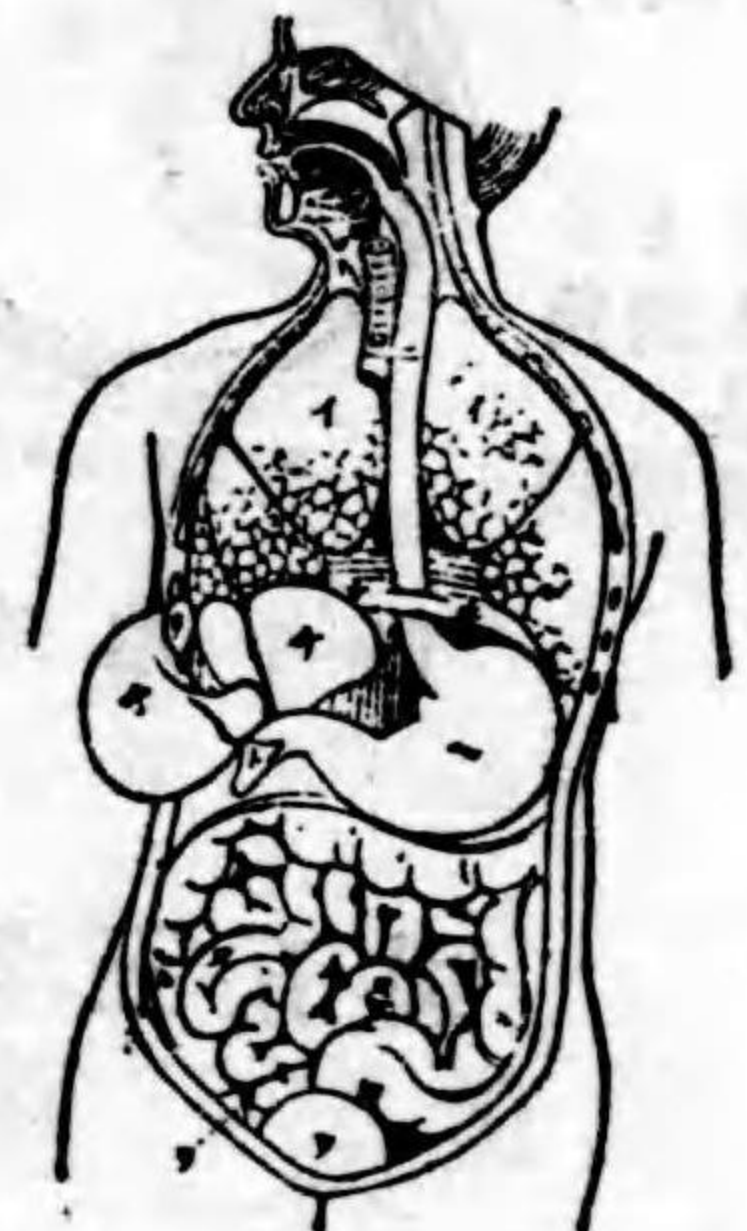
圖三三第



1 外
 聽
 道
 2 鼓
 膜
 3 中
 耳
 4 歐
 氏
 管
 5 內
 耳
 6 耳
 7 耳
 8 耳
 翼

圖六三第

ワルリトホハイ
 膀大膽十横咽肺
 胱腸囊腸膜頭臟



ヲヌチヘニ口
 蟲小肝胃食氣
 樣突腸臟道管

圖七三第

3 1
 喉 鼻
 頭 腔
 4 2
 氣 咽
 管 頭



圖八三第



4 3 2 1
 肺 氣管枝 氣管 喉頭

圖九三第

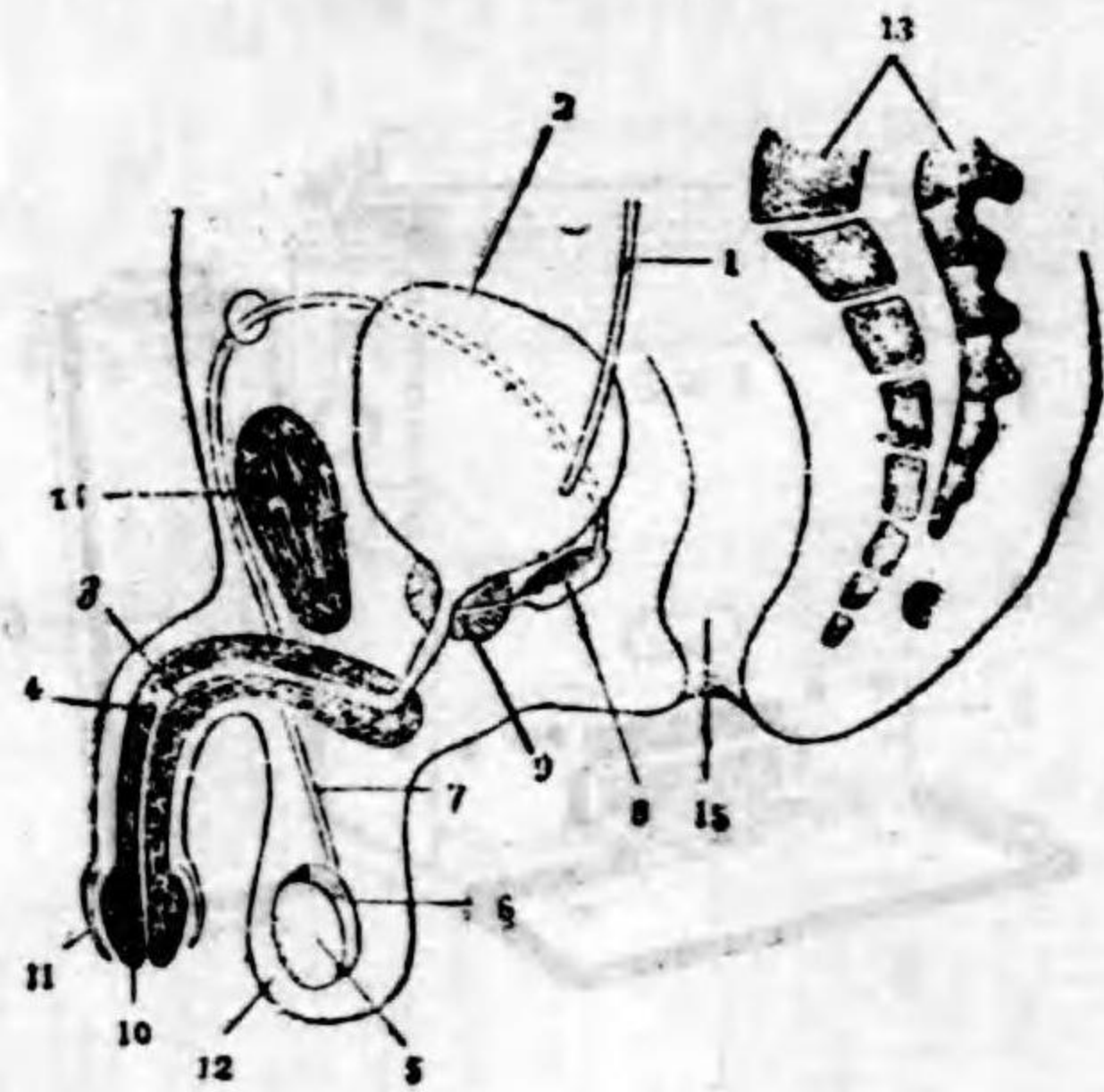
5 4 3 2 1
 小胃食咽口
 腸道頭腔



6
 大腸
 10 9 8 7
 肝直盲蟲
 腸腸垂

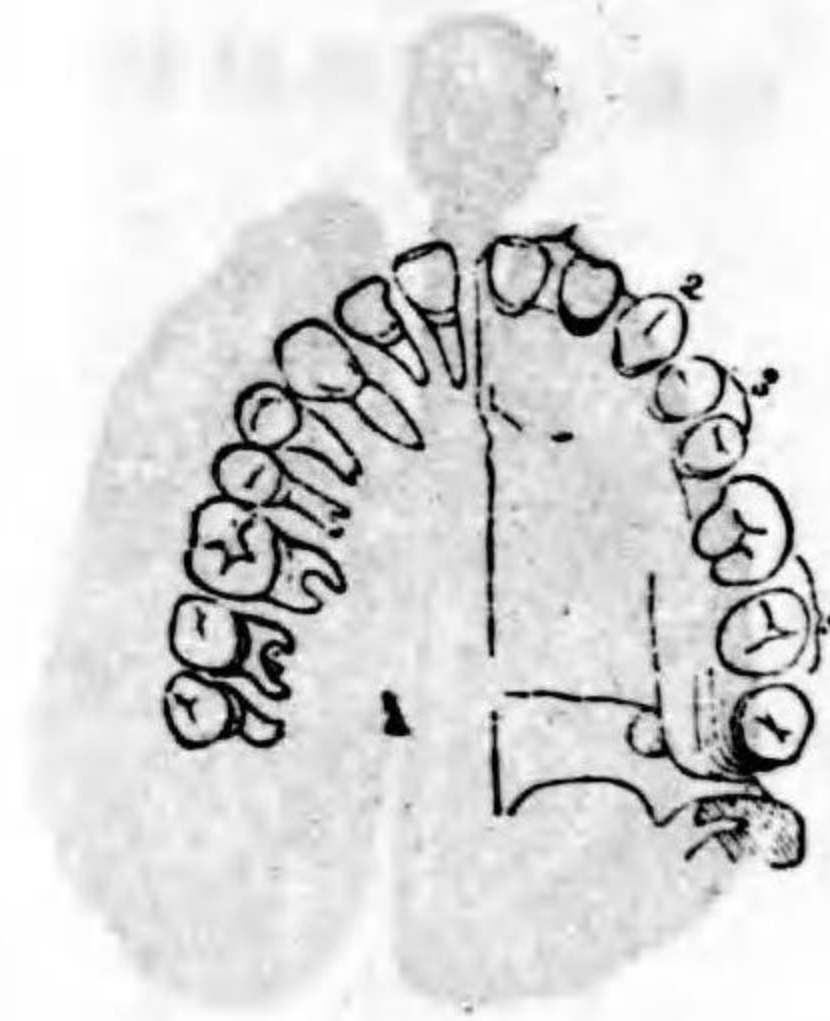
14 13 12 11
 膽鼻喉脾
 囊腔頭

圖二四第



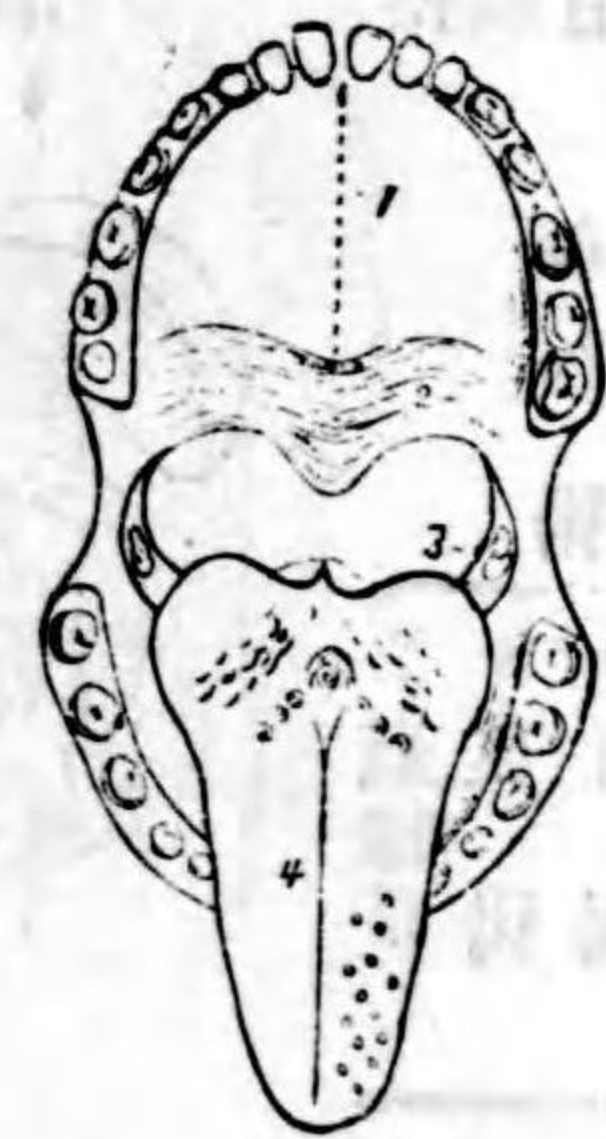
- 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
 直 耻 脊 陰 包 龜 攝 精 精 副 畢 陰 尿 膀 輸
 腸 骨 椎 囊 皮 頭 護 囊 系 丸 丸 莖 道 胱 尿管

圖一四第



- 4 3 2 1
 大 小 犬 門
 白 齒 齒 齒 齒

圖〇四第

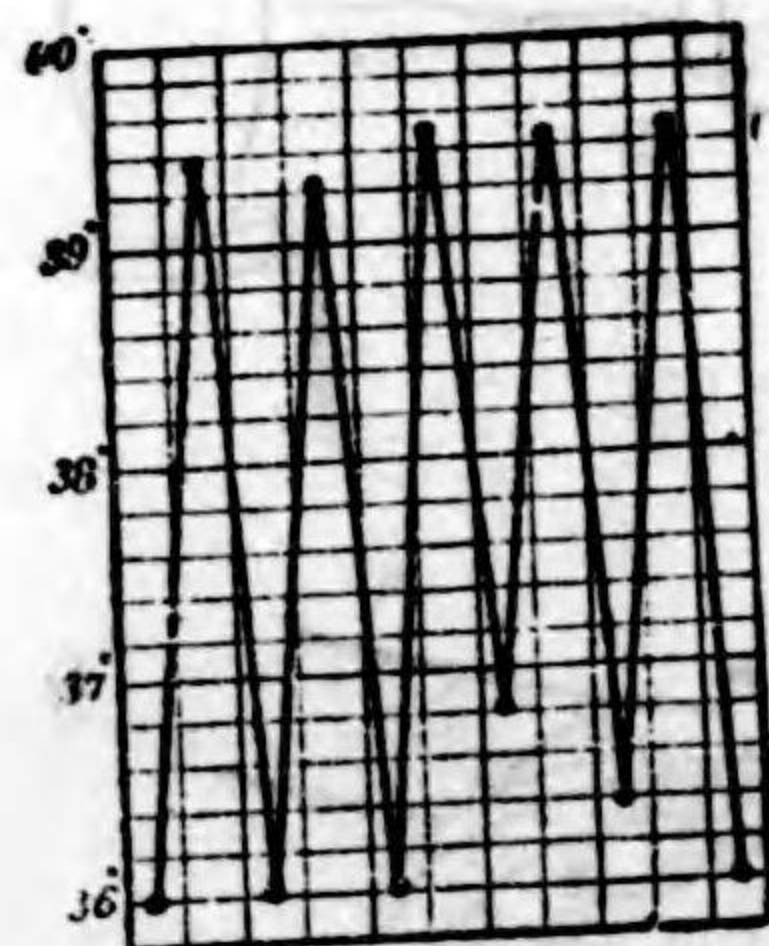


- 4 3 2 1
 舌 扁桃腺 軟口蓋 硬口蓋

圖四四第

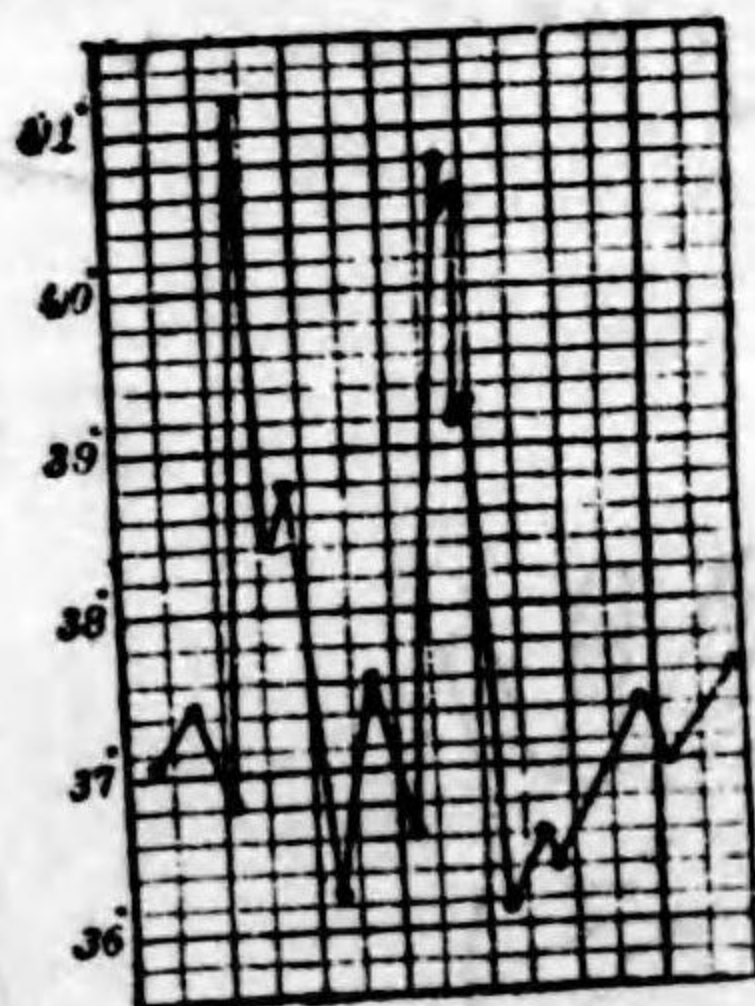


圖六四第

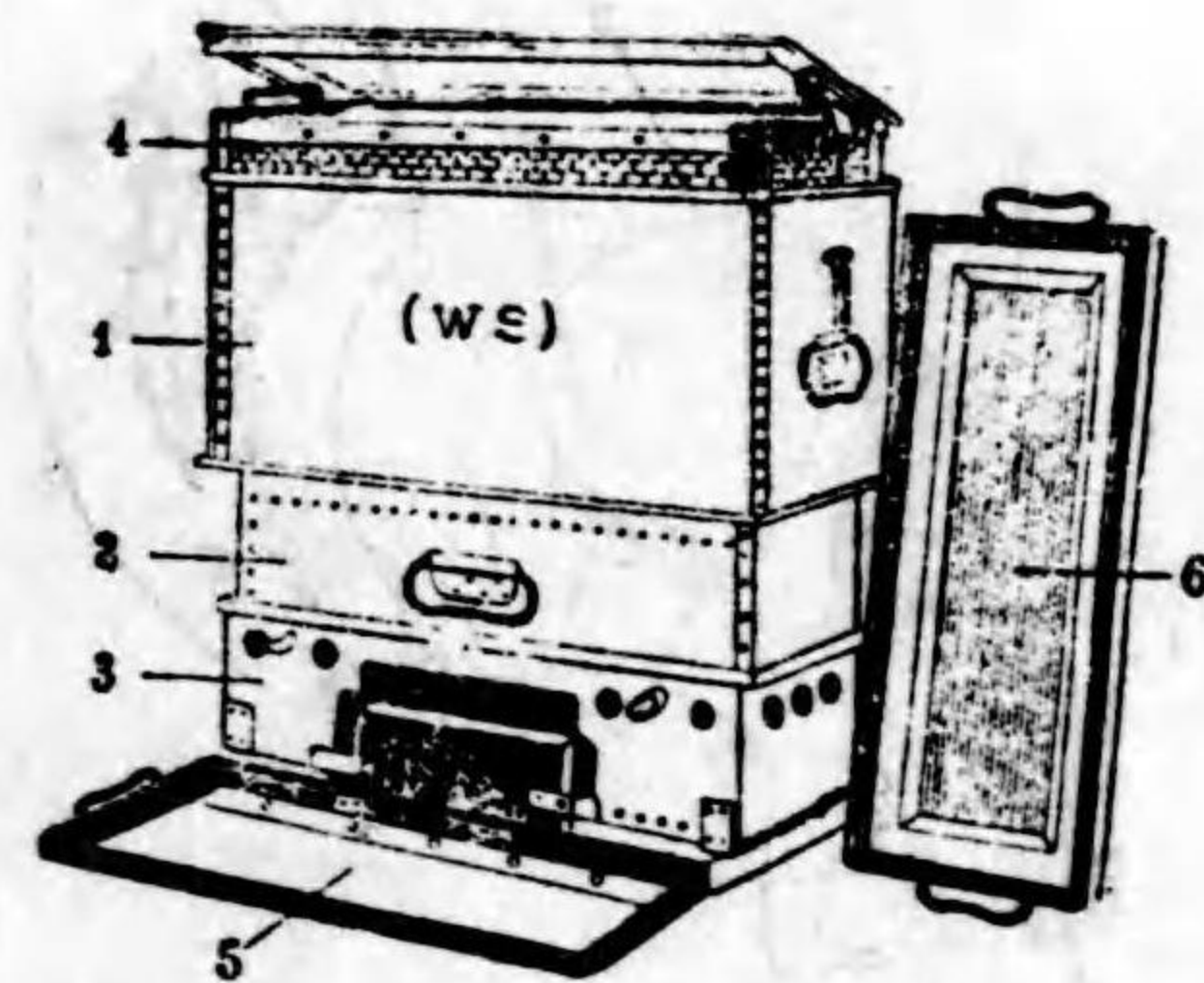


圖五四第

熱日隔

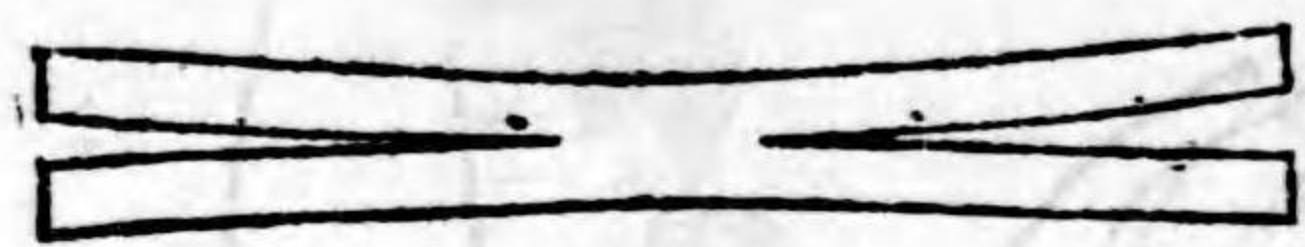


圖三四第



- 1 「カーゼ」滅菌槽
- 2 器械滅菌槽
- 3 爐
- 4 金網籠
- 5 盤
- 6 蓋

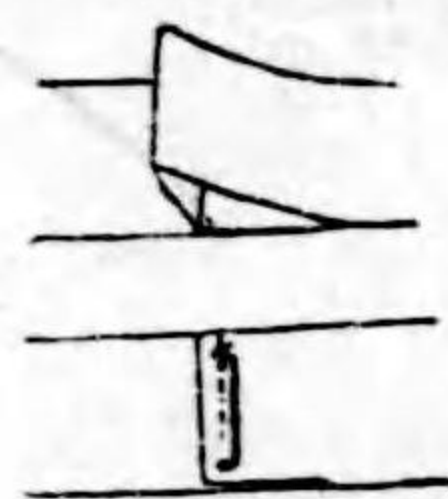
圖〇五第



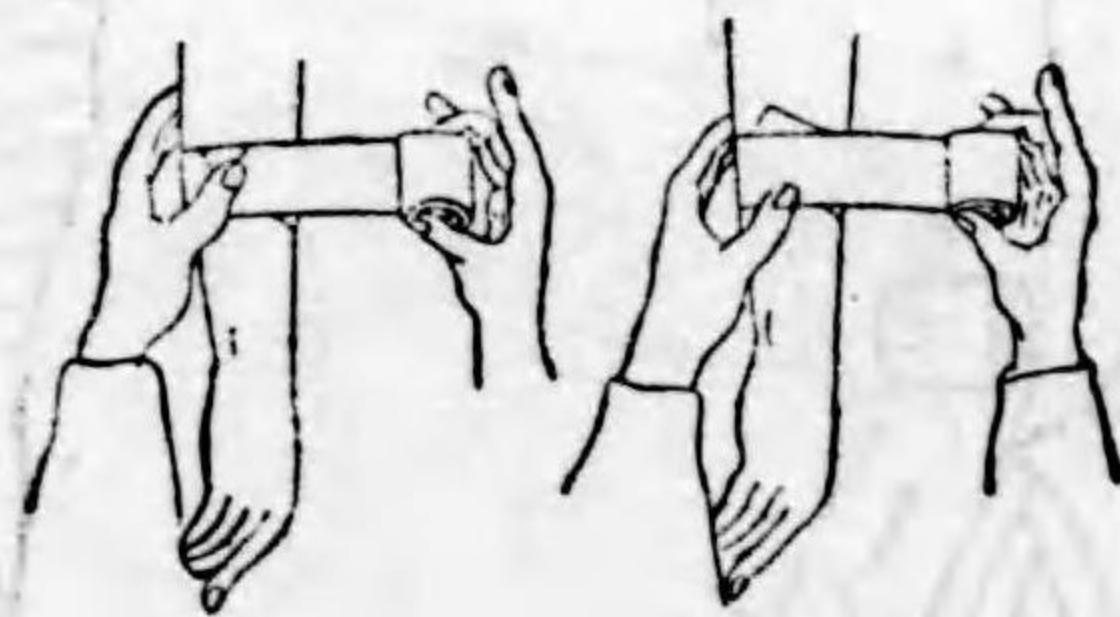
圖九四第



圖一五第



圖二五第

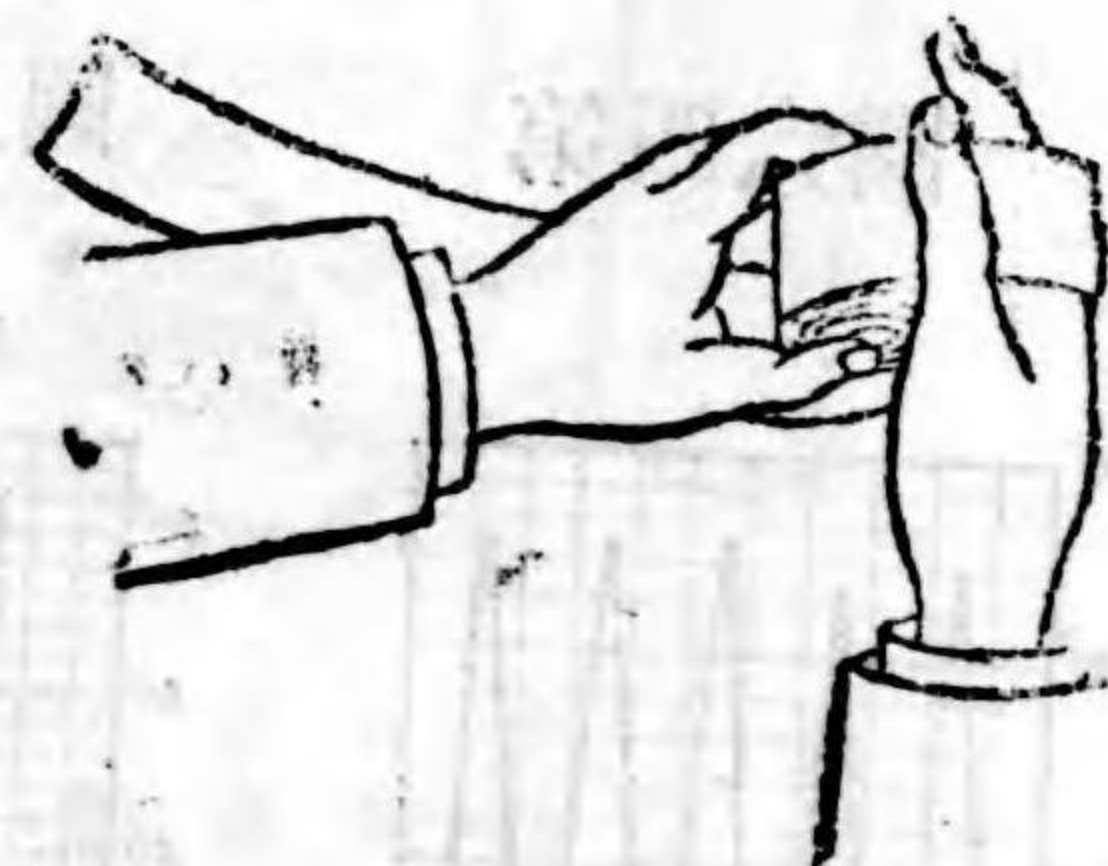
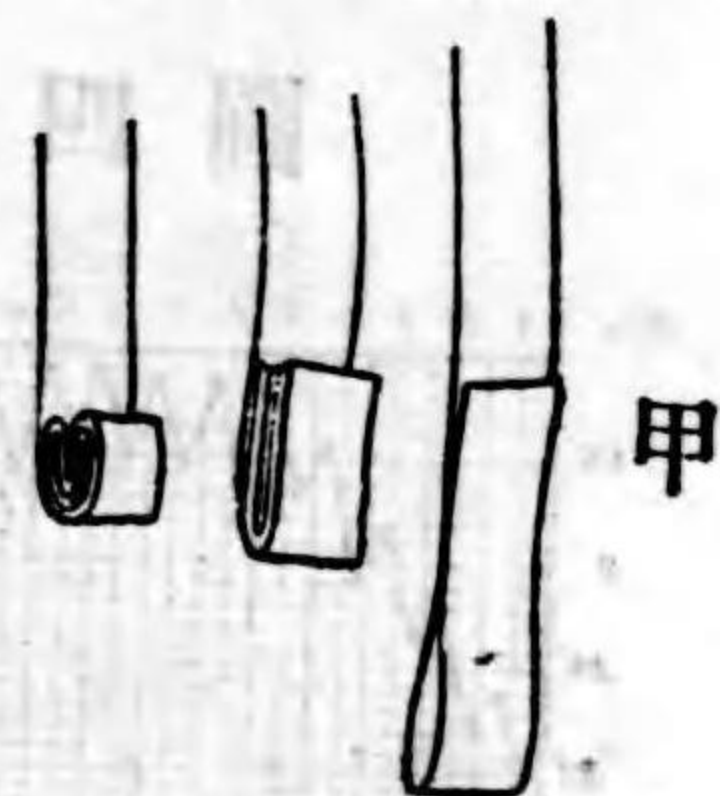


三

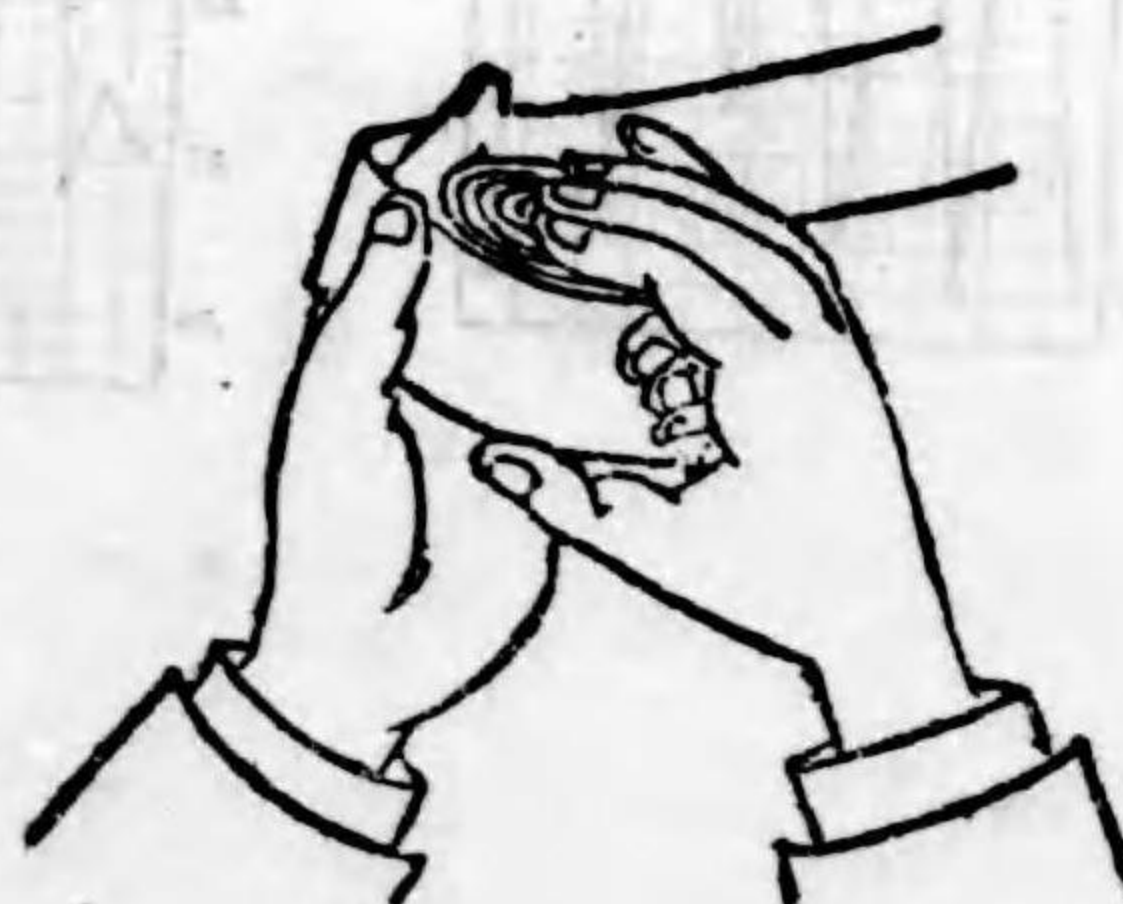
圖八四第



圖七四第



乙

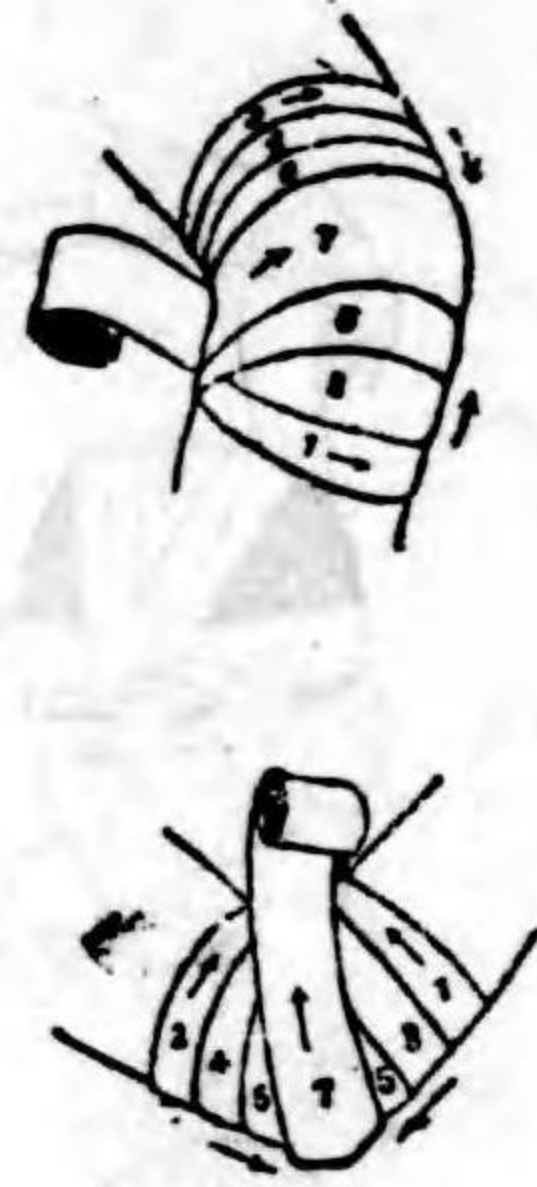


丙 三

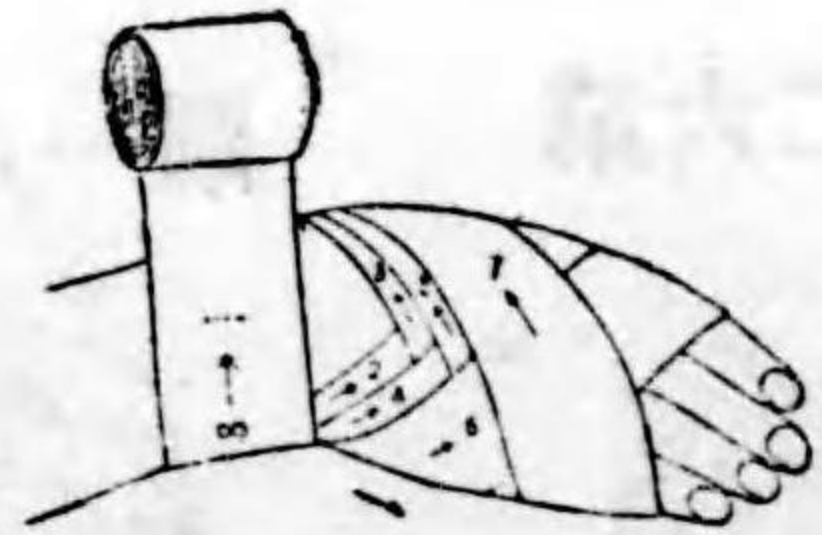
圖八五第



圖七五第



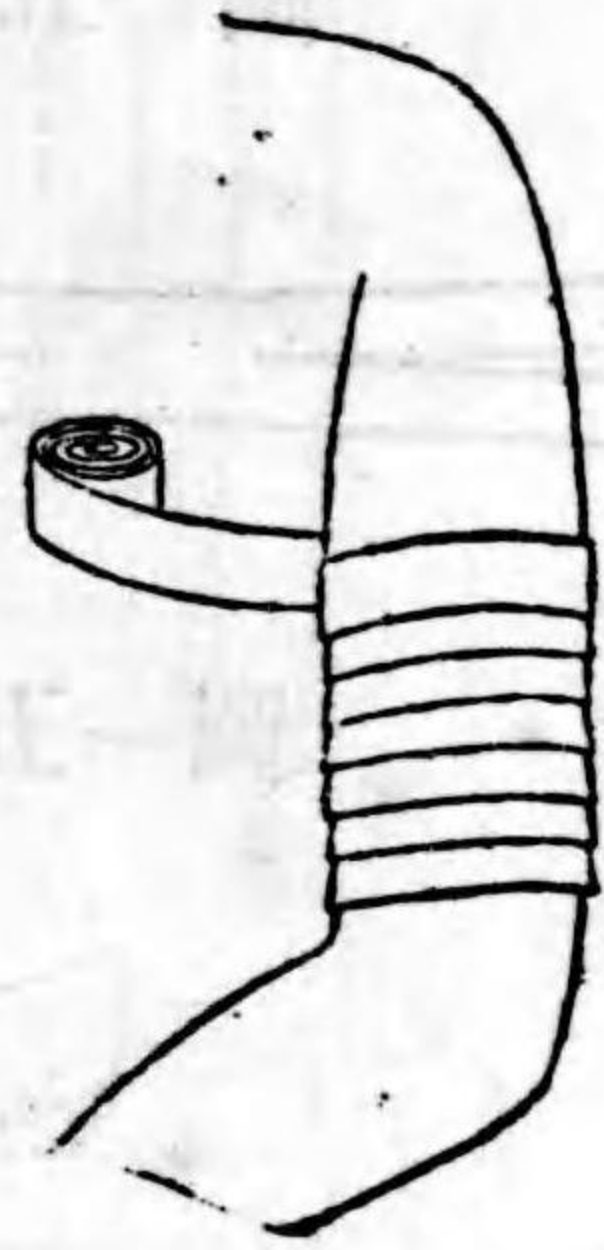
圖九五第



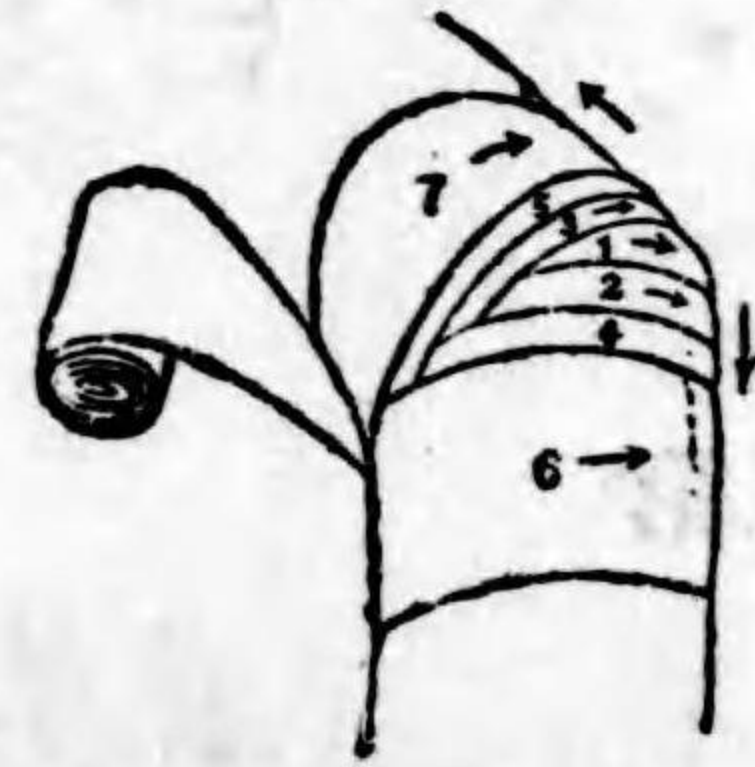
圖五五第



圖三五第



圖六五第



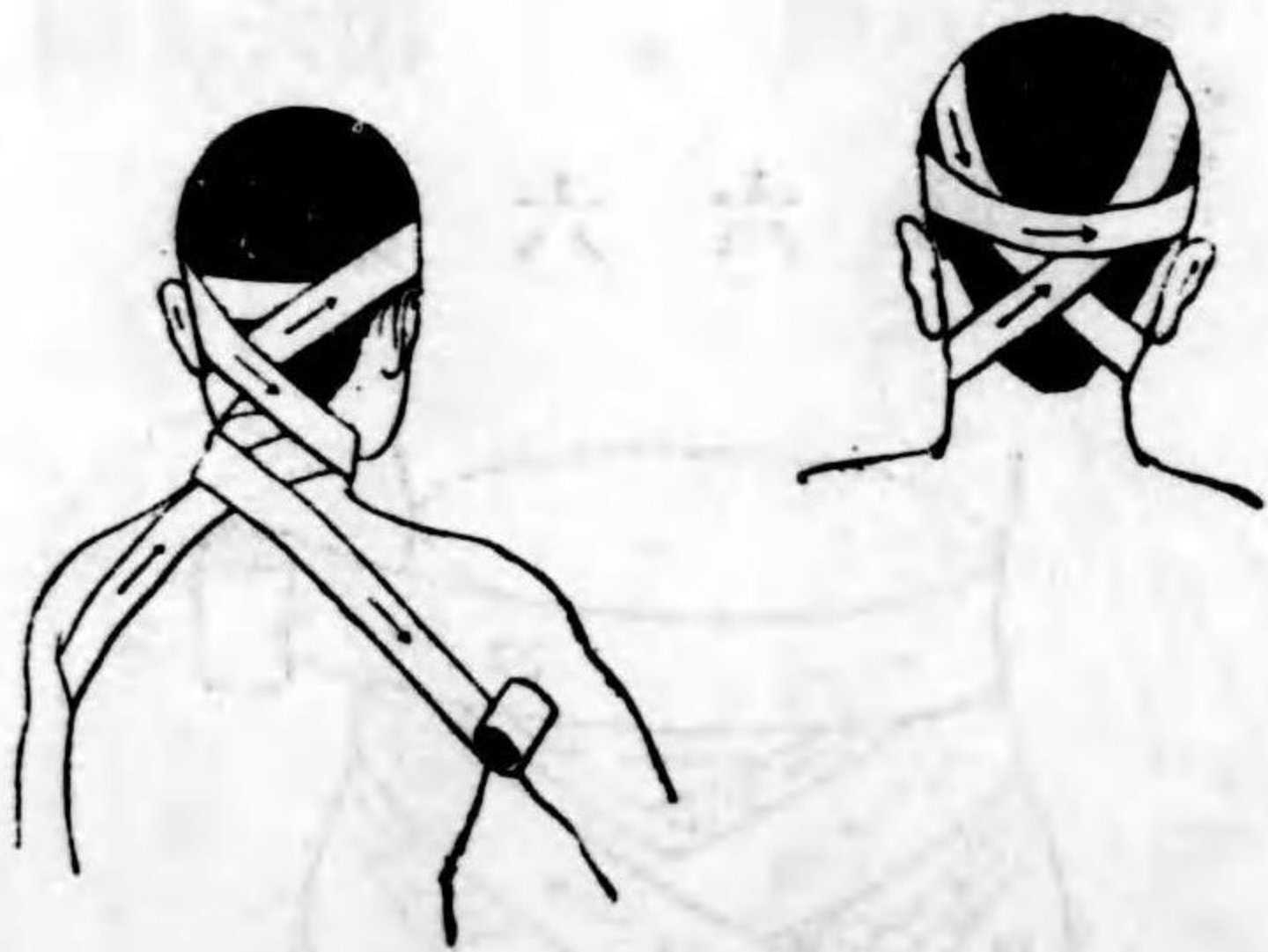
圖四五第



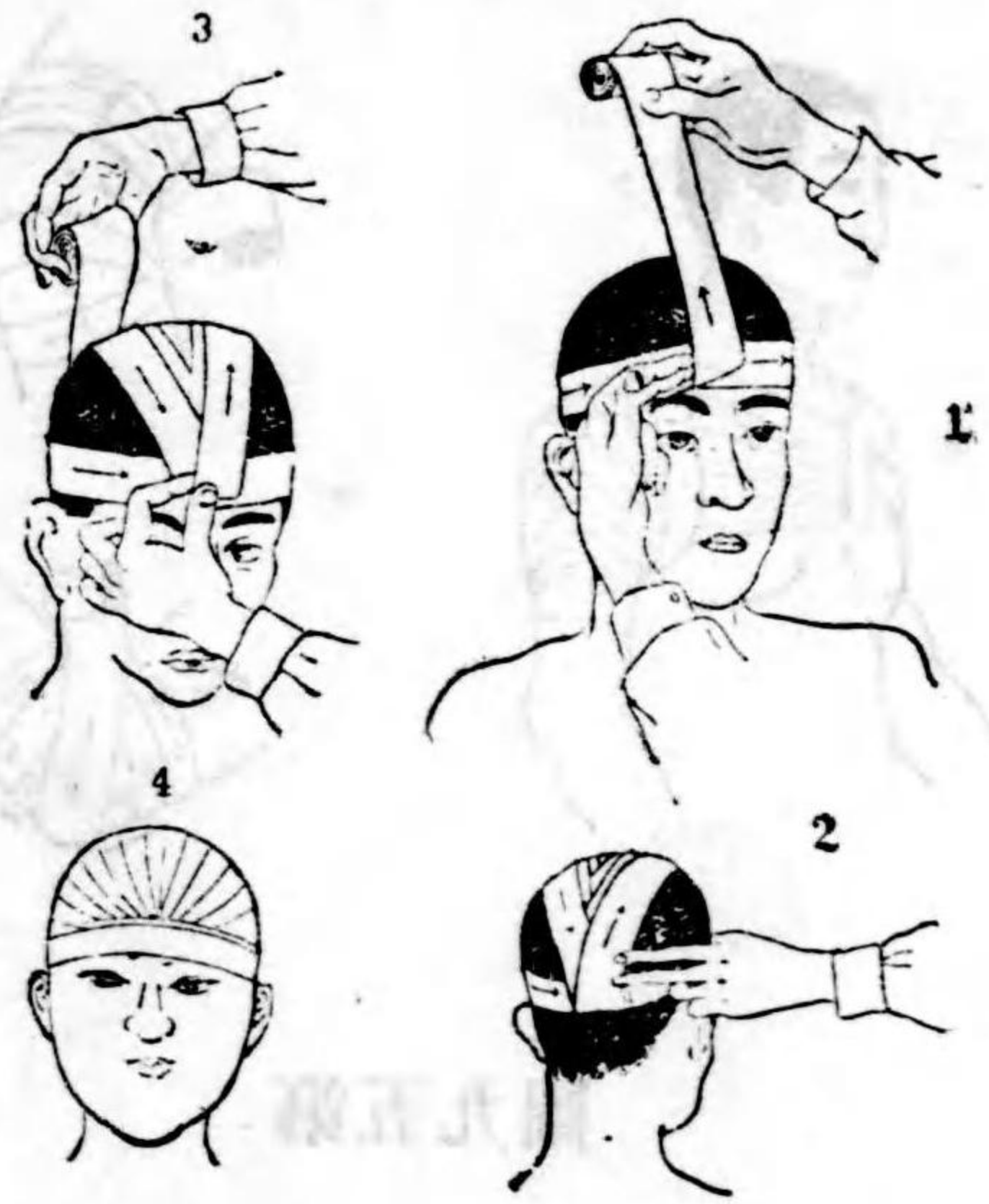
圖三六第



圖四六第



圖〇六第



圖二六第

圖一六第



圖七六第



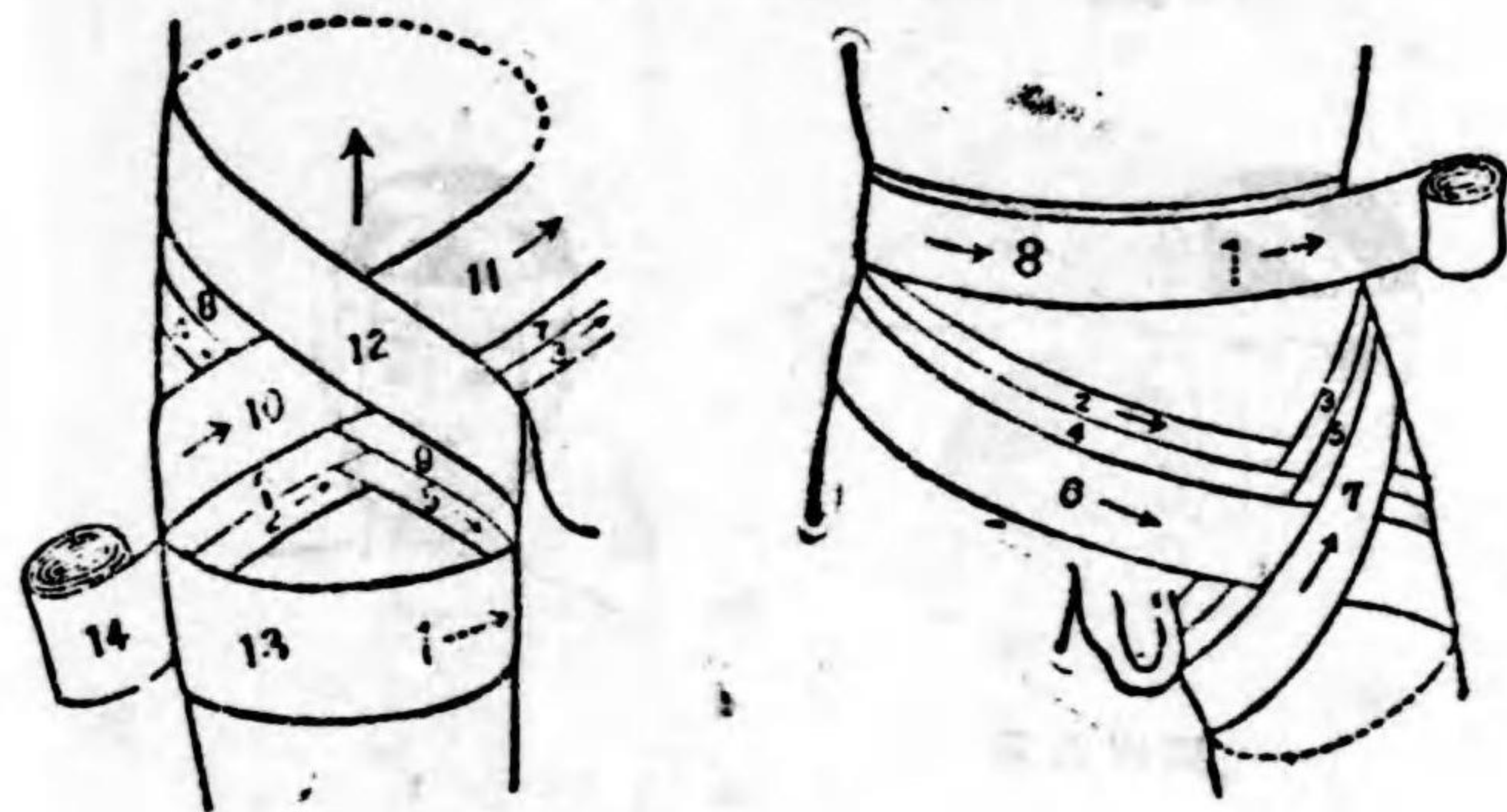
圖九六第



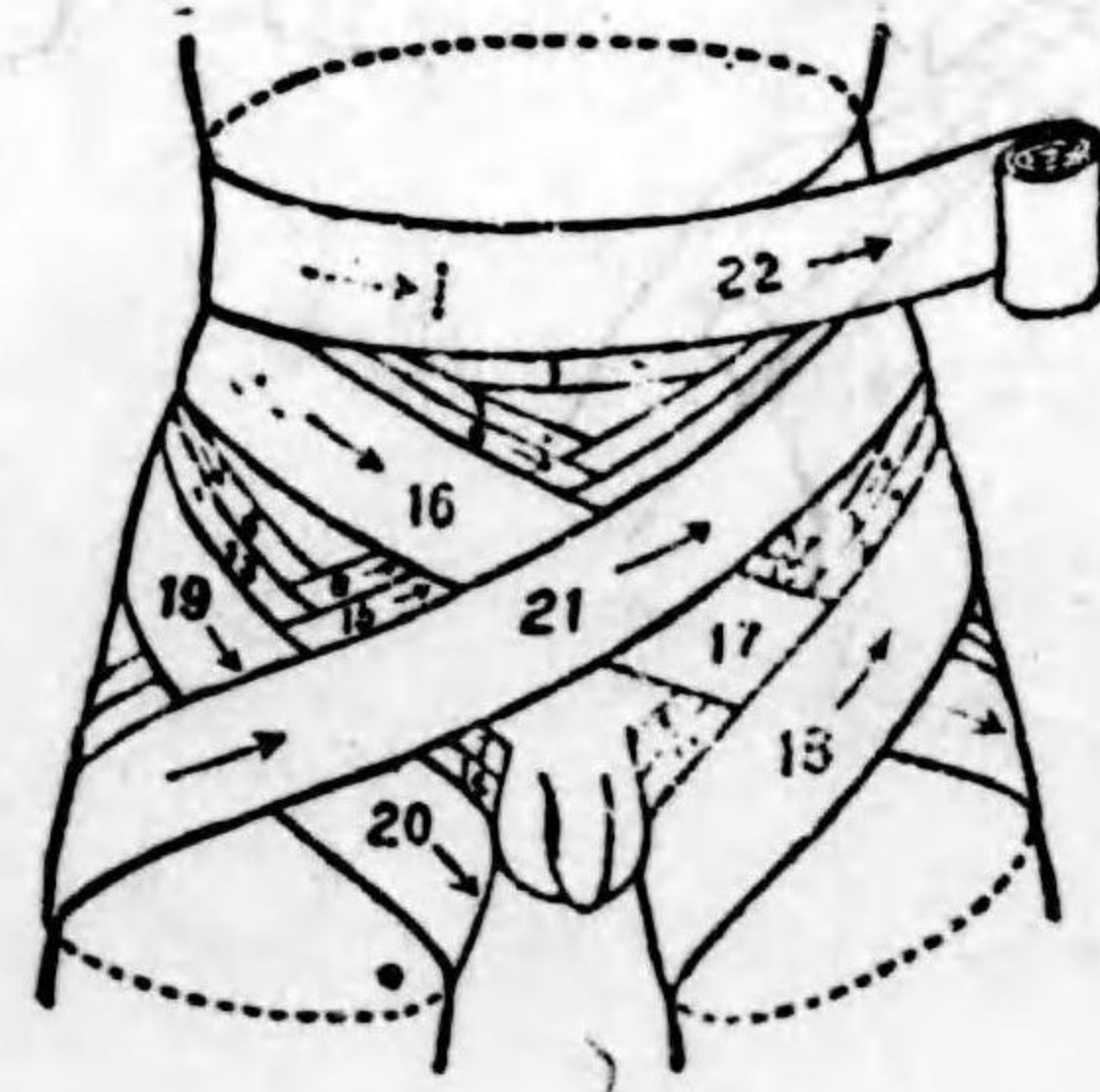
圖八六第



圖五六第



圖六六第



圖四七第



圖五七第



圖六七第



圖三七第



圖一七第



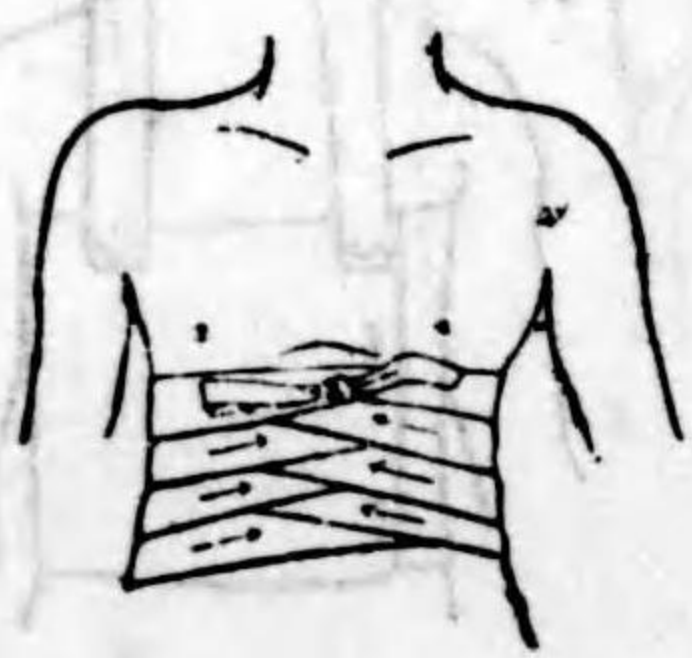
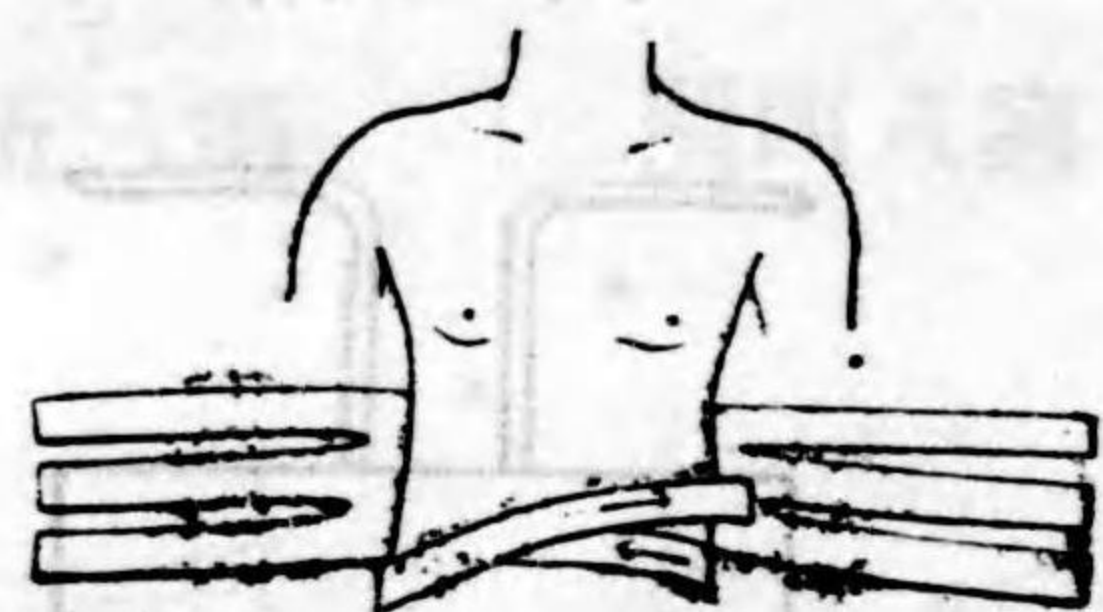
圖〇七第



圖二七第



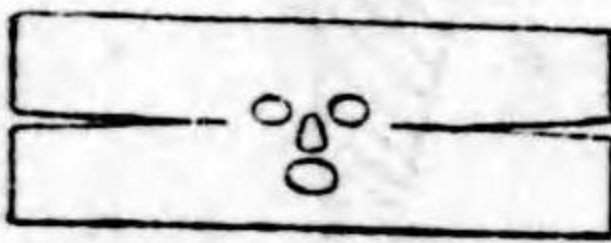
圖二八第



圖九七第



圖〇八第



圖一八第



圖七七第

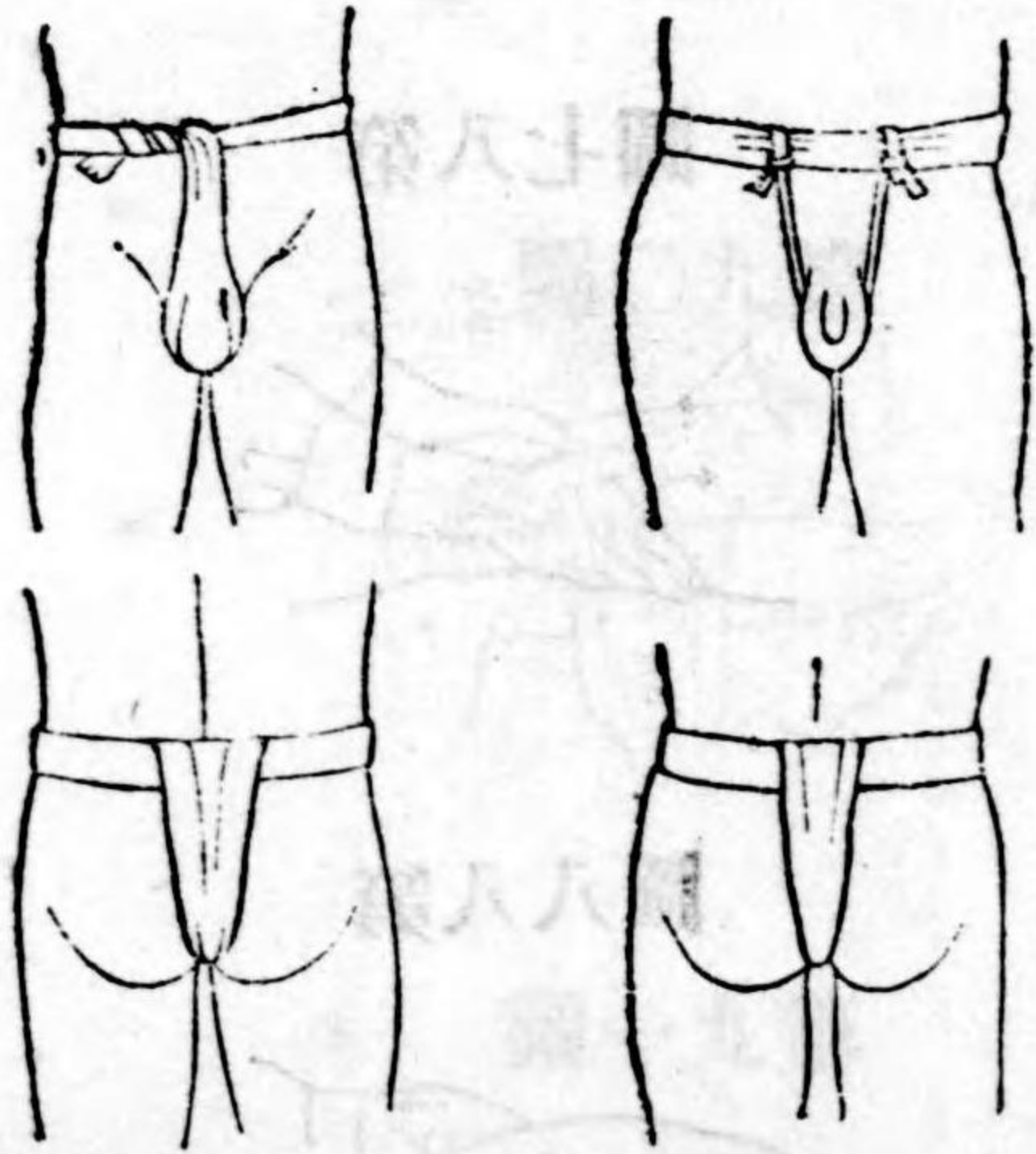


圖八七第

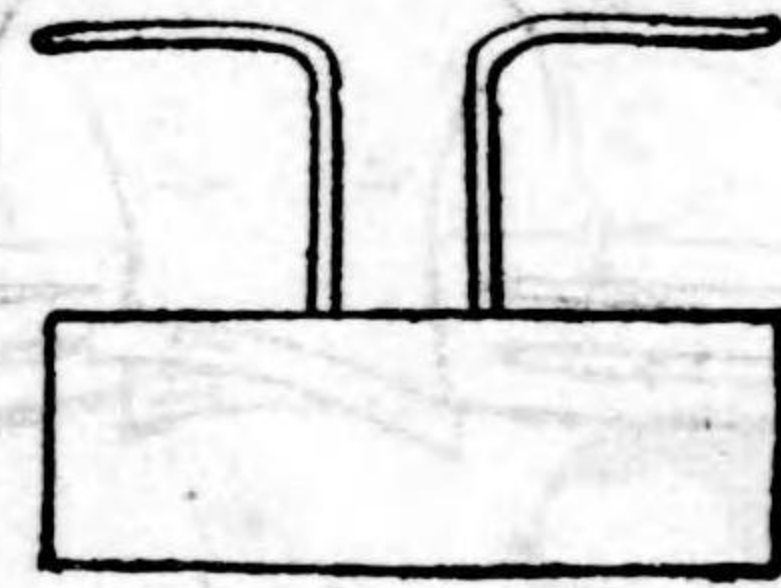


圖五八第

圖四八第



圖三八第



圖九八第



圖〇九第



圖一九第



圖六八第



圖七八第



圖八八第



圖五九第



圖六九第



圖七九第



圖二九第



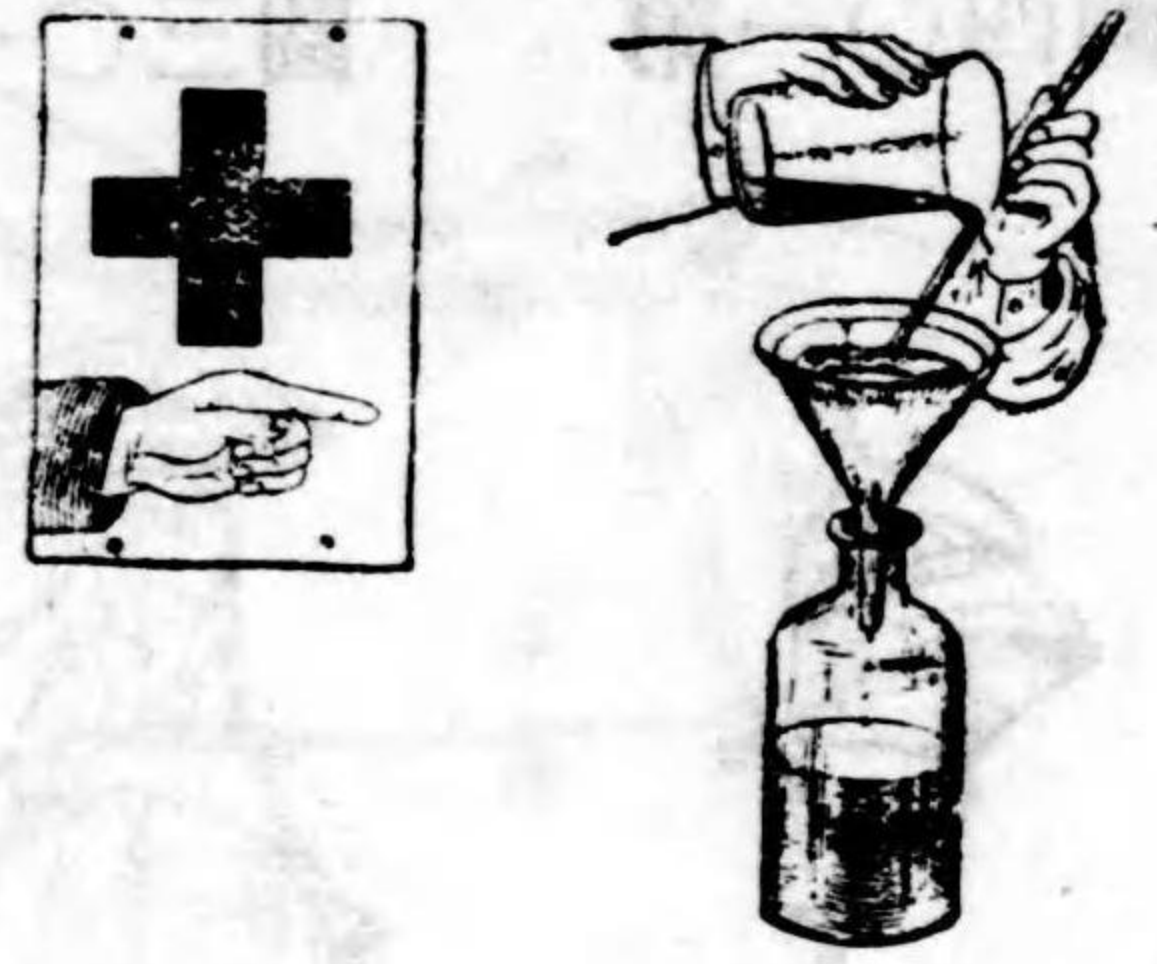
圖三九第



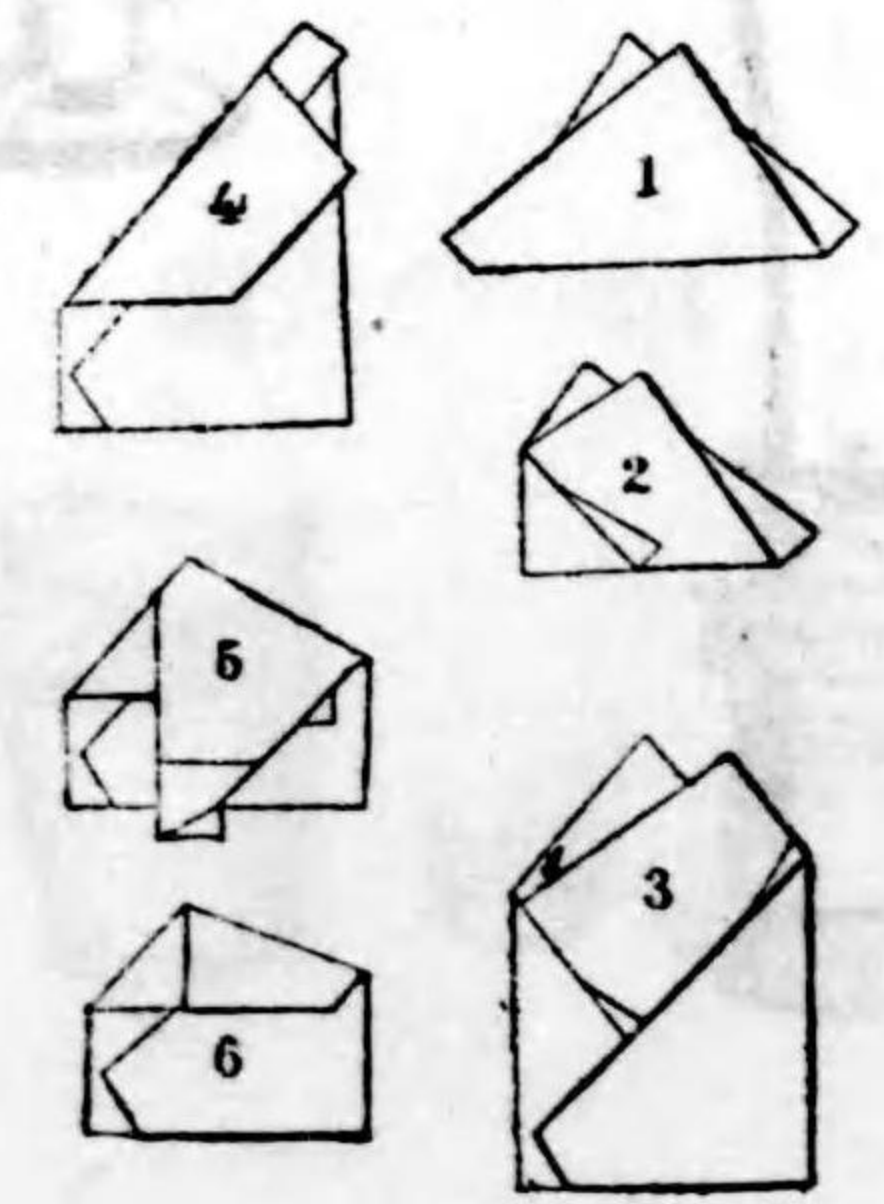
圖四九第



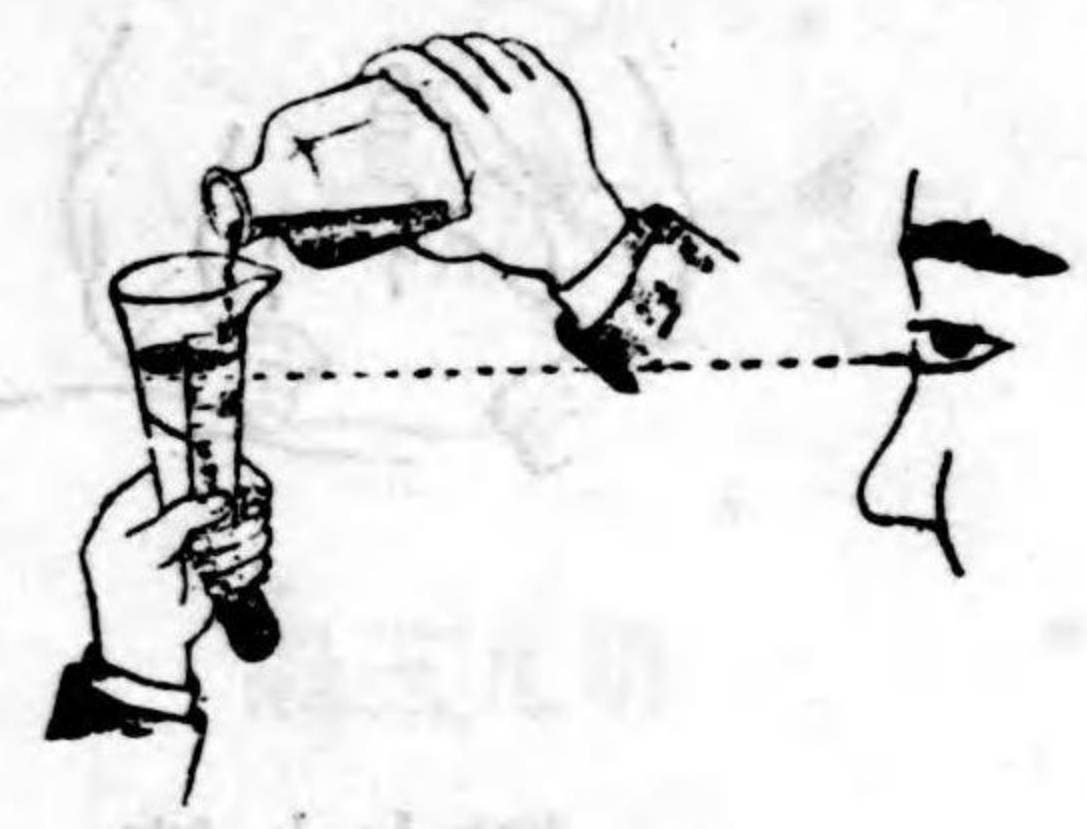
圖二〇一第 圖〇〇一第



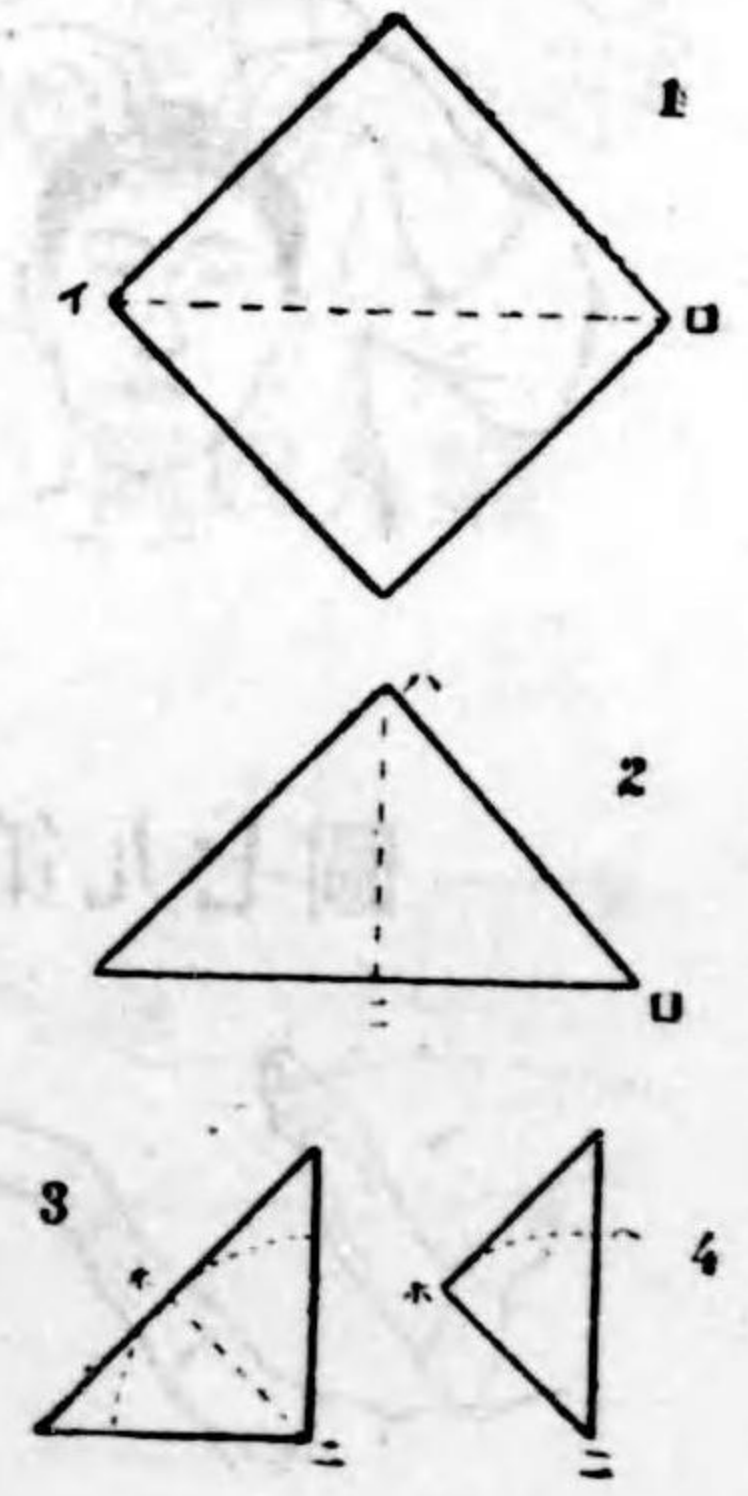
圖一〇一第



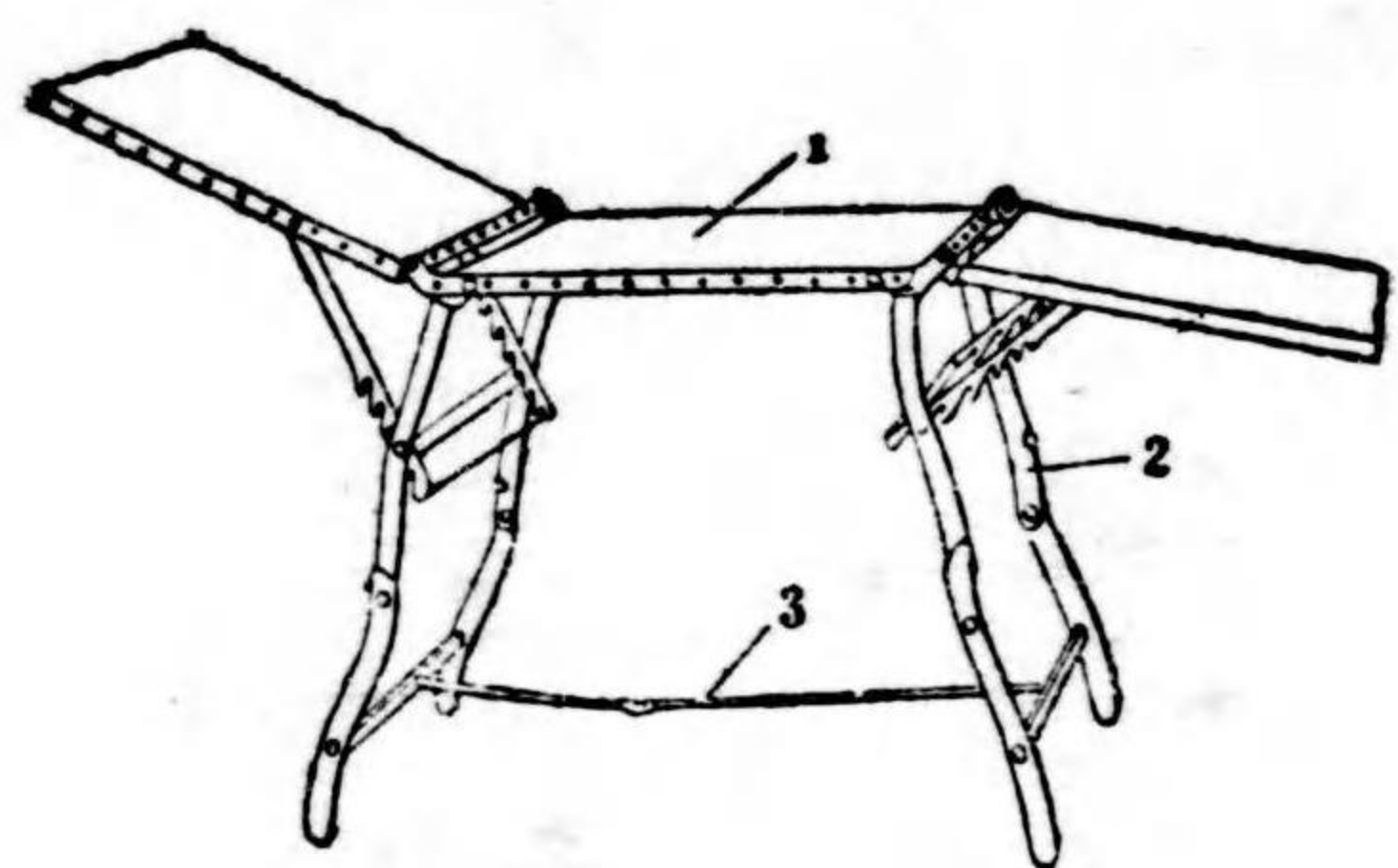
圖八九第



圖九九第



圖五〇一第



3 脚
2 脚
1 盤
張

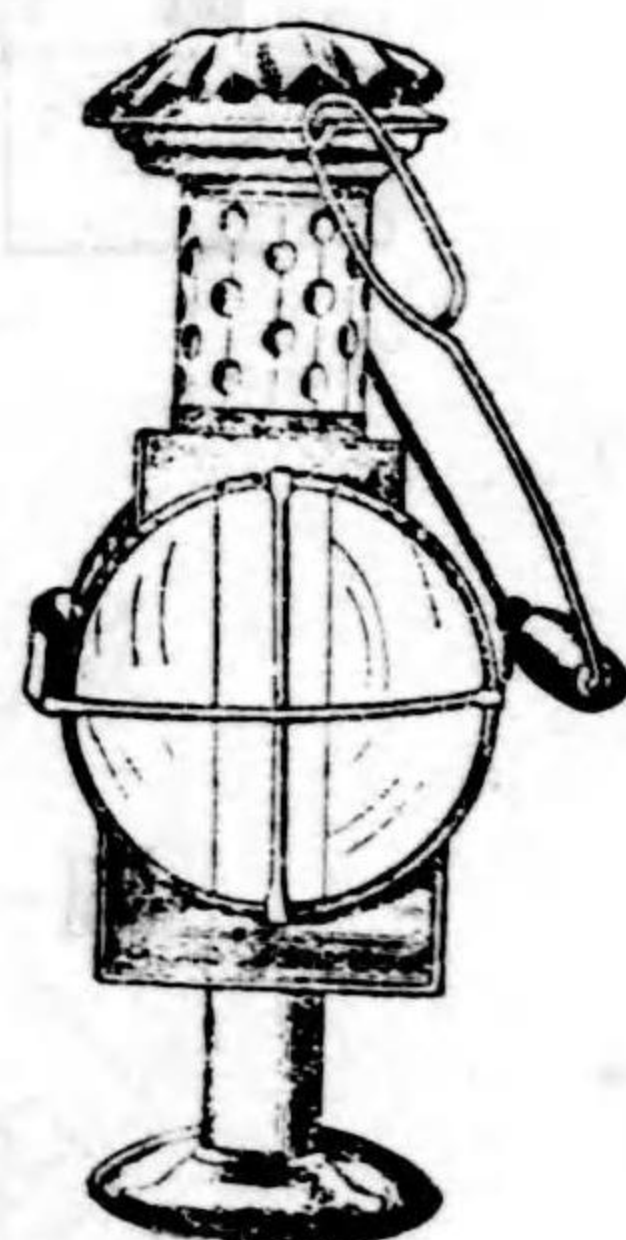
圖六〇一第



圖四〇一第



圖三〇一第





大正十三年四月十五日印刷
大正十三年四月二十日發行

(看護卒教程草案縮刷)

(定價金五拾錢)

京都府紀伊郡深草町字極樂七五八

翻刻發行 兼印刷者 和田忠次郎

京都市下京區三哲大宮東入

印刷所 三好印刷工場

京都市外深草師團前

陸軍省檢閱 軍隊教科書 發行所 和田武揚社

電話(伏)二八三番
振替(阪)二七九二番

291

743

終

